

[015]報告

大神, 智春
九州大学留学生センター : 助教授

吉川, 裕子
九州大学留学生センター : 助教授

清水, 百合
九州大学留学生センター : 教授

岡崎, 智己
九州大学留学生センター : 教授

他

<https://doi.org/10.15017/4776955>

出版情報 : 九州大学留学生センター紀要. 15, pp.85-191, 2007-02. 九州大学留学生センター
バージョン :
権利関係 :

九州大学留学生のための日本語コース (JLC)

大神智春*

1. コースの概要

JLC (Japanese Language Course) では、平成17 (2005) 年度春学期までは従来のコース編成で授業を行ったが¹、秋学期よりコース編成を改編・増設した。以下、新しいコース編成について報告する。

1-1 コース編成

当センターにおいては学習者数の増加とともに日本語授業に対するニーズも多様化しているという実状がある。そこで、今回、多様化した学習者の以下のニーズに対応することにした。

- 1) Japan in Today's World (JTW) プログラムを始めとする短期留学生数が増加したことから、初級・中級レベルにおいてより効果的に学習者の弱点を補強する授業を提供する必要がある
- 2) 日本語研修コースとJLCの授業の一部融合の試みに向け、特に初級コースにおいて、日本語研修コースの学習者が参加可能なコースを設ける必要がある。
- 3) 日本語・日本文化研修コースを始めとする上級レベルの学習者について、日本人学生が受講している学部の講義が受講できる日本語能力の養成を目指す必要がある。具体的には、学部の講義への橋渡しとなる日本語の授業が求められている。

以上の点をふまえ、コースを以下の点で改編・増設した。また、新コース編成を表1にまとめる。

- 1) 初級レベルの漢字クラスおよび会話クラスのクラス数を増設した。特に、日本語研修コースに在籍する日本語既習者の間で漢字学習の需要が高いことから、日本語研修コースの学習者のレベルにも配慮した内容の漢字クラスを提供できるようにした。
- 2) 中級・上級レベルの読解コースおよび作文コースを新設した。
- 3) 上級レベルから学部の講義レベルへの橋渡しとして、上級クラスを増設し、専門コースを新設した。

1-2 新コースの授業

(1) 教材

コースを増設するとともに、各クラスで教える内容も目標を更に明確化し、より細分化することでクラス間での「住み分け」を図った。ただし、例えば、読解コースでは読む練習に専念し書く練習を一切行わない、というのではなく、読解能力を向上させることを主な目的とし、聞く・話す・書く等

*九州大学留学生センター助教授 ohga@isc.kyushu-u.ac.jp

表1 JLC のコース編成

	総合	漢字	会話	読解	作文	専門
入門	J-1(4)					
初級 1	J-2(4)	K-2(2)	S-2(2)			
初級 2	J-3(4)	K-3(2)	S-3(2)			
中級入門	J-4(4)	K-4(2)	S-4(2)			
中級 1	J-5(2)	K-5(2)	S-5(2)	R-5/6(2)	W-5/6(2)	
中級 2	J-6(2)	K-6(2)	S-6(2)			
上級入門	J-7(1)	K-7(2)	S-7(2)	R-7/8(2)	W-7/8(2)	
上級	J-8(1)	K-8(2)				

() 内は1週間の授業回数

J-8、S-2、T-8は平成17(2004)年秋学期は開講しなかった。

の技能は必要に応じてバランスよく取り入れるようにした。平成17(2005)年に使用したテキストや教材を表2にまとめる。

表2 各クラスの使用教材

総合	使用教材	漢字	使用教材
J-1	『Total Japanese』	K-2	『Basic Kanji Book vol.1』
J-2		K-3	
J-3		K-4	
J-4	『J.Bridge』	K-5	『Basic Kanji Book vol.2』
J-5	『日本語中級 J301』	K-6	
J-6	『文化中級』	K-7	『Intermediate Kanji Book vol.1』
J-7	自主作成教材を使用	K-8	『Intermediate Kanji Book vol.2』
会話	使用教材	読解	使用教材
S-3	自主作成教材を使用	R-5/6	自主作成教材を使用
S-4		R-7/8	
S-5		作文	使用教材
S-6		W-5/6	自主作成教材を使用
S-7		W-7/8	『大学生と留学生のための論文ワークブック』

(2) 遠隔授業

平成17(2005)年度の時点で、九州大学は5つのキャンパスに分かれている。そのため、留学生センターのある箱崎キャンパス以外にいる学習者が箱崎キャンパスまで来て日本語の授業を受講することは大変な負担となっている。また、平成17(2005)年の秋学期から新キャンパス(伊都キャンパス)への移転が開始される。これらの学習環境に対応するため、遠隔授業機材を使用し、第一段階として、留学生センターで開講している授業を筑紫キャンパスでも受講できる体制をとった。尚、秋学期に先立ち、05年の春学期に、漢字授業において箱崎キャンパスと筑紫キャンパスで実験的に遠隔授業を行った。

1 - 3 開講スケジュール

当センターでは、2003年度以降、各学期5週間の5期制を導入している。第1期・第2期が春学期に当たり、第3期・第4期・第5期が秋学期に当たる。平成17（2005）年度の開講スケジュールは表3のとおりである。

表3 JLCの開講スケジュール

	学 期	開 講 期 間
春学期	第1期	平成17年4月11日～5月19日
	第2期	平成17年5月27日～6月30日
秋学期	第3期	平成17年10月11日～11月11日
	第4期	平成17年11月24日～12月22日
	第5期	平成18年1月16日～2月17日

1 - 4 受講申し込みオンラインシステムの導入

平成8（1996）年に本コースが開設された当時は150名ほどであった受講登録者数がこの十年間で300名近くになり、申し込み用紙など用紙を多く使用したコースの運営管理が困難になった。また、学習者の多様化が進み来日時期等にばらつきが生じたことで教員側の作業負担が増加した。そこで、コースの管理運営および学習者の受講申し込みを電子化し、秋学期からオンラインシステムを導入した²。

1 - 5 プレースメント

プレースメントは各学期とも2日に分けて実施している。初日に全員が受験しなければならない総合テスト（文法・聴解・読解）を行い、2日目は技能別クラスを受講希望者が受験する漢字テストおよびインタビューテストが行われる。秋学期からは、プレースメントテストの処理、クラス分け作業、クラス発表もオンライン化し、学習者が研究室や自宅のコンピュータからも受講申し込みをしたり自分の受講するクラスを把握できるようにした。

2. 受講者数および受講者の内訳

2 - 1 受講者数

図1に過去5年間の学習者数の推移をまとめる。全体的にはゆるやかに人数が増加していると言える。05年秋学期に延べ受講者数が増加したのは、コースの種類が増え選択肢が広がったためと、受講できるクラス数の制限を設けなかったためであると考えられる。春学期までは1人の学習者が受講できるクラス数を2つまでに制限していたが、秋学期は学習者の受講傾向を探るため、試験的にその制限を取り払った。

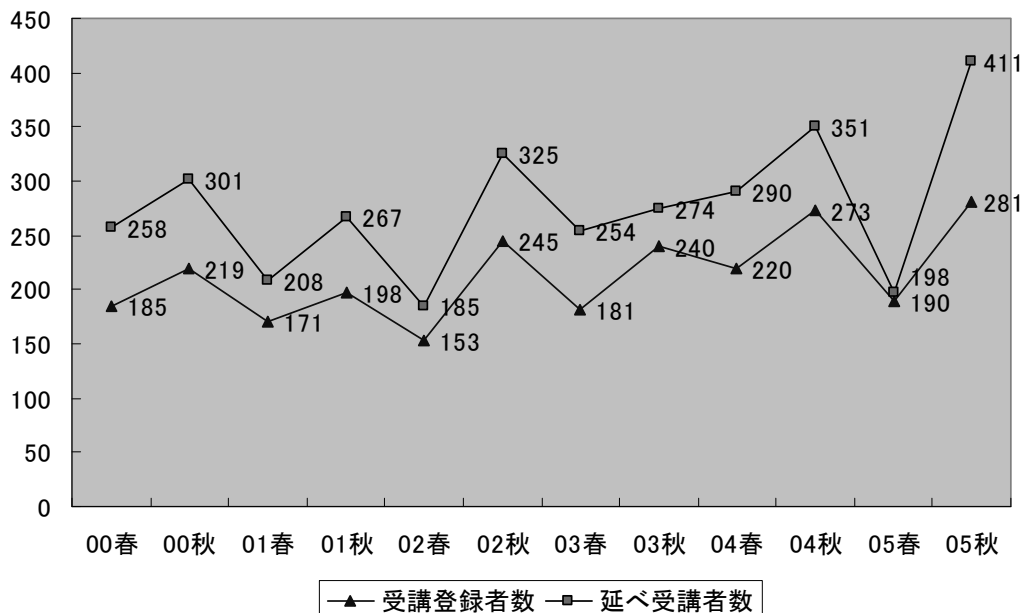


図1 JLC 受講者数の推移

2-2 受講者の内訳³

以下に、受講者の所属(表4、表5)⁴、身分(表6)、受講暦(表7)、出身地域(表8)をまとめる。

表4 受講者の内訳(所属別(春学期))

所属	人数	%	所属	人数	%
留学生センター	46	24.2%	芸術工学	4	2.1%
工学	26	13.7%	総合理工学	3	1.6%
法学部	24	12.6%	数理学	3	1.6%
農学	19	10.0%	その他・不明	3	1.6%
人間環境学	16	8.4%	システム生命科学	3	1.6%
医学	11	5.8%	人文科学	2	1.1%
システム情報	8	4.2%	言語文化	2	1.1%
理学	6	3.2%	付属図書館	1	0.5%
経済学	6	3.2%	生物資源環境	1	0.5%
比較社会文化	5	2.6%	応用力学研究所	1	0.5%
			計	190	100.0%

表5 受講者の内訳 (所属別 (秋学期))

所属	人数	%	所属	人数	%
留学生センター	45	16.0%	比較社会文化学院	7	2.5%
法学部	38	13.5%	経済学部	6	2.1%
工学部	36	12.8%	人文科学部	6	2.1%
農学部	27	9.6%	理学部	5	1.8%
システム情報科学部	18	6.4%	医学部	4	1.4%
人間環境学院	18	6.4%	歯学部	3	1.1%
生物資源環境科学部	17	6.0%	システム生命科学部	2	0.7%
医学系学院	14	5.0%	教育学部	2	0.7%
文学部	11	3.9%	数理学部	2	0.7%
芸術工学部	9	3.2%	薬学部	2	0.7%
工学部	8	2.8%	その他・不明	1	0.4%
			計	281	100.0%

表6 受講者の内訳 (身分別)

	春学期		秋学期	
	人数	%	人数	%
研究生	59	31.1%	69	24.6%
大学院生	44	23.2%	76	27.0%
教官・訪問研究員	14	7.4%	21	7.5%
その他	66	34.7%	115	40.9%
不明	7	3.7%	0	0.0%
計	190	100.0%	281	100.0%

表7 受講者の内訳 (受講歴別)

	春学期		秋学期	
	人数	%	人数	%
新規受講者	60	31.6%	201	71.5%
継続受講者	130	68.4%	80	28.5%
計	190	100.0%	281	100.0%

表 8 受講者の内訳 (出身地域別)

	春 学 期		秋 学 期	
	人 数	%	人 数	%
中国・台湾	58	30.5%	84	29.9%
韓国	38	20.0%	52	18.5%
他アジア	51	26.8%	84	29.9%
ヨーロッパ	21	11.1%	24	8.5%
北米	8	4.2%	17	6.0%
その他	14	7.4%	20	7.1%
計	190	100.0%	281	100.0%

3. 受講者による授業評価

JLC では、春学期末（6月）と秋学期末（2月）に、学習者による授業評価を実施している⁵。授業評価の結果は JLC に関わるセンターの教員⁶で構成される「日本語教育方法検討会」（年2回実施）で報告され、コース全体あるいは個別クラスの改善と見直しに活用されている。

平成17（2005）年春学期の評価は、従来通り、コース最終日に各クラスで評価用紙を配布しアンケートを実施した。秋学期は授業評価の入力もオンライン化し、コース終了日までに学習者がオンラインシステムにログインし評価を入力した。実施された授業評価の結果を以下にまとめる。

3 - 1 授業内容について

(1) 授業の難易度

質問：この授業の難易度は全体としてどうでしたか。

- a. とてもやさしかった b. やさしかった c. どちらとも言えない
d. むずかしかった e. とてもむずかしかった

			易しい	やや易しい	丁度よい	やや難しい	難しい
総 合	初 級	春学期	0.0%	15.2%	65.8%	17.7%	1.3%
		秋学期	3.2%	19.4%	54.8%	21.0%	1.6%
	中上級	春学期	0.0%	3.4%	69.0%	17.2%	10.3%
		秋学期	0.0%	20.0%	66.7%	13.3%	0.0%
漢 字	春学期	0.0%	21.1%	65.8%	13.2%	0.0%	
	秋学期	0.0%	20.8%	56.3%	16.7%	4.2%	
会 話	春学期	0.0%	23.5%	47.1%	23.5%	5.9%	
	秋学期	0.0%	28.6%	67.9%	3.6%	0.0%	
読 解	春学期						
	秋学期	0.0%	28.6%	57.1%	14.3%	0.0%	
作 文	春学期						
	秋学期	0.0%	7.1%	85.7%	7.1%	0.0%	

* 春学期は「読解」と「作文」を開講していない。

			少ない	やや少ない	適量	やや多い	多い
総合	初級	春学期	9.0%	30.8%	55.1%	5.1%	0.0%
		秋学期	1.6%	8.1%	79.0%	9.7%	1.6%
	中上級	春学期	6.9%	27.6%	62.1%	3.4%	0.0%
		秋学期	0.0%	30.0%	66.7%	3.3%	0.0%
漢字		春学期	17.9%	43.6%	48.5%	0.0%	0.0%
		秋学期	0.0%	12.5%	87.5%	0.0%	0.0%
会話		春学期	6.3%	40.6%	50.0%	3.1%	0.0%
		秋学期	0.0%	10.7%	85.7%	3.6%	0.0%
読解		春学期					
		秋学期	0.0%	14.3%	85.7%	0.0%	0.0%
作文		春学期					
		秋学期	14.3%	0.0%	78.6%	7.1%	0.0%

*春学期は「読解」と「作文」を開講していない。

(5) 授業の進度

質問：授業のスピードは適当でしたか。

- a. 遅かった b. もう少し速いほうがよかった
c. ちょうどよかった d. 少し速かった e. たいへん速かった

			遅い	やや遅い	適当	やや速い	速い
総合	初級	春学期	3.8%	16.5%	63.3%	13.9%	2.5%
		秋学期	3.2%	17.7%	69.4%	9.7%	0.0%
	中上級	春学期	0.0%	13.3%	66.7%	20.0%	0.0%
		秋学期	3.3%	6.7%	76.7%	13.3%	0.0%
漢字		春学期	0.0%	18.4%	78.9%	2.6%	0.0%
		秋学期	0.0%	14.6%	72.9%	12.5%	0.0%
会話		春学期	0.0%	3.1%	81.3%	15.6%	0.0%
		秋学期	3.6%	14.3%	82.1%	0.0%	0.0%
読解		春学期					
		秋学期	0.0%	42.9%	28.6%	28.6%	0.0%
作文		春学期					
		秋学期	0.0%	7.1%	78.6%	14.3%	0.0%

*春学期は「読解」と「作文」を開講していない。

(6) 1クラスあたりの受講者数

質問：クラスの大きさ（学生の数）は適当でしたか。

- a. 小さい b. もう少し大きいほうがよかった
c. ちょうどよかった d. 少し大きかった e. たいへん大きかった

			少ない	やや少ない	適量	やや多い	多い
総合	初級	春学期	0.0%	3.9%	74.0%	18.2%	3.9%
		秋学期	3.2%	17.7%	69.4%	9.7%	0.0%
	中上級	春学期	0.0%	0.0%	50.0%	40.0%	10.0%
		秋学期	3.3%	6.7%	76.7%	13.3%	0.0%
漢字		春学期	0.0%	2.6%	92.3%	5.1%	0.0%
		秋学期	0.0%	14.6%	72.9%	12.5%	0.0%
会話		春学期	3.2%	3.2%	90.3%	3.2%	0.0%
		秋学期	3.6%	14.3%	82.1%	0.0%	0.0%
読解		春学期					
		秋学期	0.0%	42.9%	28.6%	28.6%	0.0%
作文		春学期					
		秋学期	0.0%	0.0%	57.1%	42.9%	0.0%

* 春学期は「読解」と「作文」を開講していない。

3 - 2 学習者の自己評価

「予習と復習にかける時間」については平均時間が示してある。

(1) 予習にかける時間

質問：授業の予習するのにどのくらい時間がかかりましたか。 毎回平均____時間ぐらい

*() 内の数値は時間

	初級	中上級	漢字	会話	読解	作文
春学期	1.5	1.5	2.0	1.3		
秋学期	2.0	1.4	2.0	1.3	1.4	1.5

(2) 復習にかける時間

質問：授業の復習するのにかかった時間はどれくらいでしたか。 毎回平均____時間ぐらい

*() 内の数値は時間

	初級	中上級	漢字	会話	読解	作文
春学期	1.3	1.1	1.1	1.2		
秋学期	1.9	1.3	2.2	0.9	1.1	1.3

3 - 3 教師に対する評価

各項目ともに、数値が高いほど高い評価である。最大値は4.0で、3.0以上が一応の目安となる。

(1) 授業時間の厳守

質問：授業は時間どおり行われましたか。

- a. 強くそう思う (4.0) b. そう思う (3.0) c. どちらとも言えない (2.0)
d. そう思わない(1.0) e. 全くそう思わない (0.0)

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文
春学期	3.3	3.3	3.6	3.5		
秋学期	3.3	3.6	3.5	3.5	2.7	3.6

(2) 教育への熱意

質問：教師に授業への熱意が感じられましたか。

- a. 強くそう思う (4.0) b. そう思う (3.0) c. どちらとも言えない (2.0)
 d. そう思わない (1.0) e. 全くそう思わない (0.0)

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文
春学期	3.7	3.7	3.7	3.7		
秋学期	3.6	3.5	3.7	3.7	3.3	3.7

(3) 授業の準備

質問：(教師の) 授業の準備は十分になされていたと思いますか。

- a. 強くそう思う (4.0) b. そう思う (3.0) c. どちらとも言えない (2.0)
 d. そう思わない (1.0) e. 全くそう思わない (0.0)

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文
春学期	3.7	3.6	3.7	3.8		
秋学期	3.6	3.6	3.6	3.6	3.4	3.6

(4) 説明の分かりやすさ

質問：先生の指示・説明はどうでしたか。

- a. とてもわかりやすかった (4.0) b. わかりやすかった (3.0)
 c. どちらとも言えない (2.0) d. 少しわかりにくかった (1.0)
 e. わかりにくかった (0.0)

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文
春学期	3.2	3.6	3.7	3.6		
秋学期	3.4	3.2	3.6	3.5	3.0	3.5

3 - 4 総合評価

数値が高いほど評価が高いと言える。最大値は100%で、80%以上が一応の目安である。

質問：あなたはこのコースの授業にどのくらい満足していますか。 _____ %

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文
春学期	86.4	84.2	88.5	91.5		
秋学期	87.3	88.6	91.3	90.0	77.3	85.9

2. もっと練習したかったことは何でしたか。 What did you want to practice more?
3. この授業の難易度は全体としてどうでしたか。 How difficult was the course overall?
- a. とてもやさしかった very easy
 - b. やさしかった easy
 - c. どちらとも言えない neither easy nor difficult
 - d. むずかしかった difficult
 - e. とてもむずかしかった very difficult
- コメント : comments:
4. 宿題の量は適当でしたか。 Was the amount of homework given in the course appropriate?
- a. 少なかった too little
 - b. もう少しあったほうがよかった needed a bit more
 - c. ちょうどよかった enough
 - d. 少し多かった a bit too much
 - e. たいへん多かった far too much
- コメント :
5. 1週間の授業回数は適当でしたか? Was the frequency of the class appropriate?
- a. 少なかった too little
 - b. もう少しあったほうがよかった needed a bit more
 - c. ちょうどよかった enough
 - d. 少し多かった a bit too much
 - e. たいへん多かった far too much
6. コースの長さは適当でしたか。 Was the length of the course appropriate?
- a. 短かった too short
 - b. もう長いほうがよかった needed to be a bit longer
 - c. ちょうどよかった long enough
 - d. 少し長かった a bit too long
 - e. たいへん長かった far too long
7. 授業のスピードは適当でしたか。 Was the speed of the class appropriate?
- a. 遅かった too slow
 - b. もう少し速いほうがよかった needed to be a bit faster
 - c. ちょうどよかった enough

- d. 少し速かった a bit too fast
- e. たいへん速かった far too fast

8. クラスの大きさ (学生の数) は適当でしたか。 How was the class size?

- a. 小さい too small
- b. もう少し大きいほうがよかった needed to be a bit larger
- c. ちょうどよかった good size
- d. 少し大きかった a bit too large
- e. たいへん大きかった far too large

妥当な人数は () 人ぐらい The ideal class size would have been about () students.

B. 自分自身について Regarding your own participation / study

1. 授業の予習するのにどのくらい時間がかかりましたか。 How long did it take to prepare for each lesson?

毎回平均 _____ 時間ぐらい On average about _____ hour(s) per lesson

2. 授業の復習するのにかかった時間はどれくらいでしたか。 How long did it take to review each lesson?

毎回平均 _____ 時間ぐらい On average about _____ hour(s) per lesson

3. この授業に自分として意欲的に取り組んだと思いますか。 Do you think that you became actively involved in this course?

- a. 強くそう思う Yes, very much so
- b. そう思う Yes
- c. どちらとも言えない Couldn't say either way
- d. そう思わない No
- e. 全くそう思わない Not at all

C. 先生について Regarding the instructor(s)

1. 授業は時間どおり行われましたか。 Was class conducted in a timely fashion?

- a. 強くそう思う Yes, very much so
- b. そう思う Yes

- c. どちらとも言えない Couldn't say either way
- d. そう思わない No
- e. 全くそう思わない Not at all

2. 教師に授業への熱意が感じられましたか。 Did you feel that the instructor(s) had enthusiasm for the course?

- a. 強くそう思う Yes, very much so
- b. そう思う Yes
- c. どちらとも言えない Couldn't say either way
- d. そう思わない No
- e. 全くそう思わない Not at all

3. (教師の) 授業の準備は十分になされていたと思いますか。 Was the instructor(s) adequately prepared for class?

- a. 強くそう思う Yes, very much so
- b. そう思う Yes
- c. どちらとも言えない Couldn't say either way
- d. そう思わない No
- e. 全くそう思わない Not at all

4. 先生の指示・説明はどうでしたか。 Was the instruction and explanation given by the instructor(s) clear?

- a. とてもわかりやすかった Yes, very clear
- b. わかりやすかった Yes
- c. どちらとも言えない Couldn't say either way
- d. 少しわかりにくかった Not so clear
- e. わかりにくかった Not clear at all

D. 総合評価 Overall evaluation

1. あなたはこのコースの授業にどのくらい満足していますか。 How satisfied were you with this course?

_____ %

コメント Comments (このコースは具体的にどんなところがよかったですか What in particular was good about the course?)

2. その他意見があれば自由に書いて下さい。 Additional comments if any:

注

- 1 平成16 (2004) 年のコース編成については、小山 (2005) 「日本語補講コース (JLC)」『九州大学留学生センター紀要』第14号を参照。
- 2 詳細は、岡崎・大神(2006)「留学生のための日本語コース (JLC) における受講・成績管理システムのオンライン化」『九州大学留学生センター紀要』第15号を参照。
- 3 データは学習者の自己申告に基づいたものである。
- 4 所属については、オンラインシステム導入時に分類方法が変わったため、春学期と秋学期で分けて表示する。
- 5 資料を参照。
- 6 平成17 (2005) 年現在、留学生センターの日本語教育部門には、専任教官が7名、非常勤講師が13名所属している。
- 7 総合コースのうち、J-1～J-4までは火曜日～金曜日まで1日に1コマ、1週間に計4コマ授業を行った。J-5とJ-6は1週間に2コマ、J-7は1週間に1コマ授業を行った。技能コース(漢字、会話、読解、作文)はいずれも1週間に2コマ授業を行った。

日本語研修コース

吉川裕子*

1. コースの概要

日本語研修コースは、大学院に進む予定の研究留学生を対象に、大学院入学前の予備教育を行うコースである。受講者のほとんどは日本語学習歴がない。予備教育の中心は初級からの日本語教育であるが、その他にも日本への適応、特に専門教育の現場への適応を促進するための活動や支援も含んでいる。日本語研修コースは、以下の点を目標としている。1) 聴解会話を中心とした初級日本語の習得 2) 日常生活、特に研究室で日本人とコミュニケーションができること 3) コース終了後に必要に応じて自分で学習が継続できる日本語基礎力の養成 4) 日本の文化習慣に関する知識の習得

2. 実施概要

平成17年度日本語研修コースの実施期間、主な日程は下記の通りである。

- 1) 実施期間 前期 4月7日 - 9月13日 (第40期)
後期 10月6日 - 3月14日 (第41期)

2) 主な日程

前期

開講式	4月7日
授業開始	4月11日
健康管理についての講義 (健康科学センター: 上園)	4月19日
防災センターと市立図書館見学	4月28日
三者面談 (指導教員・留学生・コーディネーターの三者)	4月下旬 - 5月上旬
書道の授業 (学外講師)	6月7日
小学校訪問 (福岡市立香陵小学校)	6月16日
大学院へのガイダンス (留学生センター兼任: 土居・梶村)	7月7日
発表会 (文集『世界の輪32号』に収録)	7月28日
見学旅行 (九州大学伊都キャンパス 唐津方面)	9月6日
日本人学生との交流会 (留学生センター指導部門: 高松)	9月8日
授業終了	9月8日
閉講式	9月13日

*九州大学留学生センター助教授

後期

開講式（日韓予備教育、日本語・日本文化研修コースと合同で）	10月6日
授業開始	10月11日
健康管理についての講義（健康科学センター：上園）	10月25日
三者面談（指導教員・留学生・コーディネーターの三者）	10月下旬 - 11月上旬
見学旅行（熊本城、阿蘇山、黒川温泉方面）	11月21日
防災センター見学	11月30日
書道の授業（学外講師）	1月17日
大学院へのガイダンス（留学生センター兼任：梶村）	2月1日
小学校訪問（福岡市立香陵小学校）	2月7日
発表会（文集『世界の輪33号』に収録）	2月15日
日本人学生との会話（留学生センター指導部門：高松）	2月17日
授業終了	2月17日
閉講式	3月14日

3) 受講者

前期 16名（文科省から配置された国費留学生12名と学内募集に応じた4名）

出身：ミャンマー（3名）、インドネシア（2名）、フィリピン（2名）、ベトナム（2名）
アラブ首長国連邦、エジプト、スロバキア、セネガル、ドイツ、ブラジル、マレーシア

後期 13名（文科省から配置された国費留学生5名と学内募集に応じた8名）

中級1名を含む。中級者はレベルの相当する日本語補講コース（JLC）のクラス（複数）を受講。

出身：中国（2名）、バングラデシュ（2名）、インドネシア、エジプト、韓国、スリランカ、タイ、ネパール、ベネズエラ、ポーランド、ミャンマー

4) 担当者

専任：吉川裕子（コーディネーター）・小山悟

非常勤講師：柴田あづさ・高嶋文・藤本綾香・松崎定子・松本さえ・和田玉己（前期のみ）
・堀尾佳以（後期のみ）

前期担当 2クラス体制

限	時間	クラス	月	火	水	木	金
2	10:30 - 12:00	A	吉川	松崎	藤本	高島	吉川
		B	柴田	柴田	松本	松崎	松本
3	13:00 - 14:30	A	高島	松崎	藤本	和田	藤本
		B	吉川	柴田	松本	松崎	松本
4	14:50 - 16:20	A	吉川		藤本		小山
		B	柴田		小山		吉川

: CAI システムによる学習可

後期担当 基本的に1クラス体制（月・水・金4限は2クラスに分けて運営）

限	時間	月	火	水	木	金
2	10:30 - 12:00	吉川	松崎	松本	柴田	堀尾
3	13:00 - 14:30	藤本	柴田	高嶋	小山	高嶋
4	14:50 - 16:20	小山・藤本	吉川	藤本・堀尾	松崎	松本・吉川

CAIシステムによる日本語学習は、空き時間に自習とする。

5) 使用教材 使用した教材の主なものは以下の通りである。

『Situational Functional Japanese Notes』 Vol.1, Vol.2 (以下『SFJ』)

『Situational Functional Japanese Drills』 Vol.1, Vol.2

筑波ランゲージグループ著 凡人社

『BASIC KANJI BOOK』 Vol.1 加納千恵子・清水百合他著 凡人社

『わくわく文法リスニング99』 小林典子・フォード丹羽順子他著 凡人社

『毎日の聞きとり50日上』 宮城幸枝・三井昭子他著 凡人社

『1日10分の発音練習』 河野俊之他著 くろしお出版

その他 自主作成プリント、クイズ、テスト類

3. 授業時間数と主な授業内容

1) 授業時間数

前期：全17週 週13コマ 1コマ90分 合計 332時間

後期：全16週 週15コマ 1コマ90分 合計 360時間

2) 主な授業内容

週間予定は固定したものではなく、1週間に1～2課を下記の内容で順次組み入れた。

週間予定表は受講者の様子を見ながら進度と内容を調整し、2週間に1回配布した。

活動名称	内容	頻度・時期など
はつおんれんしゅう	『1日10分の発音練習』	毎日10分 ウォーミングアップ
Word cards	New Words の絵カード	各課の初めに
SD: Structure Drills	文型導入・練習	1課平均3コマで
CD: Conversation Drills	会話練習	1課平均2コマで
MC: Model Conversation	会話練習	1課1コマで
TA: Tasks and Activities	4技能の総合練習	1課1コマで
わくわく	聴解	文型導入と練習の後で
かんじ	漢字	第5週目から 週1コマ

その他 ・読解、作文（不定期）

・各課の小テスト（16回）、4課毎のテスト（4回）、最終試験

4. 受講者からの評価

コース終了前に受講者による評価をアンケート形式で実施した。その結果は研修コース講師会（専任と非常勤講師による）で報告し、研修コースの改善の資料とした。以下、改善の資料として役立った項目を提示する。

1) 受講者による評価の結果

前期 9月8日実施 回答者：13名

質問1 専門の研究で日本語を使いますか。

	yes	no	not clear	無回答
論文を書く	0	9	1	3
プレゼンテーションをする	3	7	2	1

質問2 習得したい日本語の力は何ですか。(記述式)

- ・会話、コミュニケーション能力 (11名)
- ・読解力 (2名)
- ・作文力 (1名)
- ・漢字を読む力 (1名)

質問3 日本語を学習する目的は何ですか。(記述式)

- ・日本人、研究室の人々と日常会話ができるようになる。(8名)
- ・研究を助ける、研究に必要。(5名)
- ・日本の生活に適応し、同僚とよい関係を築く。(3名)
- ・日本語に関心がある、新聞が読めるようになりたい。(2名)

質問4 テキスト (『SFJ』) はどうでしたか。

very good	good	average	not good	not good at all	無回答
8	4	0	1	0	0

not goodの理由：readingが不足

質問5 次の勉強は役に立っていますか。

	very useful	useful	average	not useful	not usefulat all	無回答
発音練習	5	5	2	0	0	1
Word Cards	10	1	1	1	0	0
SD	8	3	1	0	0	1
CD	7	4	1	0	0	1
MC	6	5	2	0	0	0

	very useful	useful	average	not useful	not useful at all	無回答
TA	4	6	2	1	0	0
わくわく	7	2	3	0	0	1
かんじ	9	3	0	0	1	0

質問6 もっと勉強したかったことがありますか。(複数回答可)

listening	conversation	grammar	kanji	pronunciation
7	10	3	9	5
reading	writing	words	others	
4	4	3	0	

質問7 クイズとテストはどうでしたか。

	very useful	useful	average	not useful	not useful at all	無回答
Written quiz and test	11	1	1	0	0	0
Interview test	10	1	1	1	0	0

質問8 授業以外の活動はどうでしたか。

	very interesting	interesting	just right	not interesting	not interesting at all	無回答
防災センター見学	6	4	3	0	0	0
市立図書館見学	3	7	3	0	0	0
小学校訪問	6	4	2	0	0	1
書道	4	5	4	0	0	0
大学院へのガイダンス	3	6	2	0	0	2
親睦パーティー	6	6	1	0	0	0

質問9 「発表会」はあなたの専門に役に立ちましたか。(注1)

very useful	useful	average	not useful	not useful at all	無回答
5	6	1	0	1	0

質問10 コースや授業のインフォメーションは適切でしたか。

very good	good	average	poor	very poor	無回答
5	8	0	0	0	0

質問11 このコースにどのぐらい満足していますか。

平均：87.6%

質問12 今後のためにコースへの提案があったら書いてください。

- ・『SFJ』のVol.3の終わりまで進んだ方がいい。(1名)
- ・ひらがな、カタカナの時間を短縮して『SFJ』Vol.3を進めた方がいい。(2名)
- ・もっと会話とインタビューの時間を多く。(1名)
- ・日本人学生との会話クラスを毎週。(1名)
- ・もし可能なら習った会話を実際の場面で使う練習を。(1名)
- ・文法の時間をもう少し少なく、会話の時間をもっと多く。(1名)

後期 2月17日実施 回答者：12名

質問1 専門の研究で日本語を使いますか。

	yes	no	not clear	無回答
論文を書く	2	8	2	0
プレゼンテーションをする	5	5	2	0

質問2 習得したい日本語の力は何ですか。(記述)

- ・会話、コミュニケーション能力(9名)
- ・文法(2名)
- ・読解力(1名)
- ・作文力(1名)
- ・漢字(1名)
- ・発表の方法(1名)
- ・講義を聴く力(1名)

質問3 日本語を学習する目的は何ですか。(記述)

- ・日本人、研究室の人々と日常会話ができるようになる。(7名)
- ・研究を助ける、研究に必要。(4名)
- ・日本の生活に適応し、同僚とよい関係を築く。(4名)

質問4 テキスト(『SFJ』)はどうでしたか。

very good	good	average	not good	not good at all	無回答
10	2	0	0	0	0

質問5 次の勉強は役に立っていますか。

	very useful	useful	average	not useful	not usefulat all	無回答
発音練習	5	4	2	1	0	0
Word Cards	11	1	0	0	0	0
SD	11	1	0	0	0	0
CD	7	5	0	0	0	0
MC	7	4	1	0	0	0
TA	7	2	1	1	0	1
わくわく	9	0	1	1	0	1
かんじ	10	1	0	0	0	1

質問6 もっと勉強したかったことがありますか。(複数回答可)

listening	conversation	grammar	kanji	pronunciation
5	7	3	6	3
reading	writing	words	others	
3	2	4	0	

質問7 クイズとテストはどうでしたか。

	very useful	useful	average	not useful	not useful at all	無回答
Written quiz and test	8	4	0	0	0	0
Interview test	10	2	0	0	0	0

質問8 授業以外の活動はどうでしたか。

	very interesting	interesting	just right	not interesting	not interesting at all	無回答
防災センター見学	11	1	0	0	0	0
阿蘇旅行	10	2	0	0	0	0
天神ツアー	8	3	0	1	0	0
書道	9	3	0	0	0	0
大学院へのガイダンス	6	2	3	0	0	1
小学校訪問	11	1	0	0	0	0

質問9 「発表会」はあなたの専門に役に立ちましたか。

very useful	useful	average	not useful	not useful at all	無回答
8	2	0	1	0	1

質問10 コースや授業のインフォメーションは適切でしたか。

very good	good	average	poor	very poor	無回答
10	2	0	0	0	0

質問11 このコースにどのぐらい満足していますか。

平均：94.5%

質問12 今後のためにコースへの提案があったら書いてください。

- ・もっと会話の練習を。(4名)
- ・もっと漢字の時間が多いといい。(2名)
- ・見学やパーティーをもっと入れるといい。(1名)

2) 評価の結果の分析

受講者は主に、会話力をつけること、周囲の日本人と日本語で意志の疎通ができるようになることを目標としている。

テキストはその目的に合っている。

授業内容のうち、「Word Cards」の評価が高く、「発音練習」と「TA (Tasks and Activities)」の評価が比較的低い。

もっと勉強したかったことは、前期後期ともトップは「会話」次は「漢字」である。授業で会話にはかなり時間をかけているが、受講者は更に多くの会話の勉強を望んでいる。

授業以外の活動はおおむね評価が高い。その中で、「大学院へのガイダンス」の評価が比較的低いのは、もう既に研究室に出入りしていて、研究室の様子が分かっている受講者が多かったことが影響していると考えられる。

発表会は全体的に役立つと考えられているが、「専門の研究は英語で行うが、専門の語彙を日本語で知っておくのはいいことだ。」というコメントがある一方で「専門の研究は英語で行うので、日本語での発表は関係がない。」というコメントもあった。

『SFJ』Vol.3まで進んだ方がいいという意見が前期に見られた。(注2)

5. 講師会での討議によるコース運営の改善

研修コースでは、コース開始前と終了後に各1回、期間中に3～4回講師会を開き、そこで専任と非常勤講師により提案、討議された結果をコースに反映してきた。以下に、講師会で討議の上決定された事項を記す。前記の受講者からの評価に基づいた討議も含まれている。

1) 前期講師会（6回）の主な決定事項

- ・各課の文法宿題と文法クイズ、語彙クイズ、4課毎のテスト、最終試験を作成する。
- ・OPI (Oral Proficiency Interview) による会話力測定を最終週に行う。
- ・評価は、「何ができるか」に重点を置いた評価方法（過去の評価基準を基に、コメントを一般化、簡略化する方法）を検討し、指導教員に報告する評価表を作成する。
- ・課毎に新出語彙の絵カード (Word Cards) を作成し、語彙の定着を図る。(動詞に関しては、動詞だけのカードが一揃いほしい。後期に)
- ・課毎に新出文型を使って話すペアワークシートを作成し、クラス活動として使用して、文単位で話す力を養成する。

2) 後期講師会（5回）の主な決定事項

- ・発音練習は、抜粋して行い、『SFJ』の Vol.1終了まで継続する。
- ・TA(Tasks and Activities)はテキスト通りではなく、短文作成 (short writing) などを入れて工夫する。特に、学習した文法を使った短文作成の練習を入れる。
- ・Report 文に関しては、漢字にルビを付け、質問を加えたプリントを作成し宿題とする。
- ・Word Cards は効果的であるという受講者の支持が多いので、引き続きカードを整備する。動詞カード一式、形容詞カード一式を作成し、まとめと復習に使用する。
- ・OPI の結果、語彙が少なく、言いたいことの説明ができないことが判明した。例えば趣味、食べ物、年中行事などのトピック別単語シート (My Vocabulary Note) を使用して各自の単語リストを作成させ、テキスト以外の語彙の獲得と説明力の養成を図る。
- ・発表会の方法を検討。場所は3階の教室で3グループに分かれて行う。
- ・ひらがな練習にかける時間を短縮して、『SFJ』 Vol.3にかけられる時間を確保する。

6. 三者面談

2005年前期に、研修コースの新しい試みとして三者面談（留学生本人・受け入れ先の指導教員・日本語研修コースのコーディネーターの三者による）を行った。このプログラムの目的は、研修コース終了後の各研究室へのスムーズな適応を支援することにある。後期も同様に実施した。その実施方法と成果について以下に報告する。(注3)

1) 実施方法と経過

- ・開講後留学生センター事務より三者面談実施案内のメールを指導教員に送付。
- ・コーディネーターが指導教員（1人ずつ）にアポイントメントを取る。
- ・コース開始後ほぼ1か月以内に、毎日放課後面談を実施（1日1～2名）。
- ・面接時間 30分～1時間。
- ・場所は留学生センターのコーディネーターの研究室。

2) 内容 次の点を話題として取り上げる。

- ・研究室の様子

- ・ 研究生生活で日本語が必要な場面及び必要なレベル
- ・ 研修コースの概要と発表会の説明
- ・ 大学院の入試のための準備と入試時期

3) 成果

<コーディネーターにとって>

- ・ 留学生の進学先の状況が、下記の点で一人ずつ異なっていることがわかった。
来年4月に修士課程進学か博士課程進学か、または研究生を続けるか。
大学院の入試はいつ、どのような形式で行われるか。
講義及び研究で使われる言語は、日本語か英語か。
研修コースで養成が望まれる日本語能力。
研究室の様子（先輩留学生がいて、先生が留学生に慣れているか）など。
- ・ コース期間のシラバス・カリキュラムの修正に関して方向付けが得られた。
- ・ 必要に応じて、その後先生と連絡を取りながら、留学生への対応ができるようになった。

<留学生にとって>（面談直後に実施したアンケートより）

- ・ 先生に正式に挨拶する機会となり、その後研究室を一人で訪問するきっかけが得られた。
- ・ 大学院の入試や今後の研究について先生に直接質問できた。入試のために準備することや研究生生活の様子が明らかになり、研究についての疑問が解消する機会になった。
- ・ 研修コースの様子と現在の日本語のレベルを指導教員に知ってもらえた。
- ・ 指導教員の先生は大変忙しくて研修コースの期間にはなかなか研修生と話せないが、面談を通して先生と話す機会が得られ、先生の人柄も分かった。先生と親しくなれたように思う。
- ・ 先生に激励されて、日本語学習に励もうという気持ちが強くなった。
- ・ 住居や家族のことなど個人的な生活の問題も相談できてよかった。心配なことがあると、勉強に専念できない。
- ・ 研修コースの発表会のテーマと準備について相談することができた。

4) 考察

三者面談では個々の留学生に合った支援をするために必要な情報が得られる。研修生を一律に大学院進学留学生と見るのではなく、それぞれの異なった状況に対して個別の指導ができる。留学生にとっては、研修コースの期間のみならずコース終了後に自分のすべきことが分かり、安定した気持ちで留学の目標に向かって日本語の学習を進めることができる。指導教員の先生にとっては、受け入れ前から留学生と接触する機会になり、スムーズな受け入れという面で役立っていると思う。三者面談は、三者それぞれに得るところがあり、特に研修コース期間の日本語学習に方向性を持たせることのできる有意義なものであると考える。

7. 今後への課題

三者面談

前述の通り三者面談は今後も継続していくことが、コースにとって望ましいことであるが、その実施方法に関しては、改善の余地がある。特に、伊都キャンパスへの移転が徐々に進行している現在、面談の時間と場所の確保が困難になってくるであろう。三者それぞれに負担が少なく、しかも必要な情報を得る方法を考えることは、今後の課題である。

コース改善

受講者のコース評価の中で、前期後期を通じて、もっと勉強したかったことのトップは「会話」次は「漢字」である。授業の中で会話にはかなりの時間をかけて練習してきたのだが、受講者は更に多くの会話練習（現実の場面で教師以外の日本人との会話）を望んでいる。教師以外の日本人とコース活動の中で話す機会としては、現在は「小学校訪問」、「書道の授業」、「日本人学生との会話」などに限られている。他の機会を開拓していきたい。「漢字」に関しては、後期に1週間のコマ数が増えたので、漢字の授業を週2回にしてみた。しかし、現在使用中の漢字プリント教材を週2回のスピードで進めることは、受講者への負担が大きく、受講者からのクレームがあり途中で週1回に戻した。研修コースの漢字授業数は、コース終了後に日本語補講コース（JLC）の漢字クラスを受講する学習者のJLCへの移行も考慮して進度を決めなければならない。以上は、受講者から希望が出ていて今後も検討を要する課題である。

コース融合

留学生センターでは各コース間の融合が検討されている。行事としては、本年度は、日韓共同理工系学部留学生予備教育プログラム及び日本語・日本文化研修コースと合同で後期の開講式と見学旅行を行った。授業での融合としては、前期に、研修コースを基本的に受講しながら漢字のみ日本語補講コース（JLC）のクラスを受講した学習者が2名いたが、後期には該当者がいなかった。行事、授業の両面から融合を検討していくことも今後の課題である。

注

1. 発表会は毎学期末に行う口頭発表である。内容は各自の専門について、専門外の人に日本語で分かりやすく説明することを目標としている。ポスターセッションの形式で、一人質疑応答を含めて20～30分。指導教員他関係者を招待して行う。前期は国際ホールを会場として実施したが、声が混ざるので一人一人静かな会場で発表した方がいいという指摘を受け、後期は3階の3つの教室を会場とした。発表の原稿は文集『世界の輪』としてまとめている。
2. 平成17年度後期は、研修コースの全授業終了後に、特設集中コースが開設された（2月20日～3月10日）。研修コースの受講生全員と、JLC第5RoundでJ1cとJ2を修了した希望者との合同のクラス編成で行った。テキストは『S FJ』Vol.3を使用し、最終課まで学習した。このため、後期の受講生からは、この意見が出ていない。
3. 三者面談に関しては、いずれ稿を改めて詳細を報告させていただきたい。

全学教育科目の日本語

清水百合*

はじめに

留学生対象の全学教育科目は、留学生センターの日本語教育部門が日本語を、留学生指導部門が日本事情を担当（留学生指導部門報告を参照）している。日本語は17コマを以下のように1年生の前期と後期、2年生の前期に振り分け、各クラスが10名前後で指導ができるように構成されている。

1. 平成17年度の学習内容

以下が時間割とその学習内容である。

前期				
1年生対象				
1	月	1限	聴 解	法学部 理学部 薬学部
2		2限	聴 解	工学部 芸術学部
3	火	1限	聴 解	文学部 教育学部 医学部 歯学部
4		2限	聴 解	経済学部 経工学部 工学部 農学部
5	木	2限	総合基礎	法学部 理学部 薬学部
6		3限	総合基礎	工学部 芸術学部
7	金	3限	総合基礎	文学部 教育学部 医学部 歯学部
8		4限	総合基礎	経済学部 経工学部 工学部 農学部
2年生対象				
9	月	3限	社会文化	文学部 教育学部 法学部 理学部 工学部
10	水	2限	社会科学	文学部 教育学部 法学部 経済学部 経工学部 理学部 医学部 工学部 農学部
11	金	2限	自然科学	文学部 教育学部 法学部 経済学部 経工学部 歯学部 工学部

このような時間割で授業を始めたのは、平成16年度からで17年度は2年目にあたる。この時間割では、教員が学習項目を同じように定めた授業を2コマずつ担当している。

例えば、下の表にあるように、1年の後期では1人の教員が月曜日の1限と2限の「作文」の授業を2コマ、別の教員が火曜日の1限と2限の「作文」の授業を2コマ担当している。この2人の教員はあらかじめ授業計画について話し合っている。また、同じく1年の後期に行われる「会話・発表」のように1人の教員が2コマを担当するというやり方で行われることもある。

*九州大学留学生センター教授

後期				
1 年生対象				
1	月	1 限	作 文	法学部 理学部 薬学部
2		2 限	作 文	工学部 芸術学部
3	火	1 限	作 文	文学部 教育学部 医学部 歯学部
4		2 限	作 文	経済学部 経工学部 工学部 農学部
5	木	5 限	会話・発表	薬学部 工学部 芸術学部
6	金	5 限	会話・発表	文学部 教育学部 法学部 経済学部 経工学部 理学部 工学部 医学部

学部の学生が必要と思われる科目を、1 年前期に 2 コマ（聴解、総合基礎）、1 年後期に 2 コマ（作文、会話・発表）を全て受講できるようになっている。

2. カリキュラムの長所と短所

このように学生が全ての科目を受講できるようになったことの長所は、まず大学において専門を勉強するために必要な日本語の力のある程度まで引き上げることが可能になったことである。

特に入学したばかりの学生は、これからの大学生活においてどのような日本語の力が必要かということに深い自覚がないことが多い。そこで日本語を担当する教員たちが話し合っ、今までの学生の日本語における問題点を分析し、学部留学生が欠如している日本語の力を補強する授業を考え、上記のような時間割を作成した。大学で講義を聴く力、レポートを書く力やゼミで発表する力をつけることを目的としたこのカリキュラムは、バランスよく日本語の力をつけている学生には最適である。

しかし、留学生の中には日本語の聴く力、話す力、読む力、書く力のバランスがよくない学生が少なくない。例えば、聴く力が弱い学生は、先生の講義が理解できないのでノートをとることもできない。友達にノートを見せてもらったり、自分で図書館に行き本を読んで勉強したりすることになるが、努力の割に効果は少ない。また知っている語彙の数が少ない学生は、聴いても、読んでもわからないことばかりである。このような学生は、上記の時間割で日本語を勉強しても、力をつけることは望めない。それ以前に特に弱いところを補う必要があるからである。

入学試験に合格した留学生は、大学での勉強ができると見なされている。しかし、試験でよい点をとって合格しても、それまでの学習環境に恵まれないと、大学の勉強ができるレベルに到っていないのが現状である。現在の全学教育科目の日本語では、このように総合点では良いが、全てがよい訳ではなく、むしろバランスが著しく悪い学生に対処できないのが短所となっている。

3. 学生の評価

全学教育機構自己点検・評価委員会によって行われる「学生による授業評価（平成17年度前期のデータ一覧）」によると、17年度前期に行われた日本語の授業に対して以下のような評価がなされている。

留学生センター教員と芸術工学部の教員が担当する11クラスが開講され、登録者総数は98名、アン

ケートの回収率は78%であった。

履修してよかったと思う点

- | | |
|-----------------------|------|
| 1. 授業内容の構成が適当なものだった | 51.3 |
| 2. 授業の内容が今後につながるものだった | 50.0 |
| 3. 授業の準備が周到になされていた | 44.0 |
| 4. 教師に教育者としての熱意を感じた | 42.3 |

パーセントは、11クラスの平均であるので、以上の項目について問題があると評価されたクラスもあるが、概ね良好だと言える。

授業の改善を要望したい点

- | | |
|---------------------|------|
| 1. 授業の内容をもっと精選してほしい | 12.8 |
| 2. 授業の開始時間を守ってほしい | 9.0 |
| 3. 予習・復習をするよう促してほしい | 7.7 |
| 4. 視聴覚機器を活用してほしい | 7.7 |

その一方で、1週間に1コマの授業であるので、どうしても詰め込みが多くなり、学生の理解を深める工夫に欠けたり、また理解の確認を忘れてりしがちである。

5. 今後の課題

大学での授業に必要な技能について、担当の教員で話し合う場を設け、聴く・話す・読む・書くの技能をどのように組み合わせ、どのような練習をしていくのが望ましいかについて教材作成を視野においた検討を行うことである。

留学生のための日本語コース (JLC) における 受講・成績管理システムのオンライン化

岡崎 智己*

大神 智春**

1. はじめに

現在、留学生センターで開講している全学の留学生向けのレベル別 / 技能別の日本語コース (Japanese Language Courses、略して JLC と呼ばれる) が開始された平成 8 (1996) 年当初、受講登録者数は春学期で155名、秋学期で168名であったが¹、この10年間で受講者数は増加の一途を辿り、平成17(2005)年には、春学期の受講登録者数が190名、秋学期は281名と、開始当初の1.2倍～1.8倍にまで増えている。これは九州大学へ入学する、あるいは配置された留学生数の増加を如実に反映したものであるが、今後も本学における受入れ留学生の増加が見込まれることから、日本語コース (JLC) の受講者数も増え続けることが予想される。

当センターでは、受講の申し込みや受講者情報の管理、プレースメントテストの実施に関わる手続き、成績管理の作業等の日本語コースの運営と受講者情報の管理に関わる諸作業を、これまで紙の用紙を使用して一人一人手作業で処理してきたが、年々受講者が増加していることや受講者の留学形態の多様化が進んだことを受けて、より多くの技能別日本語クラスを開設したことから、これまでのような形態・作業体制での日本語コースの運営と受講者情報の管理が困難になってきた。そこで、平成17 (2005) 年秋学期からインターネットを利用したオンラインシステムを導入し、受講申し込みから成績管理に至る一連の手続きと作業を電子化することとした。

毎期、受講者が200～300名におよぶ大規模な日本語コースを運営する教育機関で、このようなオンライン化した受講・成績管理システムが導入されたのは、国公立の大学において全国でも初めての試みであると思われるので、以下にその概要を報告する。

2. オンラインシステムの概要

2 - 1 受講者用オンラインシステム

コンピュータソフトの開発を専門とする業者に委託し、日本語コース (JLC) の受講を希望する留学生が行う以下の手続きや作業をオンライン化した。このシステムでは画面に表れる全ての項目 / 情報は原則として日本語と英語の2ヶ国語で表示される。なお、オンラインシステムの開発に当たって

* 九州大学留学生センター教授

** 九州大学留学生センター助教授

は、日本語コース (JLC) のコーディネータを務める教員が業者と頻繁に協議を行い、試行錯誤を繰り返しながら、最終的なシステムの構築を行った。

(1) 日本語コース (JLC) の開講時期と期間、及びプレースメントテスト実施に関わる情報

本オンラインシステムでは JLC に関する以下の情報を学期毎に更新しながら提供しており、受講希望者は次の情報を随時入手することができる。

コースの年間スケジュールおよびプレースメントテストの実施日時

クラス案内 (資料 1)

JLC で提供する初級～上級に至る全 8 レベルのどのレベルにどのような言語技能の習得を目指したクラスがあり、各クラスでどのような授業が、どういった教材を使用して行われるかについて知ることができる。なお、この案内は日本語、英語、中国語、韓国語の 4 ヶ国語で表示している。

毎学期の時間割

どのクラスが週に何回、何曜日の何限に開講されるかについて知ることができる。現在、JLC が開講される箱崎キャンパスでは、総数で週当たり約 80 コマの日本語クラスが開かれているが、受講希望者は自分の日本語レベルに合わせ、あるいは習得したい言語技能を考慮し、また大学院等での専門の授業がない時間帯で、どのクラスが受講できるか (したいか) を前もって知り、検討できるようになっている。

過去の受講歴 / 成績評価

受講希望者が以前に JLC のいずれかのクラスを受講したことがある場合、いつ (どの学期に)、どのクラスを受講し、そこでの成績評価と出席率はどうであったかが確認できるようになっている。

(2) JLC の受講申し込み、プレースメントテストに関するお知らせ、および受講クラスの確認 (資料 2)

JLC の受講申し込み、並びにプレースメントテストの申し込みをオンラインで行う。学内の研究室を始め、インターネットへのアクセスがあるところであれば、自宅や海外からでも JLC の受講を申し込むことができる。実際に、来日前に日本語コースの概要をチェックし、受講の申し込みを早々と済ませてから来学する準備のよい留学生もいる。来日当初は所属する学部・大学院での種々の手続きを始め、外国人登録や銀行口座の開設等もしなければならず、なにかと忙しい留学生にとって、JLC 受講の手続きが、いつでもどこでもオンラインで行える利便性は大きい。もちろん受講の申し込みだけでなく、プレースメントテスト受験後に決定される受講クラスの結果発表もオンラインで行うことができるようにしてある。なお、プレースメントテスト実施に関わる情報については、テストの実施日時や場所、また受験しなければならないテストの種類等について、登録された受講希望者のメールアドレス宛に一人一人通知されるようになっている。

(3) コース評価の入力

毎学期、日本語コース終了時に各自が受講した日本語クラスに関する評価をしてもらっているが、このコース / クラス評価の入力もオンライン化した。こうすることで、これまでは貴重な授業時間の

一部を割いてコース/クラス評価のアンケートを実施していたのが、授業時間を削ることなくコース/クラス評価について受講者の意見を収集することが可能となった。

(4) 成績記録の保存・確認 (資料3)

先にも触れたように、過去に受講したクラスの成績、評価、出席率をオンラインで確認することができるようにしてある。これは、その学期に受講を希望する日本語クラスを決定するにあたっての参照資料として使われるほか、例えば留学生が帰国に当たって本学での日本語コースの受講・成績証明を必要とする場合などにも根拠資料として利用される。以前は、過去に JLC を受講した学生の成績を確認するには、年度・学期別、レベル・クラス別にファイルされた成績表の綴りをひっくり返し、あちこち探し回らなければならなかった。それが本システムを導入することにより、学生の名前、もしくは登録番号で一発検索が可能となった。また、受講証明書を発行する場合も、一人一人、受講クラスと成績、出席率を確認して、手書き・手入力で証明書を作成していたのが、クリック一つで所定の書式で証明書を作成することが可能となり、事務的な手続の労力が大いに軽減された。

2 - 2 教師用受講管理システム

日本語コース/クラスを管理・運営する教員向けには、以下の作業をオンライン化した。まず、システムに登録した学習者 (= 日本語コース受講希望者) には自動的に登録番号 (ID) が付されるようにし、この登録番号 (ID) で学習者を検索、特定し、教員の側で必要となる学習者情報を引き出すことができるようにした。当システムの導入により、数百名という大規模な人数の学習者情報の管理が可能になるとともに、データをデジタル化したことで、その取り扱いが容易になり、データ処理の作業にかかる時間を大幅に短縮することができた。

(1) プレースメントテスト実施に関わる諸作業 (資料4、資料5)

学習者情報 (氏名、国籍、所属部局、学年、指導教員氏名、連絡先、過去の JLC 受講歴・成績、今期の受講希望クラス等) の確認

受講希望者毎に受験すべきプレースメントテストの種別決定

プレースメントテスト受験者の名簿の作成

プレースメントテストの結果の処理、並びに学習者の受講クラスの決定作業

学習者の受講決定クラスの ID 順名簿やクラス別名簿などクラス運営に関する諸資料の作成

上記の については少し説明が必要であろう。学習者の 1) 文法・表現力、2) 文章読解力、3) 聴解力、4) 漢字力、5) 会話力が各々チェックできるよう、タイプの異なるプレースメントテストが準備されており、JLC 受講希望者は、過去の受講・学習歴と現在希望する日本語クラスのレベルとその技能別タイプに応じて、どのプレースメントテストを受けるか (受けなくていいか) が決定される。この確認と判別作業を、これまでは数人の教員がかかりきりで一人一人の受講希望者について行っていたのであるが、オンラインシステムの開発、導入以後、この煩雑な作業がすべてシステム内で処理できるようになった。

(2) 学習者の成績管理

JLC 各コース/クラスを担当する専任教員と非常勤講師に ID とパスワードを設定し、学習者の成

績もオンラインで入力し、管理することができるようにした。こうすることにより、特に毎日留学生センターに来るわけではない非常勤講師の方々も、随時どこからでもインターネット経由で学生の成績入力が可能となり、便利がられている。また、入力された成績は過去に遡って検索し確認することができることは先に述べたとおりであるが、これは教える側からすれば、その学期に受け持つことになった学生が、これまでどんなレベルのどのクラスでどういった学習をしてきたのかを確認するといった場合に、大いに役立っている。

(3) 受講者によるコース/クラス評価の結果の集計と統計処理

学習者が入力したオンラインで入力したコース/クラス毎の評価はシステム内で自動的に集計され、表・グラフ化されるようにした。これでこれまで全て手作業で行っていた評価データの収集と統計処理の作業が省略でき、「教える」こと以外に費やす教員側の労力を大幅に削減できた。コース/クラス評価の結果については毎学期、留学生センター教員会議、並びに留学生センター委員会で報告され、JLCの企画・運営のあり方と開講される各種日本語クラスの質の保持、向上に役立っている。

(4) 指導教員（学部・大学院等の各部局）への通知

学習者がオンラインでJLCの受講申し込みをすると、そのことを知らせるメールが自動的に受講希望者情報の一部として登録されている学習者の指導教員（各部局）に送られるようになっている。これは、留学生センターでの日本語学習と学生の所属する学部・大学院等での専門分野の研究の両立が（主として時間的に）困難であるにも関わらず、学生独自の判断でJLCに受講申し込みをした者がいた場合、指導教員と学生がJLCの授業が開始される前に、JLCの受講に関してよく相談してもらうための措置である。日本語・日本文化研修コース生やJTW短期留学プログラム生など、留学生センターに所属する学生もいるが、割合から行くとJLC各コース/クラスを受講者は、学内各部局に所属する大学院生や研究生が大半である。そうした学生がJLCの受講を希望した場合、学位取得に至る専門分野での研鑽・研究に支障がないように、また指導教員の了解・了承を得た上で日本語の学習が進められるようにという配慮から、このような措置をしている。

(5) 成績送付

従来は学期毎に封書（学内便）で指導教員と学習者の双方に成績を送付していたが、事務作業の軽減・効率化を図るため、電子メールの形式で送付できるようにした。

3. 今後の課題

学習者側の受講申し込みと教師側の管理運営をオンライン化したことで、様々な面で作業の効率化を図ることができた。しかし、更なるシステムの改善に向けていくつかの課題も見つかっている。以下2点に絞って今後、改善されるべき問題点をまとめる。

(1) 操作マニュアルの提示方法

オンライン入力システムの操作マニュアルを作成し、オンラインシステム上に載せ、そのマニュアルを見ながら入力操作ができるようにはしているが、それでもシステムの使い方がよく分からないため、スムーズに受講申し込みの手続きや個人情報の入力・更新を行うことができない学習者がいる。

その結果、申し込み手続きが不完全なままであったり、申し込み手続きをすることなくプレースメントテスト当日に会場にやってくる学習者もいる。オフィスアワーを設けて、受講希望者に対応したり、メールアドレスを公開して、学生の問い合わせを受け付けたりしてはいるが、こういった手段を活用することを思いつかない学習者もあり、また、オンラインシステムの画面で表示される情報のみでは不安が解消されない学習者もいるようである。このような学習者への対応を再度考える必要がある。

(2) コース評価の入力

オンライン化する前は、学習者によるコース評価は、コース修了時に教室で記入してもらっていたため、授業時間を削られるきらいはあったものの、回収率はほぼ100%であった。しかし、オンライン化した後、入力は学習者の自主性にまかせることとなり、平成17(2005)年秋学期の入力率は、JLC受講者全体の57%に留まった。コース評価の結果は、コース全体の見直しや個々の教師の授業改善のための資料として活用されていることは先に触れたとおりであるが、そのためにも今後、入力率を高める手段を講じる必要がある。

資料 1

学習者用オンラインシステム トップページ

九州大学留学生のための日本語コース
Kyushu University Japanese Language Courses

LOGIN USER: Kakiku Kekoka

九州大学留学センター
平成17年度留学生のための日本語コース
Japanese Language Courses for International Students (JLCs)

3期の申し込み
Application For Round 3

開講スケジュール Schedule

3期 (Round 3)	10月13日～11月16日 (October 13 to November 16)
--------------	---

過去に受講したことがある方は、個人情報の登録及びパスワードの変更を必ず行って下さい。
If you have attended classes before, please register your personal details and change your password.

個人情報の登録及びパスワードの変更は、左のメニュー「各種変更」内の「個人情報変更」「パスワード変更」から行えます。
You can register your personal details and change your password using sub-headings "personal details" and "password" under the menu item: "Change your details" on the left of this screen.

システム操作方法
Operating manual

資料 2

クラス案内

J-1(旧G1)

1回90分の授業を週4回行う。日本語学習経験の無い学習者を対象に、基礎的な文法や語彙を勉強し、簡単な日常会話ができるようになることを目指す。

(テキスト: Total Japanese vol.1 L1 - L13)

毎週進行四次90分間の授業。以無日本語学習経験の学習者為対象, 学習基礎的の語法与詞語, 達到能進行簡單的日常会話的能力。

(教材: Total Japanese vol.1 L1 - L13)

90-minute class four times a week. This course is for students who have no experience studying Japanese. It teaches basic grammar and vocabulary and develops the ability to have simple everyday conversations.

(Text: Total Japanese Vol. I L1 - L13)

1회 90분 수업으로 주 4회 실시한다. 일본어 학습 경험이 없는 사람이 기초적인 문법과 어휘를 배워 간단한 일상회화가 가능해질 것을 목표로 한다.

(교재: Total Japanese vol.1 L1 - L13)

資料 3

学習者用オンラインシステム 成績確認画面²

九州大学留学生のための日本語コース
Kyushu University Japanese Language Courses
LOGIN USER: Aiu Eoka

■ TOP PAGE

■ 成績参照
[Check grades](#)

■ 受講申し込み
[Sign up for classes](#)

■ 各種変更
[Change your details](#)

■ アンケート
[Students evaluation](#)

■ LOG OUT

システム操作方法
■ [Operating manual](#)

年	期	受講クラス	成績	評価	出席率(%)
Year	Round	Class	Score	Rating	Attendance
2005	3	K-3	90	A	100
2005	4	J-1	99	A	90
2005	4	K-3			
2005	5	J-1	90	A	100
2005	5	K-5	78	C	100

資料 4

教師用受講管理システム プレースメントテストの点数を入力する画面³

NO	名前	G1	G2	G3	G4	文法	聴解	聴解 (100%)	読解1 (100%)	読解 (100%)	漢字
06-001	カキク ケコカ Kakiku Kekoka	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>

登録 戻る

資料 5

教師用受講管理システム 学習者のクラスを決定する画面 (決定クラスを選ぶ)。

NO	名前	J	J 受講	K	K 受講	S	S 受講	R	R 受講	W	W 受講	T	T 受講
06-001	カキク ケコカ Kakiku Kekoka	J-3	<input type="checkbox"/>	<input type="text"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="text"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="text"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="text"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="text"/>	<input type="checkbox"/>

戻る

注

- 1 詳しくは小山悟 (2005) 「日本語補講コース (JLC)」『九州大学留学生センター紀要』第14号を参照。
- 2 試用用のダミー学生の成績確認画面である。
- 3 学習者「カキク ケコカ」はテスト用の実在しないダミー学生である。

日本語 CAI (Computer Assisted Instruction) コース

鹿 島 英 一*

CAI コースは、通常の補講コース(週 2 回以上)と時間的に合わない、定期的な時間が取れない、来日時期が通常と異なる、など諸事情のある本学の留学生や客員研究員を対象とした日本語補講コースで、学習内容の入ったコンピュータの使い方を理解し、各学習者が自分に合った進捗と目的に応じて、学習できる点に特徴がある。

初歩からサバイバルが可能なレベルまで対応できるだけでなく、中級レベルに達した(漢字圏出身などの)既習者にもコンピュータで復習できる充分好い機会にもなる。担当教員は(機材の使い方の外に)教室で各学習者個人からの日本語やその学習方法に関する質問にも細かく対応している。尚、コース選択はニーズに応じてある程度柔軟に対応している。

平成17年4月からは場所を変え、教材の種類を増やして、コースを新たにした。平成17年度のコース概要は以下のとおりである。

前期：平成17年4月12日～7月14日

CAI 1 火曜日 14:50～16:20 (第4時限)

CAI 2 木曜日 14:50～16:20 (第4時限)

後期：平成17年10月11日～平成18年2月10日(年末年始期間を除く)

CAI 1 火曜日 14:50～16:20 (第4時限)

CAI 2 木曜日 13:00～14:30 (第3時限)

担当教員：鹿島英一

教室：情報サロン室 (留学生センター 1 F)

レベル(目安)：CAI 1 日本語学習経験が無いが、平仮名の学習を一応終わった学習者。

CAI 2 初級の学習を一応したことのある学習者か、それ以上のレベルの者。

定員：学習に利用可能なコンピュータの台数 (10台)。

教材：以下の7種類。

1. ひらがな(HIRAGANA)
2. かたかな(KATAKANA)
3. 漢字(KANJI) 漢太郎(KANTARO) 1
4. 漢字(KANJI) 漢太郎(KANTARO) 2
5. 漢字(KANJI) 漢太郎(KANTARO) 3

*九州大学留学生センター教授

6. 動詞活用(Verbal Conjugations) まなびや(Manabiya)

7. 中級入門までの総合練習(General Japanese Drills up to Intermediate Learners)

申込方法：

留学生センター（箱崎キャンパス）の留学生課センター担当係（TEL 642 2142）に所定の申請用紙に書き込んで、期限（前期は4月8日）までに提出する。後期からは申込書は留学生交流係に事前に提出すればいいこととした。

概要：

学習者ニーズの多様化が一層進んでいる。以前はひらがなの既習を前提としていたが、本年度はその制限も取り払った。また、後期から申込方法を変えたことで、いつからでも、また可能な時だけでも参加できるようになった。

学習者数は(機材の使い方を理解するために1回だけ参加する者を除けば)、前期7名、後期9名で、学習者のレベルは極く初級から比較的高い中級(復習)までバラエティに富んでおり、進度もコースの目的に沿ったものであった。

学習者は通常の補講コース(週2回以上)と併用する者と、以前の能力の回復を目指す者に大別されるが、前者の方が多い。今年度は前者の中にはひらがなの学習が終わるところまでに足が遠退く傾向が見られる一方で、熱心にクラスに通って用意した質問と共に弱点を細かくつぶしてゆく学習者も少数いた。

尚、自らの日程調整で、時に日本語 CAI 開放時間^{*)}の利用で代替する学習者もいた。

参考^{*)}：

本コースに出席して利用法を習得した学習者などが本コース開講時間以外（月～金：8：45～17：00：日本語 CAI 開放時間）に、同じ場所、同じ機材を利用して、学習することは本学の留学生や訪問研究員なら誰でも可能(担当教員なし)である。その場合は、留学生課の担当係に申し出た上で、必要品を受け取ってから利用してもらいたい。

比較社会文化学府での実践報告

小 山 悟*

平成17年度は、因京子・小山悟の2名が比較社会文化学府の「日本語教育講座」に所属する協力教員として大学院教育に携わった。

1 担当科目

因 京子

- ・日本語教育方法学
- ・日本語教育調査研究方法論
- ・日本語教育総合演習
- ・日本語教育特別研究
- ・博士総合演習 .
- ・博士演習 .
- ・博士特別研究

小山 悟

- ・日本語教育学
- ・日本語教育調査研究方法論
- ・日本語教育総合演習

2 担当学生数 (平成17年度5月現在)

因 京子	修士13名	博士12名	研究生3名
小山 悟	修士5名	博士1名	研究生1名

3 修士号の取得状況

平成17年度に因・小山が指導教員として修士号取得までの指導及び審査に関わった学生の氏名と論文題目は以下の通りである。印は小山が世話人教員を務めた。

麻生 迪子 「そば」に関する意味・語用論的考察

網野 薫菊 日本語会話におけるターンテイキングのストラテジー

顔 暁冬 終助詞「よ」と「ね」について - 自然会話における「ね」と「よ」のコミュニケーション機能 -

*九州大学留学生センター助教授

久木元 恵 リキャストの気付きに影響を与える要因とその分析

塩川絵里子 日本語学習者のアスペクト形式「テイル」の習得 - 文末と連体修飾節との関係を中心に」

平 静 日中のポライトネスの対照研究 - 日本語と中国語の談話分析を通して -

古谷 真希 談話中の授受補助動詞の機能に関する一考察

4 修士号の取得状況

平成17年度に提出された博士論文の中に、因・小山のどちらかが指導及び審査に関わった学生のものはない。

日韓共同理工系学部留学生予備教育プログラム 2005年度（6期生）実施の概要

岡崎 智己*

0. はじめに

前回の報告¹では本学における本プログラムの実施経過をプログラム開始当初（2000年）から2004年度（5期生）までを概観し、併せて韓国で行われる渡日前予備教育の概要、及び本プログラムの特徴と問題点についてまとめた。よって本稿では2006年度（6期生）に対する予備教育プログラムの概要について報告するにとどめる。なお、本紀要・年報中の「Education and Supporting Network for International Students in the School of Engineering of Kyushu University」においても日韓共同理工系学部留学生予備教育プログラムについて言及されているので、そちらも併せてご覧いただければと思う。

1. 受入れ学生（6期生）

2005年に受入れた本プログラム生は計7名で進学先の学部・学科は以下の通りである。

工学部・機械航空学科	2名
工学部・電気情報工学科	2名
工学部・建築学科	1名
工学部・物質科学工学科	2名

2. 授業計画

6期生への予備教育（半年間）に関しては、例年のそれに準じて、以下のように定められた。

開講式	平成17年10月6日
オリエンテーション	同上
授業開始	平成17年10月11日
授業終了	平成18年2月17日
閉講式	平成18年3月10日

また、日本語や数学、物理、化学等の専門基礎科目の教育の他に、2005年度は留学生センターで実施される日本語・日本文化研修コースや日本語研修コース（大学院入学前予備教育）と合同で、防災センターの見学や日帰りバス旅行（熊本・阿蘇・黒川）を実施した。

*九州大学留学生センター教授

なお、予備教育期間中の専門基礎科目の総授業時間は、各科目とも30時間、日本語に関しては420時間以内とされた。

3. 実施授業科目

2005年度に実施された授業科目は2004年度（5期生）と同様であるが、週に一度、ホームルームの時間を設け、コーディネータ役の教員が学生一人一人の受講状況や生活状況を確認するようにした点と、本プログラム生だけのための特別日本語クラス「聴解・作文」を週に1度設けた点が、前年度とは異なる。なお、選択日本語に関しては、前年を踏襲し、留学生センターで実施される全学の留学生向け日本語コース（JLCs）の中からレベル別、技能別で、各学生に適したクラスを受講させた。結果として、平均して一人3コース、週6コマ程度の日本語クラスを受講することとなった。以下に週間の時間割を示す。

	月	火	水	木	金
8:40 - 10:10		化学			
10:30 - 12:00	聴解・作文	選択日本語（各自のレベルに合わせて相当クラスを受講）			
13:00 - 14:30	数学 (微分・積分)	日本文化 日本事情	物理	数学 (線形代数)	英語
14:50 - 16:20	ホームルーム	選択日本語（各自のレベルに合わせて相当クラスを受講）			
16:40 - 18:10		選択日本語（各自のレベルに合わせて相当クラスを受講）			

上記時間割にある専門基礎科目、及び日本文化・日本事情の授業担当者も、これまで通り以下の学内各部局からそれぞれ配置されている。

数学	理学研究院
化学	工学研究院
物理	工学研究院
英語	言語文化研究院
日本文化・日本事情	留学生センター（指導部門）

4. 日本語会話パートナー

2005年度（6期生）に関しては、本学日本人学生による日本語会話パートナーを募集し、配置した。この日本語会話パートナーの制度は、本センターで実施される Japan in Today's World プログラム（JTW）や日本語・日本文化研修コース等の短期留学プログラムに参加・在籍する外国人留学生向けに開始されたものであるが、本予備教育プログラム生についても、日本語会話力の早期上達や本学での学生生活に一日も早く馴染んでもらおうとの配慮から、その利用を試みたものである。

日本語会話パートナー（＝本学日本人学生）の募集に当たっては、本プログラムの主旨を説明し、その上で工学部に進学予定の年下の韓国人留学生の会話パートナーとなってくれる人を探し、一対一

で本プログラム生に配置した。そして、活動報告（いつ会って、どんなことをしたか、その折の印象等々）を所定の書式に記入し、定期的に提出してもらうこととした。

会話パートナーとなってくれた日本人学生は、工学府、農学府、医学府、総合理工学府といった理工系の学部・大学院の学生ばかりではなく、法学府や21世紀プログラムの学生もいた。総じて日頃から留学生と積極的に交流したいと考えている学生、韓国に興味・関心を抱いている学生、あるいは韓国とは限らないものの来自分留学生となって海外へ出て行こうと考えている学生が会話パートナーを希望し、申し込んでくれたようである。

5. 問題点と今後の課題

結論から言えば、前回の報告（前掲）で指摘した様々な問題点は、2005年度（6期生）に関しても、残念ながら大きく改善されることなく、憂うべき課題として引き継がれたと言わざるをえない。本プログラムの制度的・運営的な諸問題は、日韓双方の政府レベルでの取り決めとも関わり、本センター一個で解決できることではないので、ここでは触れない。ただ、本プログラムで受入れる韓国人学生の勉学への姿勢、生活態度については、そうした制度的・運営的な問題とも関連する部分は多分にあるものの、受入れを表明した側、即ち本学でも対処していかなければならない問題であるから、ここではその点に絞って、2005年度（6期生）の事例に則して、少し述べてみたい。

まず、学生が受講する日本語各クラス、及び基礎専門科目への出席と学習の進捗状況については、連絡ノートを作って、各授業担当者が毎回授業終了後に記入をし、教員相互に学生の全般的な学習の状況を把握できるようにした。また、実施授業科目の項でも触れたように、今期は学生との交流・情報交換の実をあげるべく、週に一度、ホームルームの時間を設けた。そしてこのホームルームの時間を利用して、コーディネータ役の教員が、前述の連絡ノートに記入された学生各自の出席と学習の進捗状況をチェックし、もし問題となるようなこと、例えば無断欠席や宿題の未提出等が見受けられれば、該当学生にその場で理由を質すようにした。また、事務的な各種書類の提出や見学旅行や冬休みの予定等、重要な連絡次項のある場合も、書類やメールで連絡するとともに、この時間を利用して再確認するようにした。言ってみれば、学生の学習、生活面において、何らかの問題があれば、時を移さず、face-to-face で対応できる体制を敷いたわけである。しかし、伝達事項はしばしば無視され、問題が起きた場合も、教員や事務方からの働きかけにもかかわらず、状況の改善に至らない場合があった。

何よりも当惑したことは、反応が返って来ないということである。受入れた7名の学生全員というわけではないが、メールで連絡しても、返事が来ない。ホームルームで話しかけ、問いかけても、はっきりとした返答が得られない。当初は外国語である日本語でのコミュニケーションに問題があるのかと考え、韓国語の通訳を介して、事務的な手続きをきちんととることや学習姿勢、並びに生活態度の問題点について指摘し、注意を喚起するようにもしてみたのだが、どうも彼らの胸に響いていかないようであった。試行錯誤を続けたが、結局、無断欠席や宿題の未提出、小テストや終了試験のボイコット等の問題は2005年度（6期生）の予備教育期間を通じて、とうとう最後まで改善できなかった。

一度、本プログラムへの受入が決定し、奨学金の受給者となれば、予備教育期間中になにか問題があっても100%学部へ進学できる現行システムの問題点については、すでに多くの人がいろいろなところで指摘している。高校を卒業したばかりで社会経験のほとんどないこと、それが躰の厳しいことで知られる韓国の親元を離れて初めて“自由な”独り住まいをすること、しかも親の目がまったく届かない外国＝日本で、毎月潤沢な奨学金を受給されてであること等々による「問題」発生要因についてもすでにあちこちで指摘された通りである。集団行動的な規律・規範が強く残る高校生の生活から、独立独歩を旨とする個人的な行動規範の求められる大学生の生活への移行を、それも言語も生活習慣も異なる外国＝日本で行わなければならないという戸惑いや困難もあるには違いない。しかし、だからといって、無責任な行動をとったり、決められた諸規定や学則を守らなくてもいいということにはならないし、ましてや学業をおろそかにしてもいいということにはならない筈である。何よりも本プログラム生に強く願うのは、選抜されて日韓両政府から奨学金を得て留学してきているという立場を強く自覚して欲しいということだ。むろん、こうしたことは2005年度の6期生にもホームルームの時間を利用して繰り返し語りかけた。しかし、実のあがらなかったことは、すでに述べたとおりである。

では、どうしたらいいのか。そこで、本プログラムの運営・指導体制の見直しを提案したい。前回の報告（前掲）で述べたような事情から、一昨年、昨年と本プログラムのコーディネータ役を日本語教育部門の教員（筆者）が務めてきた。そして日韓共同理工系学部留学生事業協議会との連絡、韓国での予備教育を担当する慶熙大学国際教育学院との連絡、受入れ留学生との連絡と来日に当たっての各種情報の提供、また専門基礎科目の教育を担当する学内各部局に所属する教員との連絡にはじまり、受入れ留学生到着時のオリエンテーションや日本語コース受講の案内からホームルームの実施と発生した各種問題の処理に至るまで、担当事務員の協力・支援を得ながら、ほぼ一人で行ってきた。受入れ学生に関する情報を拡散してしまわずに集中管理したほうがより適切に状況の把握と問題への対応ができるであろうと考えたからであった。が、やはり一人で全てに対応しようとするには無理があった。よって次年度からは本プログラムに関係する教員各自の専門性が発揮でき、学生に対するより細やかな指導・対応のできるよう分担指導体制をとることを提案したい。具体的には1) 専門基礎科目の教育、2) 日本語教育、3) 生活指導・カウンセリングの3分野に分かれ、それぞれを専門とする教員の代表1名が責任者となって各分野毎に学生各自の学習状況、生活態度等に気を配るようにはどうかと考える。これまでのように一人のコーディネータが何もかもを取りしきるのではなく、「餅は餅屋」式の分担指導体制を敷くことによって、より権威と説得力のある指導・対応がそれぞれの分野で可能となるのではないだろうか。またそうすることによって、学生側でも与えられる指示や注意をより厳粛に受け止めてくれることを期待したい。

最後に、日本語会話パートナー制度導入の実効については、来年度も引き続き同制度を利用、実施したうえで、その様子を見て、改めて総括することとしたい。

注

1 九州大学留学生センター紀要第14号（2005年）55 - 60頁

日本語・日本文化研修コース

第6期生コーディネーター
清水百合*

1. はじめに

九州大学における日本語・日本文化研修コースはいくつの変遷を経て、現在は留学生センターが担当している短期留学プログラムの一つとなっている。

2. 概要

平成12年度から日本語・日本文化研修コース生は一括して留学生センターが受け入れを行っており、平成16年度以前の受け入れ人数は以下の通りである。

平成12(2000)年度 5名 平成13(2001)年度 2名 平成14(2002)年度 2名
平成15(2003)年度 9名

以下は、平成16年度からのコースの概要である。

1. 受け入れ期間 その年の10月1日から翌年の7月31日まで
2. 目的 日本語・日本文化研修コース生が、今後の日本研究に必要となる日本語能力の向上を図るとともに、日本の社会や文化に関する理解を深める
3. コースの内容
 - a) 必修科目 18単位 420時間
留学生センターで開講される「日本語(上級)」、「日本語・日本文化概論」、「日本語学」および「日本語教育学」など
 - b) 選択科目 4単位 60時間
学部で開講される日本の社会や文化に関する学部学生向けの授業
計 22単位 480時間
4. 課題研究 研修コース生が各自の関心に応じて日本研究に関するテーマを設定し、指導教員による個別指導を受け論文にまとめる。
5. 単位認定 本コースで履修した科目は、成績認定が行われ、所定の要件を満たすと修了証が授与される。また単位互換に応じることができる。

*九州大学留学生センター教授

3. 平成17年度の日本語・日本文化研修コース

1) 平成17年度前半：平成16年度に始まった第5期生（15名）のコースが引き続き4月から9月まで行われた。主な日程は以下の通りである。

2005年4月11日 授業開始

4月22日 課題研究中間発表

7月20日 課題研究最終発表会

1. 外国人児童への日本語学習支援

トー・ビーフィ/シンガポール・シンガポール国立大学

2. 日本・タイの女性語 - 女性語の現状と評価意識

オパシナー・スパオン/タイ・チュラロンコン大学

3. 「痴呆性高齢者」の「終のすみか」をどこにするか

カン・ボラム/韓国・麗水大学校

4. 「お笑い文化」は日本の社会でどのように位置づけられているのか？

キム・ビンナ/韓国・培林大学校

5. ベトナムから日本への「えび」輸出

ホアン・タック・ゴ/ベトナム・ハノイ貿易大学

6. 現代日本就業主婦の姿

グエン・チィ・トゥイ/ベトナム・ハノイ貿易大学

7. 日本語の格助詞「に」のモンゴル語にあたる意味の研究

ナンザド・ガンチメグ/モンゴル・文化教育大学

8. 正しい翻訳とは何か

レオンティ・ワレリ・ドゥベ/オランダ・ライデン大学

9. 日本語の短縮語

ミカエル・ヨハンソン/スウェーデン・ストックホルム大学

10. 日本語における「失望」を表す表現

パトリク・ツェルヴィンスキー/ポーランド・ワルシャワ大学

11. 中国人学習者における日本語の自動詞・他動詞の誤用

ルー・ペイスイ/中国（香港）・香港中文大学

12. 現代日本における改憲論とその歴史的背景

クリスティアン・フィツェック/ドイツ・ミュンヘン大学

13. 江戸時代の朝鮮通信使

イム・ヘラン/韓国・慶北大学校

14. 「韓流ブーム」と韓国に対する親近感 - 冬のソナタを中心に

キム・ネユン/韓国・慶北大学校

15. 日本と台湾の貿易関係 - 九州の場合 -

リ・テンレ/中国（台湾）・台湾大学

7月22日 閉講式

2) 平成17年度後半：10月に10名の研修コース生で平成17 - 18年度コースが始まった。

10月6日 開講式

10月11日 授業開始

平成17年秋学期時間割り(コースの必修科目のみ記載)

	月	火	水	木	金
1		上級日本語 1		日本語日本文化概論	
2					
3		上級日本語 2		日本語学	上級日本語 5
4			上級日本語 3	上級日本語 4	
5					

上級日本語の科目名は以下の通りである。(5科目の内、4科目を選択)

上級日本語 1 「マンガで学ぶ日本語と日本社会」

上級日本語 2 「社会問題に見る日本社会」

上級日本語 3 「日本人の横顔」

上級日本語 4 「人と社会を考える」

上級日本語 5 「ジェネレーション Y」

11月21日 見学旅行(熊本城 阿蘇 黒川温泉)

12月23日から 1月13日まで 冬休み

2月7日 前期授業終了

2月14日から 春休み

4. 学生の評価

1) 第5期生

コース評価は主に上級日本語のクラスと課題研究の指導について聞いた。その結果、はっきり問題となった点を指摘することができなかった。しかし問題がなかったわけではない。これは日本語・日本文化研修コース生の特徴だと思われるが、15名がそれぞれの母国で日本語を勉強して来ており、その内容や方法については全く異なっている。必然的に九州大学での日本語のクラスに期待するものも種々雑多であって、難易度についても、宿題の量についても、回答は多様であった。

全般的な傾向と言えるのは、来たばかりの研修コース生は秋学期にはまだそれほど日本語での授業に慣れていないため、言葉の意味の違いや使い方の違いについて質問をする機会を設けてもらうことを期待している。またクラスで勉強している内容に関して、自分の意見を皆に聞いてもらいたいという気持ちと他の学生の意見を聞いてみたいという気持ちがあり、それが議論に発展すれば素晴らしいと思っているが、実際のクラスでは教師は盛り沢山の内容を短い時間に詰め込む傾向にあるようである。

春学期になると議論を期待する気持ちがさらに強くなり、またそれが内容的にも深く考えることができる授業だと満足感が高まる。

課題研究については、秋学期には教師との信頼関係についてのコメントが多かったが、春学期になると内容に関しての教師の指摘で自分の考えを深めることができたというような本来あるべきコメントが多くなっている。実際に書く作業に入ると教師の存在がいかに頼りになるかを自覚するためと思われる。そんな中、教師が多忙で課題研究に費やす時間が短くなっていることに対する不満も若干見られた。

2) 第6期生

秋学期の評価は、第5期生に近いものであった。クラスで意見を発表できること、さらに議論ができることが良い点であると答えている学生が多かった。しかしながら、そのような授業の準備として出される宿題の量は、母国で慣れている量、あるいは単に予想した量より多かつたらしく、宿題の量や難しさが問題であるとした回答がほとんどであった。宿題を100パーセントすることが難しいとき、とりあえず何をどこまですればいいかわからず困っているようである。教師の方からある程度のガイダンスが必要かと思われる。

5. 第6期で行った改良

第5期の研修コース生からの希望の中に、担当の教師が内容を決める「上級日本語」のクラスについて学生に選択の余地がないので、選択できるようにしてほしいという声があった。また秋学期と春学期にレベルの差がなく、単に内容だけが異なると言うのは物足りないという声もあった。

そこで、コーディネーターが調整し、JLCの上級レベルの学生も受講できることとし、「上級日本語」のクラスを選択できるような数を開講することにした。また内容も秋には基礎的なことをし、春には応用をするというような工夫を担当の教師に依頼した。

また第5期の研修コース生は、ゲスト（小学校の校長）に話を聞くというクラスについてもっといろいろな話を聞きたかった、また小学校等に行ってみたかったとの感想を述べていた。

そこで、第6期生の上級日本語のクラスではまず下準備として日本の小学校についての読み物を読み、質問を準備してから見学を行った。見学の後のクラスでは感想を述べあい、教育における小学校の役割とは何かについて議論を行った。このような構成の授業は、実際に現場で仕事に携わっている人から話を聞くことで、その職場の状況を理解する、日本社会をかいま見ることができたという満足が得られた。

6. 日本語・日本文化研修コースの課題

日本語・日本文化研修コース生は、来日した時には生活に必要なレベルの日本語は習得している。しかし、それは日本の生活に慣れていることを意味するものではない。生活についてはバスの乗り方もわからなければ、どこで何が買えるかもわからないところから始めなければならない。周囲の人々

に聞きながら、一つ一つできるようにするには数週間かかるであろう。

大学での勉強についても同じことが言える。日本語がわかって、日本の大学での勉強方法はわからない。まず学生はどこまで勉強すれば「できた」と思えるのかわからない。

例えば宿題をしても、それが難しくできないと思う時、どうすればいいかわからない。また簡単だと思う時、本当にそんなに簡単なのかもわからない。教師の方も、日本語・日本文化研修コース生は様々なレベルの学生が一つのクラスにいるので、何をどこまでやれと指示したらいいのかわからない。真面目に努力したいと思っている学生が多いだけに、この行き違いが学生を苦しめているのは残念である。

もちろん、留学とはそうしたものであるとは言える。しかし、母国では上記のような様々な状況の際、話してみることでできる友人がいる、相談できる教師がいる。そんなところから来て、今は1人でがんばっている学生に対してのコース・オリエンテーション、クラス・オリエンテーションにおいて、目標は何なのか、どのような段階的努力が必要なのか、どのような評価をするのかについて細やかな配慮があれば、学生の不安に悩む時間を少なくし、安心して勉強に打ち込むことができるのではないだろうか。

九州大学におけるサマーコースの実践

2005年・2006年プログラムの概要とホームステイプログラムに関する考察と報告

Report on the 2005 and 2006 Asia in Today's World (ATW) Program

岡崎 智己*

高原 芳枝**

西原 暁子***

0. はじめに

Asia in Today's World (ATW)プログラムは国立大学初のサマーコースとして2001年と2002年に試行的に実施されたUMAPリーダーズプログラムを後継する形で開始され、2006年で通算6回目の開講・実施となる。2005年プログラムは43名、2006年は過去最高となる55名の留学生を受け入れた。前回の報告では2001年～2004年までのプログラムの内容と実施経過について概観したので、本稿では2005年と2006年プログラムの概要を述べると共に、初年度より毎年実施している福岡市と近郊の家庭におけるホームステイプログラムに焦点をあてて報告する。

1. ATWプログラムの概要

	2005年	2006年
実施期間	2005年6月27日～8月5日(6週間)	2006年7月3日～8月11日(6週間)
対象者	外国の高等教育機関に在籍している学部生及び大学院生で以下の条件を満たす者 ・外国の国籍を有する者 ・学業及び人格が優れており、原則として在籍している大学の推薦を受けた者で、英語による専門科目を履修するに十分な英語力(TOEFL550点以上)を有する者 ・留学の目的及び計画が明確で、日本への留学の成果が期待できる者	外国の高等教育機関に在籍している学部生及び大学院生で、以下の条件を満たす者 ・学業及び人格が優れており、原則として在籍している大学の推薦を受けた者で、英語による専門科目を履修するに十分な英語力(TOEFL550点以上)を有する者 ・留学の目的及び計画が明確で、日本への留学の成果が期待できる者 ・日本での留学期間終了後、在籍大学において学業を継続する者

*九州大学留学生センター教授

**九州大学国際交流推進室助手

***九州大学国際交流推進室助手

	2005年	2006年										
実施期間	2005年 6月27日～8月5日(6週間)	2006年 7月3日～8月11日(6週間)										
対象者	・日本での留学期間終了後、在籍大学において学業を継続する者	日本国籍を持ちながら外国の大学に在籍している学生へも門戸を広げるため、2005年まで設けていた国籍条項を削除した。										
開講科目	1) 人文・社会科学系「アジア研究コース」全4科目(教育言語:英語) 2) 自然科学系「実験実習コース」個別対応(教育言語:主に英語) 3) 日本語(初級前半～中級後半・全4レベル) 4) 日本語ワークショップ(希望者から別途受講料を徴収して登録制で実施)											
時間割	<table border="1"> <tr> <td colspan="2">日本語1(9:00-9:50)</td> </tr> <tr> <td colspan="2">日本語2(10:00-10:50)</td> </tr> <tr> <td colspan="2">日本語3(11:00-11:50)</td> </tr> <tr> <td>アジア研究 13:00-14:30 (14:50-16:20)</td> <td>実験実習 13:00～</td> </tr> <tr> <td colspan="2">ワークショップ(15:10-16:40)</td> </tr> </table>	日本語1(9:00-9:50)		日本語2(10:00-10:50)		日本語3(11:00-11:50)		アジア研究 13:00-14:30 (14:50-16:20)	実験実習 13:00～	ワークショップ(15:10-16:40)		注) 日本語クラス:後半3週間は10:00開始。アジア研究:科目によっては講師の都合により午後2コマ行う場合あり。
日本語1(9:00-9:50)												
日本語2(10:00-10:50)												
日本語3(11:00-11:50)												
アジア研究 13:00-14:30 (14:50-16:20)	実験実習 13:00～											
ワークショップ(15:10-16:40)												
奨学金	12万円/人を19名に支給 20人の奨学生の内1名が、交通事故のため来日直前に参加を辞退した。	12万円/人を20名に支給										
見学旅行 (登録制)	1) 佐賀県西有田町 棚田農作業体験(日帰り) 2) 厳島神社、広島平和記念公園(1泊) 2006年度は錦帯橋と広島城を追加。 3) 茶会(半日)											
宿 舎	以下の組み合わせにより希望をとり、調整して割り当て 1) 3週間ウィークリーマンション+3週間ホームステイ 2) 全期間(6週間)ウィークリーマンション 3) 全期間ホームステイ											
参加費	160,000円(6単位分の科目を履修、見学旅行は全て不参加、全期間ホームステイをした場合)～236,300円(6単位分の科目を履修、見学旅行に全て参加、全期間ウィークリーマンションを利用した場合) 別途:日本語ワークショップ登録料(130,000円)											

2. 参加者数

2005年と2006年の応募者、並びに受講者(=受講許可者の内、実際にプログラムに参加した者)の国別内訳は以下のとおりである。

	応募者総数	受入許可者総数	受講者総数
2005年	106人	64人	43人
2006年	74人	65人	55人

(単位:人)

年	U K	ベル ギー	スウ エー デン	ア メ リ カ	カ ナ ダ	韓 国	シン ガ ポ ール	台 湾	中 国	香 港	タ イ	マ レー シア	フィ リ ピ ン	計
2005	0	5	1	4	0	5	13	1	9	4	1	0	0	43
2006	1	1	0	7	2	12	17	5	2	3	0	1	4	55

3. 開講科目

人文・社会科学系「アジア研究コース」の開講科目と各科目の受講状況

各科目とも、授業回数は14回（30時間相当）で、2単位とした。

「アジア研究コース」 開講科目・授業担当	受講生数	
	2005年	2006年
Comparative Anti-Terrorism Law and Policy Victor Ramraj, National University of Singapore Mark Fenwick, Kyushu University	24人	N/A
Food and Agricultural Economics in Japan and Asia-Pacific Shoji Shinkai, Kyushu University	21人	16人
Modern Japanese Literary Culture in Historical Perspective Chia-ning Chang, University of California, Davis	34人	N/A
Doing Business in Asia Hwy-chang Moon, Seoul National University	13人	N/A
Japan and Asia-Pacific in Modern Times See Heng Teow, National University of Singapore	N/A	34人
Japan and Regional Integration in Asia Dimitri Vanoverbeke, Katholieke Universiteit Leuven	N/A	25人
Death in the Japanese Literary Tradition Noel J. Pinnington, Kyushu University	N/A	32人

自然科学系「実験実習コース」に申請して行われた自主研究と受入部局

6週間の期間中ほぼ毎日実験実習に従事するコースとして、4単位相当とした。

2005年度「実験実習コース」自主研究課題タイトル	受入部局
Control over the Crystal Phase, Morphology and Aggregation of Calcium Carbonate by Employing Biological Molecules as an Additive	工学研究院
Contextual Inhibition in Reinforcement Learning	工学研究院
Tethered Space System Dynamics	工学研究院
Assessment of Constituent of Ginsenoside in Thai medical Plants using Monoclonal Antibody	薬学研究院
Methods of Use and Different Properties of Various Exoskeletons	理学研究院

2006年度「実験実習コース」自主研究課題タイトル	受入部局
Hybrid and Alternative Fuel Vehicles	工学研究院
Material Science	理学研究院
One-Dimensional Photonic Crystals	システム情報科学研究院

日本語コースの受講状況

6週間の期間中ほぼ毎日授業を行い（授業時間総計60時間）、2単位を認定した。

	初級1	初級2	初中級1	初中級2	中級	計
2005年	12人	5人	8人	8人	10人	43人
2006年	15人	13人	5人	13人	8人	54人

日本語ワークショップ受講状況

ワークショップはプログラムの教科課程の外に、約40時間の集中講座として設けており、単位は認定していない。

2005年	2006年
1人	4人

九大生の受講状況（アジア研究コース）

アジア研究コースは初年度(2001年)より全学教育科目として九大生の履修を可能としている。プログラム開始当初よりの九大生の登録・受講状況は以下のとおりである。

年度	科 目 名	登録者 (A)	(A)の内 授業に11 回以上出 席した者	(A)の内 交換留学 した者
2001	・ Japan and the Asia-Pacific in Modern Times	9	3	2
	・ Premodern China in Global Perspective	3	3	1
	・ Government and Politics in Japan	3	2	
2002	・ Death in the Japanese Literary Tradition	3	1	1
	・ Japan and the Asia-Pacific in Modern Times	5	1	1
	・ Globalization in China Today	14	7	3
	・ The Oceanic Revolution: Iberians in the Pacific	9	4	1
	・ Japan the real, Japan the imagined	20	12	6
	・ Government and Politics in Japan	18	5	4
2003	・ Globalization in China Today	6		2
	・ Japanese Religious Practice: Tradition and Modernity			
	・ Cultural Anthropology-Tripping the borders: Performance, negotiation, gender and Japanese socioculture(リレー講義)	4	1	3
	・ Japanese Religious Practice: Tradition and Modernity	5	1	
	・ Understanding 'Other' Cultures: Perspectives and Gazes(リレー講義)			

2004	・ Japan and the Asia-Pacific in Modern Times	7		1
	・ Food and Agricultural Economics in Japan and Asia-Pacific	2	2	
	・ Japanese Culture: Modernity and Tradition	6	1	2
	・ Japanese Political Culture in Transition: An Alternative Model?	7	2	3
2005	・ Comparative Anti-Terrorism Law and Policy	6	1	2
	・ Food and Agricultural Economics in Japan and Asia-Pacific	7	3	3
	・ Modern Japanese Literary Culture in Historical Perspective	5		2
	・ Doing Business in Asia	10	2	3
2006	・ Japan and Asia-Pacific in Modern Times	1		1
	・ Food and Agricultural Economics in Japan and Asia-Pacific	2	1	
	・ Japan and Regional Integration in Asia	3	1	
	・ Death in the Japanese Literary Tradition			

上記統計が示しているように、登録はしたものの途中で授業に出席しなくなる九大生も多く、ここでは、履修/聴講したと判断できる学生数の目安として、14回の講義の内11回以上出席した者の数を挙げています。また、11回以上出席した者の中には、交換留学を目指し、その準備（もしくは予行演習）として英語で教授されるアジア研究コースの各科目を受講した学生、あるいは交換留学から帰って、英語力の保持のためにアジア研究コースを履修/聴講するケースが多い。登録者数が2002年をピークに減少しているのは、学年暦の変更により2003年から本学の第1学期がATWプログラムの実施期間と重なる8月初旬までとなったことが影響していると考えられる。

4. チューター制度

ATWプログラム参加者（以下、サマーコース生と表記）には本学の学生をボランティアチューターとして1対1で配置している。チューター活動は来日時にスタッフとともに空港へ出迎えることから始まり、ATWプログラム実施中に生活面、学習面でさまざまな支援を行う。チューター活動は、海外留学を計画中、もしくは海外留学に興味関心を持つ本学の学生にとって、留学前に外国人との交流を体験できる絶好の機会となっている。事実、チューター活動が海外留学への強い動機付けとなり、交換留学の申請につながるケースも少なくない。また、すでに交換留学を終え帰国した学生が、自身の留学経験を活かし、チューターとして活躍する例も多く見られる。

チューターの募集

チューターは学内掲示、交換留学メールマガジン等により公募し、応募にあたっては、氏名・連絡先その他、次のような項目で調書提出を求め、選考および留学生との組合せに利用している。

1. これまでのチューター経験
2. チューター制度をどのようにして知ったか
3. どこの国からの留学生のチューターになりたいか、またその理由

4. 外国語は何がどの程度できるか
5. どのようなことを心がけてチューター活動をしたいと考えているか、またその理由
6. チューター経験を今後どのように活かしていこうと思っているか

チューターの配置

2006年度は55名のサマーコース生に対して、各キャンパスの学生からあわせて57名の応募があり、うち1名を、直接担当する留学生を持たずにチューター全体を統括するチューターリーダーとし、伊都キャンパスに通う留学生1名には伊都キャンパスの学生2名を割り当て、その他は1対1の配置とした。

サマーコースは箱崎キャンパスで実施されるが、チューター応募者には、六本松キャンパスの1、2年生を中心に他キャンパスに在籍する学生も多い。一方サマーコース生は来日後しばらくの間、国、地域ごとにまとまって行動するケースが多いため、チューターを担当留学生の地域ごとにグループ分けし、グループ内での協力体制を敷き、さらに、ひとつのグループに箱崎以外のキャンパスのチューターが大きく偏らないよう配置して、箱崎キャンパスでのサポート態勢が手薄にならないよう配慮した。なお、各グループにはグループリーダーを置いたが、これはグループ内の互選により決定した。

箱崎以外のキャンパスの学生は、サマーコース生とキャンパス外で交流することが多くなりがちだが、都合のつく限りは箱崎キャンパスでサポート・交流活動してくれるよう求めた。

チューター評価

2006年度（有効回答者数32人）

	大変よい	よい	ふつう	あまりよくない	よくない	無回答
回答者数	22人	10人	0人	0人	0人	0人

2005年度（有効回答者数28人）

	大変よい	よい	ふつう	あまりよくない	よくない	無回答
回答者数	12人	10人	5人	0人	0人	1人

チューター活動と交換留学

チューターには交換留学に関わる学生が毎年かなりの割合で含まれる。次の表は各年度のチューターの中で、すでに交換留学を経験していた学生と、2001年度から2006年度までのいずれかの年度で交換留学に申請した学生の数である。

年 度	2001	2002	2003	2004	2005	2006
全チューター数	9人	14人	36人	46人	44人	57人
交換留学経験者	0人	1人	3人	7人	6人	3人
2001～2006年度に交換留学を申請した者	2人	4人	13人	15人	10人	9人

5. 宿舎・ホームステイ

ホームステイプログラム参加人数

ホームステイプログラムはサマーコース全期間、もしくはサマーコース後半のいずれかで行うものとし、受講生の希望をとって実施している。サマーコースの全期間をホームステイした場合は6週間、後半のみのホームステイは初年度から2004年度までは2週間で設定、2005年度、2006年度は3週間で設定した。後半を1週間長くした理由は、2004年度まで前半期間中の宿舎として利用していた安価な民間学生寮の確保が困難となり、ウィークリーマンションを利用しなければならなくなったため、こうすることで前半の宿舎滞在期間を短縮し、学生の費用負担（次項参照）を抑えるよう努めた。

	受講生総数	ホームステイ者数(1)	全期間ホームステイ者数	後半2週間 ホームステイ者数
2001年	20	20	設定無し	20
2002年	25	25	設定無し	25
2003年	20	20	4	16
2004年	46	42	7	35
2005年	43	41	14	27
2006年	55	50	27(2)	23

1 ホームステイを希望しなかった学生は全期間ウィークリーマンションに居住

2 2006年度は、全期間ホームステイの家庭が5家庭不足したため、5名の学生が前半と後半を異なる家庭にホームステイした。よって、同年の全期間ホストファミリー数は32家庭である。

2005年度より、全期間ホームステイ希望者の割合が大きく増えている。一因として考えられるのは、この年より宿舎が費用の高む（次項目参照）ウィークリーマンションとなり、出費を抑えるため全期間ホームステイを選択する学生が増えたというものである。

ホームステイ費用

ホームステイ期間中は、ホストファミリーより個室および朝夕2食（土日は3食）が提供される。

	全期間ホームステイ	3週間ホームステイ	(参考)ウィークリーマ ンション 全期間個室(食事無し)	(参考)ウィークリーマ ンション 全期間2人部屋(食事無し)
料金	70,000円	35,000円	120,000円	80,000円

ホストファミリー数の推移

ホストファミリーは福岡市および近郊の市町村に住む一般市民を対象に募集を行っている。

UMAPリーダーズプログラムとしてサマーコースが実施された2001年度、2002年度は福岡市に隣接する古賀市の全面的協力を得て、ホームステイを古賀市民の家庭において実施した。九州大学独自のサマーコース（=ATWプログラム）として実施された2003年度以降は、福岡市を含め、古賀市以外の市町村からもホストファミリーを募集している。

	受講生総数 (1)	ホーム ステイ者数	全ホスト ファミリー数	古賀市ホスト ファミリー数(内数)	福岡市ホスト ファミリー数(内数)	その他市町村の ホストファミリー 数(内数)
2001年	20人	20人	20	20		
2002年	25人	25人	25	25		
2003年	20人	20人	20	18	2	0
2004年	46人	42人	42	22	14	6
2005年	43人	41人	41	11	15	15
2006年	55人	50人	55()	6	35	0

2006年度は、全期間ホームステイの家庭が5家庭不足し、5名の学生が前半と後半を異なる家庭にホームステイしたため、ホストファミリー数がホームステイ者数より5多くなっている。

ホームステイ開始までのプロセス

1. ホストファミリーと留学生の双方から徴収する調書（次項参照）に基づいて両者の組合せ（暫定）を行う。
2. ホストファミリーに、留学生のホームステイ調書を送付し、受入れの諾否を確認。
3. 受入れが決定した学生には、ホストファミリーの連絡先を伝える。（学生側の重要な希望事項が叶えられない場合は、希望に沿えない部分について学生に連絡し、ホームステイプログラムを選択するかどうか、再度意思確認を行う。）
4. ホストファミリーを対象とした説明会の実施（場所：九州大学箱崎キャンパス留学生センター。）
注）サマーコース生に対してはコース開始時のオリエンテーションにおいて、ホームステイに関する注意事項、心構えを指導。
5. 全期間を通してホストファミリーとなる家庭には、受入れ学生の来日スケジュール（航空便と到着日時等）を連絡。
6. ホームステイ開始。
（全期間ホームステイの場合）ホストファミリーが空港へ出迎え。自宅へ連れ帰り、ホームステイ開始。
（後半3週間ホームステイの場合）プログラム前半3週間が終了した週の土曜日にホストファミリーがウィークリーマンションへ出迎え、自宅へ連れ帰り、ホームステイ開始。（前半3週間の間に、ホストファミリーと留学生が連絡を取りあって事前に対面するケースもある。）

ホストファミリー調書記載事項

ホストファミリーには登録時に下表に記載の項目について回答を求め、のちに受講生から来日前に徴収するホームステイ調書と合わせて、学生とホストファミリーの組合せを行っている。左端に、
、
の記載がある項目は、およそ次のような優先度で組合せをする際の参考としている。

組合せの際に、特に重視していることがら

＼ 比較的配慮していることがら

＼ 可能であれば配慮していることがら

基礎情報	
氏名	
連絡先(住所、電話、FAX、Email)	
家族構成と各メンバーに関すること	
同居家族の続柄	(注) サマーコース生に提出させる調書で「家庭に子供がいないことが気になるかどうか」を質問しており、本項目と照らし合わせている。
年齢、職業 / 学年	(注) サマーコース生に提出させる調書に「家庭に幼児がいると気になるかどうか」を質問しており、本項目と照らし合わせている。
趣味	
話せる外国語	(注) 別項にて、「日本語初心者の受入を希望するかどうか」を質問するが、たとえ初心者受入可としても、家族全員が日本語しか話せない場合は、不測のトラブルを避けるため、ある程度日本語のできる学生を配置している。
喫煙の有無	(注) 家の中で喫煙する者がいる場合、学生によっては大きなストレスとなる場合がある。サマーコース生に提出させる調書と照らし合わせ、喫煙者のいる家庭には喫煙を気にしない学生を配置する。* 喫煙を気にしない学生は少なく、一方で喫煙者家庭は全体の3分の1近く(2006年度は17/55)あるため、組合せを難しくしている。
ホストファミリーの経験 (時期、受け入れた外国人の国籍、性別、年齢)	
海外でのホームステイ経験 (時期、滞在国、当時の年齢)	
物理的環境	
ペットの有無、種類、数、 屋内 / 屋外	(注) 動物嫌いの学生およびアレルギー等の理由により動物に近づけない学生をペットのいる家庭には配置しないようにしている。
部屋の広さ / 洋室か和室か	
エアコンの有無	
寝具 (ベッドかふとんを敷くか)	(注) サマーコース生に提出させる調書で「ふとんを敷いて床に寝ることに抵抗があるか」質問しており、本項目と照らし合わせている。ふとんで寝ることは異文化体験ではあるが、毎日の睡眠に影響し、健康問題にもつながるため、できるだけ学生の希望を叶えることとしている。
家庭から九大までの交通機関、所要時間、交通費、九大から自宅までの地図	(注) 募集にあたっては「公共交通機関を利用して片道1時間以内で通学可能な地域」を条件としているが、毎年必要家庭数確保が容易でなく、実際には通学に1時間以上かかる家庭も含まれる。その場合、交通費も割高となるため、そのような家庭に配置した学生からはしばしば不満が出ている。経済的な問題は学生にとって特に重要であるため、遠い地域の家庭には奨学金等が措置される学生を配するなどの対応を考慮するものの、優先項目(の項目)との折り合いがつかないことも多い。
受入家庭側の希望	
受入期間	(注) 2006年度の受入期間は次の3種類。 ・ホームステイ全期間(6週間) ・ホームステイ前半3週間 ・ホームステイ後半3週間 うち、前半3週間というカテゴリーは、6週間受入可の家庭が不足の場合に、後半3週間の家庭と組み合わせて、6週間ホームステイを実現することを目的として2006年度初めて設定したものである。

学生の性別の希望	(注) 極力希望どおりとし、希望と異なる場合は、事前照会している。
学生の国籍の希望	(注) 受入家庭のモチベーションにも関係するので、できるだけ希望する地域の学生を配置したいが、実際には他の優先項目に従って調整をするため希望通りにはならないことも多い。このことは調書中に注意書きして周知している。他の優先項目を満たしてなお可能な場合は、希望に沿うよう努力している。
日本語初心者の受入の可否	(注) サマーコース生に自己申告させた日本語能力と照らし合わせ、日本語初心者は、本項目を可としている家庭に配置している。なお、本項目が「可」とあっても、家族構成欄の「話せる外国語」にまったく記載がなく、基本的な英語もしくは留学生の母国語を解する家族が一人もいない場合は、生活上のトラブルが生じやすいと予測されるため、日本語能力ゼロの学生は配置していない。
ベジタリアンの受入の可否	(注) 毎年、宗教上の理由や健康上の理由により、食べられない食品がある学生が数名(10%程度)いる。このような学生には献立を別メニューとしなければならず、食事の準備に手間がかかるため、この項目を「否」とする家庭が多い。今後、サマーコースの参加者が増加した場合に、ベジタリアン学生の受け入れ先確保が難しくなることも予想される。
家庭のルール (注) 以下の項目は「受入家庭側の希望」欄以外の全項目とあわせて、ホームステイ開始前に当該学生に周知している。	
家事手伝いを望むか否か	
週末を一緒に過ごすことを望むか否か	
門限の有無と「有」の場合の詳細情報	
国内電話を掛けることの可否	
友人の訪問の可否	
喫煙の可否	(注) 実際にはサマーコース生で喫煙する者はまれであるが、学生が喫煙する場合は、「否」の家庭に配置しない。
受け入れる留学生に聞いておきたい事	
事務局側の情報収集に関するもの	
ホストファミリー募集をどこで知ったか	(注) 広報活動の参考としている。

ホームステイに関する学生の評価

学生のホームステイに対する評価は立地を除き極めて高い。幸い、ホストファミリーは概して学生受入に熱意を持ち、温かく遇していただいているため、学生の満足度は高いようである。立地によって、通学にかかる時間と費用に学生間で大きな差が出ることは、非常に頭の痛い問題だが、大学近辺に必要な家庭数を確保できないため、広域に向けて募集せざるを得ない事情が背景にある。

2006年度 (有効回答者数34人)

立地

	大変よい	よい	ふつう	あまりよくない	よくない	無回答
回答者数	12人	13人	3人	3人	0人	0人

ホスピタリティ

	大変よい	よい	ふつう	あまりよくない	よくない	無回答
回答者数	25人	4人	2人	0人	0人	0人

2005年度 (有効回答者数28人)

立地

	大変よい	よい	ふつう	あまりよくない	よくない	無回答
回答者数	7人	9人	6人	3人	1人	2人

ホスピタリティ

	大変よい	よい	ふつう	あまりよくない	よくない	無回答
回答者数	20人	4人	1人	0人	0人	3人

自由記述によるコメント (原文 = 英文を和訳して抜粋)

- ・ホームステイによって日本語がかなり上達した。
- ・立地以外はすばらしかった。
- ・とてもよい経験ができた。後半3週間だったが、6週間にすればよかった。
- ・立地が大学から1時間以上と遠かった。
- ・ホストファミリーとのコミュニケーションが難しいことがあった。自分は日本語がわからず、ホストファミリーは英語ができなかった。

ホストファミリーに対して実施した終了後のアンケート結果

ホストファミリーを対象としたアンケートは、受入期間とコミュニケーションの状況を、それぞれ「長い/ちょうどよい/短い」「とてもよい/よい/あまりよくない/全く取れなかった」の項目から選択して回答してもらうようにしているが、例年、期間は適当、学生とのコミュニケーションもよく取れたという回答が大部分を占めている。しかしながら、自由記述の欄ではホームステイ期間中の小さなトラブル、困った事例、苦情が列挙されるケースもしばしば見受けられる。よくある事例として、「学生が友人やチューターとのつきあいを優先し、家庭内でコミュニケーションを図る時間が少ない。」「夕食の要不要を連絡しない。」などがある。これらの情報は、コース開始直後の学生向けオリエンテーションや、チューターへの事前説明会においてフィードバックし、注意を喚起しており、そのせいか2006年度は例年に比べると、ホストファミリーから寄せられるこの類のクレームが少なくなっている。

なお、2006年度に関して言えば、来年度以降、再考を要する運営上の問題点が一点明らかになったので指摘しておきたい。2006年度は全期間 (= 6週間) 受入可能なホストファミリーが不足し、苦肉の策として5名の学生が前半3週間と後半3週間で異なる家庭にホームステイする変則的な配置方法を行ったが、このような形態は学生と後半のホストファミリーにやや精神的なプレッシャーがかかるようであった。学生には、はじめに馴染んだ家庭を離れがたく思うとともに環境の変化に対する不安が昂じて、前半 (= 3週間) を過ごしたホストファミリーに対して滞在期間を6週間に延長できないか打診する者も現れた。一方、後半 (= 3週間) に学生を受け入れる家庭にも、前半に受入れを行ったホストファミリーのやり方を気にしながら、学生の満足度が下がらぬようにと必要以上に神経を遣

うケースが見られたのである。

2006年度（有効回答数41家庭）

期間

	長 い	ちょうどよい	短 い	無回答
6週間ホストファミリー	2	12	2	1
3週間ホストファミリー(前・後半)	3	20	1	

留学生とのコミュニケーション

	とてもよい	よい	あまりよくない	全く取れなかった	無回答
6週間ホストファミリー	11	2	2	1	1
3週間ホストファミリー(前・後半)	13	10	1		

2006年度ホストファミリーからの自由記述によるコメント（抜粋）

(費用に関すること)

- ・ホストファミリーへの謝礼金が多すぎるような気がする。
- ・外食（注：家族と一緒に外出した際の学生自身の食事代）は自己負担して欲しい。

(コミュニケーションに関すること)

- ・パソコンをしてばかりで会話があまりなかった。
- ・帰宅は極めて遅く、土日は友人やチューターとの遊びが優先され、交流はほとんどできなかった。チューターの役割にも疑問を持った。
- ・知っている日本語を一生懸命使い、何とか相手にわかってもらおうと努力する留学生に、夫婦二人、会話も途絶えがちな中に、忘れかけていた相手への言葉掛け、思いやり等を思い起こさせてくれ、とても新鮮な感じになった。
- ・留学生は夜遅くまで勉強していたようだ。ホストファミリーとしては特別なイベントを考えがちになるが、本人が今一番何をしたいか（家で休みたい、勉強したい など）をまず第一に考えることが大切だと思った。
- ・チューターに助けられた。九大生と交流できたのもよかった。

(全期間ホームステイを希望した学生を前半3週間もしくは後半3週間で受け入れた家庭のコメント)

- ・前半受入だったが、学生から6週間居させて欲しいと言われて困った。
- ・前半の受入家庭に何となく遠慮してしまった。

2005年度（有効回答数22家庭）

期間

	長い	ちょうどよい	短い
6週間ホストファミリー	0	6	3
後半3週間ホストファミリー	1	10	2

留学生とのコミュニケーション

	とてもよい	よい	あまりよくない	全く取れなかった
6週間ホストファミリー	6	2	1	0
後半3週間ホストファミリー	4	8	1	0

2005年度ホストファミリーからの自由記述によるコメント(抜粋)

(費用に関すること)

- ・週末に学生を連れ出して観光に行くのは楽しいが費用面が負担になる。
- ・経済的負担が大きいので泊まりがけの旅行は連れて行けなかったが、他のファミリーではやっていた。日本の家庭を体験するというホームステイの基本重視でゆきたいが、学生同士の情報交換が活発なので、受入れファミリーによって学生に対する対応・待遇の違いが不満や誤解を招かないか、こわい。
- ・観光に友達を連れて行きたいなど、要求が多かった。いやな思いをさせたくないのですべてOKした。
- ・観光地でのチケット代や交通費は留学生在が自分で出してほしかった。事前に自分で出しておいたが、出してくれなかった。
- ・帰りに空港でお金が足りないと言い出し、受入れた学生に急遽1万円貸した。(帰国後に郵送にて返却)

(コミュニケーションに関すること)

- ・毎晩帰宅が遅く、夕食を一緒にとる機会はあまりなかった。
- ・帰りが遅くなっても連絡しない。注意してもだめだった。

(その他)

- ・節電や節約の観念が無く、注意しても直らなかった。
- ・食べ残しが多く、気になった。日本語の授業で日本式のエチケットについて取り上げてもらえるとうり難い。

トラブルの傾向と要因、並びに今後の対策

学生がホームステイを途中で辞めたいと申し出たり、ホストファミリーが学生の扱いに苦慮して相談してくるケースがあり、その結果ホームステイを途中で切り上げるという事態も毎年若干ながら発生している。持ち込まれるトラブルの傾向には、大きく分けて次の2つが挙げられる。

1. 学生が新しい環境やホストファミリー宅での生活習慣に適應できない。
2. ホストファミリーと学生との間に感情的な溝が生じる。

学生にとっては環境・習慣への不適應のみが問題で、ホストファミリーとの人間関係には問題の無いケースもあるが、環境・習慣への不適應から感情的な問題に発展し、関係修復が困難となることもある。

いずれの場合も、学生とホストファミリーの双方から詳しく事情を聞き、「学生の勉学、日常生活

に支障が出る」「学生、ホストファミリーの双方、もしくはいずれか一方に精神的負担が大きい」と判断された場合は、ホームステイを中断している。

これらトラブルの要因としては、これまでの事例から総合すると次のようなことが考えられる。

- ・学生に社会性、協調性が不足している。
- ・学生とホストファミリーが性格的に合わない。
- ・学生、ホストファミリーともに遠慮して言いたいことを伝えられないなど、双方のコミュニケーションに何らかの問題がある。
- ・ホストファミリー側の期待が過剰で学生の精神的負担となっている。

このうち、「学生の社会性、協調性の不足」が一因となっているケースが最も多く、ホームステイに対する心構えを学生にしっかり持たせる、もしくは何の考慮も無しに安易に学生がホームステイプログラムを選択しないような仕組みが必要であると考えられる。アンケートでホストファミリーから寄せられるコメントに「友人とのつきあいを優先して、家庭での交流が少ない。」「ホームステイを安価なアパート代わりにしている」といった、学生のホームステイに対する考え方を疑問に思う声が混じることからも、学生がホームステイプログラムを選択する際、ホームステイをするに当たっての自覚を持つようにしむける必要が感じられる。そこで、来年度以降は、サマーコース参加者が決定した後、宿舎・ホームステイの選択を照会する際に、ホストファミリーが学生に求める事柄について具体的事例を挙げて伝えるとともに、「ホームステイは単なる宿舎の選択肢のひとつではなく、日本人ファミリーとの交流プログラムであること」、「ホストファミリーは友好的かつ有意義な交流を目的として留学生を受け入れるのである」ことを前もって十分に自覚してもらえよう工夫を施してゆきたい。

6. ATW プログラム / 九州大学サマーコースに対する評価と今後の課題

参加者によるプログラム評価 (2005年度・2006年度)

- ・「アジア研究コース」について (有効回答者数：2005年度23人；2006年度33人)

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数 2005年度	6人	13人	3人	1人	0人
回答者数 2006年度	14人	18人	1人	0人	0人

- ・「実験実習コース」について (有効回答者数：2005年度5人；2006年度1人)

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数 2005年度	2人	3人	0人	0人	0人
回答者数 2006年度	1人	0人	0人	0人	0人

- ・「日本語コース」について (有効回答者数：2006年度34人；2005年度は調査していない)

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数 2005年度	-	-	-	-	-
回答者数 2006年度	12人	17人	5人	0人	0人

- ・「日本語クラス」と「アジア研究コース」あるいは「実験実習コース」とのバランスについて
(有効回答者数：2005年度24人；2006年度34人)

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数 2005年度	5人	4人	5人	3人	0人
回答者数 2006年度	15人	14人	5人	0人	0人

- ・プログラムの総合的な評価（有効回答者数：2005年度24人；2006年度34人）

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数 2005年度	10人	13人	1人	0人	0人
回答者数 2006年度	28人	6人	0人	0人	0人

全体的に見て、日本語コースとアジア研究コース／実験実習コースを組み合わせたカリキュラムについては、大半の参加者はよいと評価している。日本語学習のみのプログラムにすべき、あるいは日本語クラスの比重を大きくすべき、という意見を持つ参加者もいるが、少数である。アジア研究コースや実験実習コースをATWプログラムの魅力とする意見が毎年あることから、こうした英語で講義の行われる専門科目の質を保証するために、今後も努力していかなければならないと考える。

カリキュラムに関して、参加者から出るマイナス評価の要素はほとんどが学習量（時間）に関するものである。2005年度のアジア研究コースの場合、いくつかの科目は、その日の講義を受講する前に読んでおく資料が多いなど、授業時間以外に予習に費やす時間を多く要求するものであった。アジア研究コースの他に、日本語コースでも毎日課題が出されており、参加者たちは、ホストファミリーや友人と自由に過ごす時間を削って、宿題に追われるということになり、2005年度プログラムの評価では、この点を不満とする意見がかなり出された。

この反省から、2006年度は、授業以外の学習量が過重にならないよう、各授業の担当教員に協力いただいたので、前年のような不満は聞かれなくなった。しかし、担当教員の都合でプログラム開始直前に時間割を変更し、本来ならアジア研究コースは期間を通して、毎日午後1コマの時間割で組んでいたものが、1日に2コマとする週を何週か設けざるを得なくなったため、これらの週は、午後2コマのアジア研究コースに加え午前中は3コマの日本語クラスを受講するという、参加者にとっては部分的とはいえ、極めて負担のかかる時間割となってしまった。反面、それ以外の週は午前か午後どちらかは授業がないということになり、かなり変則的な時間割となったことで、プログラム全体として時間割のバランスが悪いという印象を持つ学生もいたようである。

また、総合評価に関し、学生チューター制度とホームステイプログラムにより、サマーコース参加者が同年代の日本人学生、あるいは幅広い世代を含む日本人ファミリーとの交流から多くのものを得たことを高評価の理由に挙げているケースが多かった。先に触れたように、学生チューター制度もホームステイプログラムも、ともにその募集や配置に時間と手間がかかり、準備をする側にはいろいろと苦労が多いのであるが、コース参加者の満足度が、その苦労に報いてくれているようでうれしく思う。

過去2年間におけるATWプログラムの参加者による総合評価は、まずまず合格点と言っていてであろう。今後ともこうした評価が参加者から得られるよう、プログラムの企画、運営に鋭意努力していきたい。

Building Competency through Study Abroad—The JTW Experience

Jordan Pollack

Much is made these days, and justifiably so, of the pressing need for colleges and universities to develop “global-ready” graduates (Bremer 2006; Olson and Kroeger 2001).¹ Such individuals ideally will conclude their formal schooling suitably equipped with “global competencies” - the knowledge, skills, and attitudes essential for effective functioning in a world now routinely referred to as “shrinking.” That world is one, in particular, of shrinking patience with cross-cultural *incompetencies*. The latter take various forms: ignorance of local histories and conditions, intolerance of differences, inability to communicate, indifference to sensibilities, and the like.

Key to achieving this educational target is providing students with a variety of opportunities for international experience, whether through study or work (typically internships or volunteering) abroad (Sowa 2002). These are presumed to foster acquisition of the critical competencies, which include, as identified in one influential formulation,² communicative effectiveness, self-management skills, active commitment to tasks, innovativeness and adaptability, collaborative dispositions and collegiality, accommodation of personal and social differences, and exemplary ethical behavior. Endorsements of the approach abound, and efforts to expand and diversify institutionally sanctioned options are widespread and intensifying. Linkages of academic exchange and collaboration now bind, if to varying degrees, centers of learning in Africa, Asia, Europe, and North and South America.

If there is broad consensus and much general commentary on the benefits of international education, however, there appears to be somewhat less consideration of how *specifically* the experience generates the preferred outcomes, and of what *exactly* those benefits consist. How *does* one after all, by living and studying or working in another society, become cross-culturally able and adept? What, more precisely, is involved in such undertakings that promotes the cultivation of understanding, talents, and mutual respect enabling coexistence and cooperation?

The discussion to follow suggests a few answers to these questions, by looking more closely at the nature of learning, or competency-building, in an education abroad program in Japan, of which the author is senior coordinator. Japan’s relevance, in this context, derives from its place in the imagination of the tens of thousands of students it attracts to its shores, imagination that

*International Student Center, Kyushu University

transforms substantially as their experience of the country unfolds. For some, Europeans and North Americans particularly, Japan epitomizes cultural exoticness, for which often they may have developed a romanticized infatuation; for others, notably Asians, it represents an economic juggernaut and regional force for which they feel pressure to prepare. In the ideal, but also usual, case, as students build understanding, communicative proficiency, and relationships, sober, sophisticated appreciation incrementally displaces euphoric or apprehensive naivete. Previously unconsidered commonalities, compatibilities, and complementarities enter awareness, prompting the re-imagination of Japan in more realistic, more promising ways.

Site and Setting

Japan in Today's World (JTW), established at Kyushu University in 1994,³ is a short-term,⁴ comprehensive living-learning program for international students, mostly undergraduates. It offers a rigorous Japanese studies curriculum, including language training at all levels, with an assortment of co- and extra-curricular activities that provide substantial exposure to cultural practices as well as occasions to meet people. Core course instruction is in English, and a limited supply of government- and University-funded scholarships are available.

JTW has expanded gradually over the last decade, adding courses, instructors, and students, who now number about 45.⁵ And it has undergone curriculum development and refinement as well (Cobbing 2001). A brief review of JTW's current academic design will set the background for subsequent discussion of learning activities.

All JTW students are required to be fully enrolled, defined as being registered for and taking for credit a minimum of five courses each term. While selection of various course combinations is possible, the typical load includes four or five core courses, a language course, and perhaps one or more courses taught through one of the regular faculties.⁶ In addition, all students undertake an independent research project (ISP), and some, an optional advanced laboratory research (ALR) project. Classes meet weekly for 90 minutes and a program semester is 15 weeks long, in compliance with general Kyushu University academic guidelines and Japanese immigration regulations bearing on student visas.

For its size, JTW offers a fairly wide range of courses in Japanese studies. Providing a balanced, representative diversity of analytical topics and levels, together with a variety of disciplinary perspectives and approaches partly in response to the considerable multiplicity of JTW student academic and cultural backgrounds and interests is a primary goal in determining the program curriculum each year. Recent core courses, for example, have examined Japanese cultural patterns, history economics, popular culture, literature, law, gender issues, politics, socialization, education, global and regional affairs, development studies, urban psychology,

performing arts, the tea ceremony, and cultural adjustment.⁷

JTW students, beyond having conventional coursework to do, are required, in a unique program feature, to research in depth a topic in Japanese studies of their own choosing the ISP. Whether they elect to pursue archival, laboratory, participant-observation, survey, or interview research, they must report in writing and present orally on their activity and findings at the end of each term. The projects, supervised by University faculty, are one or two terms in length depending on the period of JTW program participation.

A further research opportunity, though optional (unlike the ISP), is the ALR, which allows qualified, interested students at advanced levels in engineering, science, agriculture, or pharmacy to plan and carry out an intensive laboratory research project under the close guidance of a faculty specialist in the relevant area. An ALR counts as two courses toward the required five per term, given the time commitment and effort normally involved.

As mentioned, JTW students may enroll, with certain restrictions, in regular Kyushu University courses taught outside of the program framework, providing they can demonstrate the requisite Japanese language skills and can obtain the consent of the course instructor. Not many manage to meet the language test, however,⁸ and the science, engineering, and humanities classes that are conducted in English each term are predictably few and rarely Japanese studies-related, rendering this in practice a less significant program feature, yet still a real and important option for some.

Japanese language training is the final curricular component to be mentioned. Eight levels of general instruction, from beginning to advanced, are offered. Courses consist of two successive, rather intensive five-week sessions per semester.⁹ There are also complementary skills-oriented courses that focus on reading, writing (including Kanji-learning), and speaking. By design, workloads are quite heavy and progress expectations set high. While language study for JTW students, strictly speaking, is not mandatory, it is nonetheless strongly encouraged, and only rarely does anyone not already fully proficient forego the opportunity.

In support of their academic activity, JTW students have at their disposal a growing Japanese studies monograph and reference collection, in Japanese, English, and other languages, as well as multilingual computers at the International Student Center on Hakozaki Campus, where JTW is based, and at the main University Library, just next to the Center. The on-campus computers, as well as those found at the residential complex where JTW students live, allow full electronic access, thanks to the University library's many digital subscriptions, to thousands of online academic journals published from around the world.

With respect to co-curricular activities, JTW arranges monthly study trips, as well as occasional, informal outings led by the coordinator, that introduce aspects of Japanese social and material life. The excursions take students off campus, and often outside of Fukuoka City, a

dynamic metropolis¹⁰ and political and economic center of 1.4 million that is home to Kyushu University; they are joined usually by Japanese degree students, referred to as “tutors,” who after a careful selection process are assigned to individual JTW students for the duration of their program and trained to help them acclimate. Study trip destinations for 2006-07 include a *sumo* stable, a Shinto shrine, terraced paddy fields which students plant in the spring and harvest in the fall, the Nagasaki Atomic Bomb museum, a local nursery school and high school, a Zen Buddhist temple, and an automobile assembly plant, among others. Faculty lectures are given before each outing to provide background and orientation.

The more informal outings, to name just several, involve visits to local museums, the City’s disaster preparedness center (where students can experience an earthquake simulator), the wholesale fish market, a nearby women’s center and shelter, and an elementary school, as well as attendance of a football and a baseball game, and of various traditional festivals and parades.

Still other co-curricular activities involve program-arranged introductions for students to local families, who host them on weekend visits and during holidays, take them dining and traveling, and otherwise provide them with contact and opportunities very likely to develop into enduring, deeply rewarding relationships. The provision of one-on-one assistance to JTW students by University student tutors, to help them to settle in, has been alluded to. But the program also invites JTW students to ask to be assigned one or more conversation partners, again Kyushu degree students, for additional and more regular, if informal, occasions to practice Japanese.

As for extra-curricular involvements, the possibilities for JTW students are endless, and in some cases uniquely instructive. A wide range of volunteer groups and activity circles, whether sports-, performance art-, ritual-, or service-focused, present chances to break through social barriers that so often thwart international student efforts to achieve more than superficial intimacies. These organizations, which meet on a regular basis, are usually highly structured and disciplined, offering, beyond obvious opportunities for contact and interaction, an important exposure to broader patterns of authority and relationship in Japanese society.

Learning Competency

The burden of this discussion is to clarify what lessons, intentional and/or inadvertent, students are expected to absorb by virtue of studying abroad. Participation in the JTW program offers a wealth of experiences that constitute pivotal learning moments.

Classroom Lessons

Students apply to JTW for many reasons, but foremost among those asserted in the personal motivation statements solicited for the selection process is to deepen understanding and

appreciation of Japanese culture. Culture, for present purposes, is construed broadly as those conventional lifeways or practices constituting human social and material relationships within more or less distinguishable, self-identified groups or communities.¹¹ To explore Japanese culture is to get to know Japanese habits, customs, traditions, and the like, and thereby to get to better know one's own community and self. It is fundamentally a sustained effort to evaluate the familiar through discovery of the less familiar, to consider one's identity in the encounter with otherness, alterity, difference.

This engagement of self with other is the crucible within which global competency is molded and hardened. International education has no more basic rationale. Most students know this, even if they are not yet able to articulate the principle. To elaborate, JTW students come in search of Japanese *patterns* patterns *of* and *for* behavior that either will challenge or confirm their beliefs about *cross-cultural* similarities and differences. They come, or are sent by their schools, parents, or others influential in their lives, to test and stretch their sense of human limits and possibilities.

Think here of patterns *of* behavior as thoughts, feelings, and actions, particularly communicative actions, occurring more or less frequently in time and space; and of patterns *for* behavior as models, templates, protocols, or designs, variously encoded in brains, books, and other suitable storage devices, that enable or constrain what people do. And think further of *cultural* patterns as *conventional*, insofar as they are socially acquired and sanctioned, and as typically (though not always) in support of people's (though not necessarily everyone's) survival, reproduction, and/or well-being. Conventional patterns are socially acquired and sanctioned patterns acquired in that they are learned through imitation of, and instruction from, others; and sanctioned in that they are alternatively endorsed, praised, rewarded, forbidden, discouraged, punished, and so on.

So the first and most critical competency students develop is an awareness that the world is interpretable in terms of patterns, and patterns of patterns, that may endure or evolve, *and that may vary from place to place*. Culture as patterns is a flexible specification or refinement of the insight, which provides students with a conceptual tool allowing a more sophisticated appraisal of the conditions and practices they face while abroad. For instance, at JTW students are introduced to the idea during their orientation, and then reminded of it on multiple occasions, thereafter both inside and outside the classroom, throughout the year, that cultural accounts, as offered by Japanese and non-Japanese observers alike, often are problematic.

Cultural accounts may be problematic (inaccurate, incomplete, misleading, over-stated, etc.) because culture, as conventional patterns, can be: 1) elusive, difficult to detect, since often patterns are ambiguous, subtle, obscure, unobservable; 2) subject to exaggeration, given familiar tendencies to caricature (stereotype), assert as natural, or claim as essential and distinctive,

favored patterns; 3) over-generalized, with so many patterns typically unevenly distributed within, as well as between, groups; 4) merely nominal, when patterns in fact dissolve because contested, resisted, or ignored within, as well as between, groups; and 5) unstable or evanescent, especially in light of globalization's exposure of patterns to competitive variants, and of people to the very notion that globalization is having this effect. These critical insights, of course, are commonplace understandings for social scientists in the post-modern aftermath, but are not yet fully known, nor fully appreciated for their implications, by the novice intercultural adventurer, given ordinary undergraduate preparation for study abroad.

Now the JTW curriculum, outlined briefly above, provides concretely, to be sure, the pattern descriptions and evaluations referred to so far only in the abstract. But it would be tedious to reproduce course abstracts and syllabi readily available online (see: <http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/jtw/>). It will be sufficient and preferable simply to identify recent offerings, and to focus more specifically on two or three classes that foster the cultivation of interactive competencies most applicable to successful functioning in Japan. These illustrate the sorts of generalizable competency lessons that advance students along the path to expertise¹² and global readiness.

The JTW core course component each academic year consists of 18 to 20 different subjects or topics. In 2005-2006, for example, students could choose from among the following:

Semester 1 (October – February) Curriculum

Japanese Cultural Patterns. Examined cultural principles and practices of classification, socialization, organization, etc. in contemporary Japanese social life, applying multidisciplinary perspectives.

Macroeconomics and Japan. Treated macroeconomic aspects of Japan's economy, and showed how to apply macroeconomic analysis to actual Japanese conditions.

Japan's Aid to Education in the Developing World. Examined development approaches and the ways Japan has engaged international cooperation to promote education in countries challenged by poverty and instability.

Adjusting to Japan. Introduced some of the more important requirements for effective functioning in various everyday social contexts, with focus on propriety and interaction protocols.

Contemporary Issues in Japanese Law. Offered insights into Japanese legal practice through the examination of various high-profile issues in the spheres of constitutional, criminal, and civil law.

The Japanese Economic System. Provided an overview of the nature, history, and characteristics of the Japanese economy, with focus on corporate governance, financial intermediation, industrial organization, and more.

Gender in Contemporary Japan. Looked at issues related to the analysis of gender in the Japanese context such as role definition, employment and marriage trends, care of children and the aged, etc.

East Asian Community: Power, Norms, and Shared Values. Traced patterns of regional institutionalization in East Asia, from the traditional Sino-centric world order to the post-Cold War ASEAN +3 system.

East Asian Economic Development. Covered various aspects of East Asian development and development theory, highlighting issues of population dynamics, inequality, agricultural development, industrialization, and trade.

Japanese Life through Tea Ceremony. Explored the politics and poetics of tea and tea ceremony through English-language scholarship and representations of tea in Japanese cinema.

Semester 2 (April - July) Curriculum

Cultural Evolution of Japan. Surveyed changing patterns of subsistence, kinship organization, governance, religious activity, and aesthetic production, among other cultural domains, from early to modern times.

Structural Reform of the Japanese Economy. Considered structural impediments to further growth of the Japanese economy and the possible remedies for overcoming them.

Linguistic Description of Japanese. Investigated fundamental features of the Japanese language, with examination of the phonetic and writing systems, cultural aspects, and topics related to verbs and particles.

Contemporary Japan and Popular Culture. Examined contemporary Japanese popular culture in its visual, embodied, and gendered modalities, and with respect to its social significance, mass media influences, and consumerism.

Urban Psychology in Asia. Looked comparatively at people's collective and individual

behavior and experience place-finding, helping, cognitive mapping, crowding, etc. in Asian urban environments.

Japanese Politics Today. Discussed major Japanese political institutions, including parties, elections, legislature, bureaucracy, judiciary, and media, as well as policy and issue areas, and various analytical approaches.

Images of Death in Early Japanese Literature. Surveyed the Japanese literary tradition from the 7th to the 20th centuries, with thematic emphasis on the treatment of death and killing in mythic works, song, poetry, fiction, and diaries.

Growth and Fluctuations of the Japanese Economy. Scrutinized 1) Japan's notorious "Lost '90s" decade, during which the country suffered greatly from productivity stagnation, and 2) the potential of the IT revolution.

Enculturation and Education in Japan. Examined pre-modern and contemporary socialization practices, focusing on character and identity formation through early childhood training and formal education.

What should be evident from the curriculum inclusions is the attempt to provide a diversity of topics approached from a variety of disciplinary perspectives, as well as a balance of offerings focused on domestic or international issues, conditions, trends, etc. Students are exposed mostly to Japanese, but also to South Korean, British, Australian, and American, expert voices on patterning and pattern change, hearing assessments and predictions not always anticipated or to their liking. A growing, gnawing sense that the world holds surprises, and contradictions, and alternatives not yet experienced slowly, irresistibly takes hold. Several courses are worth a closer look for their explicit attempt to impart to students skills, ideas, and attitudes they can usefully carry with them across cultural borders.

Take *Adjusting to Japan*, for instance. This class has as its mission to supply students with practical know-how and conceptual underpinning for handling daily tasks, such as getting about, dealing with vendors, staying healthy, and much more. Early on advice is offered on settling in to life in Fukuoka that includes guidance on working with local authorities (calling for emergency medical care, registering a bicycle, applying for a work permit), finding resources (clinics and hospitals, bookstores, the best places to shop for various items, community bulletin boards), using systems (working an ATM, buying a train ticket, accessing the University's digital library). Students are told to take care of everyday needs first, to free up energy and

attention for the academic work soon to begin. They are encouraged to explore and experiment with the assistance of their tutor, or in groups of friends, but primarily on their own, trying out their Japanese, however strong or weak, to get comfortable with speaking for themselves, making the inevitable, occasional mistakes, but interacting directly with Japanese in their neighborhoods and most natural settings—getting used to their status as foreigner, outsider, *gaijin*, and to the strange feelings, and constraints—but also the advantages and opportunities—that may entail.

Time is spent discussing—both identifying and analyzing—the familiar patterns (stages, symptoms) of acclimation to new social and material environments, including the high probability of suffering early illness, periodic mood swings (homesickness, lethargy, anger, disgust, sadness, etc.) changes in sleeping and eating habits, altered activity levels, and the like, referred to commonly as “culture shock.” Differing degrees and types of felt shock are distinguished as culture surprise, euphoria, stress, irritation, fatigue, and extreme disturbance.¹³ Responses are recommended as well, with students encouraged, for example, to monitor their feelings, busy themselves or go out with friends when feeling depressed, talk to confidants, seek explanations, reframe their circumstances and feelings as normal and temporary, and adopt a self-forgiving attitude. The experience of facing and overcoming cultural adjustment difficulties is enormously gratifying and confidence-building, encourages subsequent and sustained cultural engagement, and stimulates the ambition and assertiveness needed for success in intercultural situations. The mind-set that one *can* cope, regardless of the circumstances, thus becomes transferable.

In this class students learn, along with a miscellany of other practices, how and when to bow, how to hold, use, and rest their chopsticks, how with them to eat rice and noodles, how to meet and greet people, including exchanging business cards, how to tailor dress to the occasion, how and when properly to sit on chairs and the floor, when and how to remove shoes and coats, how to conduct themselves in public baths, how and when to wrap and exchange gifts, how and when to apologize, or to complain, how to perform and decode gestures, how to read facial expressions and body posture, how to style-shift speech in satisfaction of formality and deference requirements, all as conventional etiquette, in the Japanese cultural context, dictates. They come to know the importance of scheduling, the meanings of timeliness, the pace of change, the limits to demands upon attention, as each is locally defined, and to a greater or lesser degree at variance with the standards at home. And they discover the significances and orderings of socially governed space, the distributions of access and activities, as these are publicly and privately constructed, respected, violated. Awareness especially of differential patterning in, and tolerance for, crowding, the compactness of structures, and constantly felt exposure to the native gaze grows as experiences with these phenomena accumulate.

Now many of the above skills and awarenesses, once acquired, are, needless to say, in their

specifics largely only relevant to navigating life in Japan. But what transcends the Japan experience are newly acquired appreciations that certain dimensions of practice may exist to which they must attend *in any setting*; that if time and space, for example, are not taken for granted as providing mere background to everyday events, but are instead presumed ordered, segmented, bounded differentially made available to, or controlled by, the relatively powerful, wealthy, esteemed, and so on these, too, as well as other dimensions or fields of social interaction must, but also can, be grasped and appreciated as a matter of adjusting to *all* cultural environments. Further, the sheer process of discovery of patterned praxis begins to bring its own pleasures: competency entails the sense of mastery, of successful achievement, and yields a profound self-satisfaction with, and trust in, one's efficacy itself an achievement the global-ready graduate cannot do without.

Moreover the growing realization of competency has its own "bootstrapping" (Carey 2004) effect: a kind of "meta-learning" occurs, as acquisition of skills and insights heightens sensitivity to the process and possible benefits of further acquisition, yielding a self-sustaining commitment to further learning. The student increasingly comprehends what learning can and should involve, and what of learning which learning skills can and should be applied in novel cultural contexts.¹⁴

On the level of attitudes and values, *Adjusting to Japan* informs students of the place of key notions that constitute or condition interactive behavior mentalities and styles valorized, if not always realized, as preferred modes of sensibility or conduct. Observance of formalism (*dō*), empathy (*omoiari*), maintenance of private/public (*honne-tatemae*) and of group membership distinctions (*uchi/soto*), sincerity (*makoto*), respect for seniority (*sempai-kohai*), patience and composure (*gaman*), determination (*gambari*), modesty (*kenkyo*), show of remorse and apology (*jigyō*), regular use of honorific language (*keigo*), avoidance of shame (*haji*), openness to guidance (*sunao*), prudence (*jicho*), tactical use of silence (*chinmoku*), self-restraint (*enryo*), perceptive understanding (*sasshi*), situational reliance upon go-betweens (*chukai-sha*), artful deployment of ambiguity (*aimai*), energetic show of interest (*aizuchi*), testing for consent or disagreement (*nemawashi*), trust (*shinyo*), simplicity/elegance (*wabi-sabi*), sensitivity to nature (*mono no aware*), vitality (*genki*), sustained effort (*doryoku*), self-strengthening through struggle and hardship (*kuro*), indulgent and mutual dependence (*amae*), felt obligation to reciprocate (*giri*), verticality or hierarchy (*jōge kankei*), adaptability or flexibility (*awase*), conformity and standardization (*kata, katachi*), and chicness (*iki*) are but some of the intentional patterns receiving exegesis and illustration.

The course, it should be stressed, is as experiential as it is prudential and conceptual. That is, for many of the cultural patterns introduced, demonstrated, and explained, students are assigned to go out and observe public behavior, to see for themselves whether and when the

patterns are practiced. These exercises teach and reinforce the idea that cultural accounts, as pointed out earlier, can misrepresent reality, stereotyping what in fact are typically variable, changing behavioral scenes. The exercises, moreover, sensitize students to the many dimensions of cultural patterning in play, possibilities all too often underappreciated, helping them to become better observers, more circumspect in their judgments, more receptive to the potential wisdom and virtues of other lifeways, and increasingly open to direct involvement with their cultural hosts.

Japanese Cultural Patterns, which complements *Adjusting to Japan*, but adopts a more scholastic, contemplative slant, examines, not surprisingly, salient cultural patterning both conventional principles and everyday practices in contemporary Japanese life. The approach is multidisciplinary, applying mostly anthropological, but also sociological, psychological, historical, and other perspectives. Lectures, readings, student presentations, and class discussions explore a range of topics, and the goal is to deepen appreciation of how Japanese create, understand, organize, appraise, and function in their present world. Discussions of Japanese identity and cultural imagination, ecology, demographics, socialization, kinship and gender, governance and social control, production, stratification and consumption, religion, and ritual allow important opportunities for students systematically to notice repeating mistakes of cultural interpretation (ethnocentrism, stereotyping, naïve realism),¹⁵ and to develop a more discriminating eye regarding claims to have captured the “distinctive essence” of a society.

One primary target of critical assessment in the course is the discourse on Japanese uniqueness and homogeneity known as *Nihonjinran*. A vast literature spanning decades and comprised of commentaries by outsiders as well as Japanese, by journalists and travelers and armchair speculators as well as scholars, has attempted to reduce complex and varying Japanese cultural patterns to simplistic, imaginary, undifferentiated ones (Befu 2001; Goodman 2005; Lie 2001). Inventing traditions and identities, and overlooking inconsistencies and contradictory evidence, *Nihonjinran* addresses Japanese insecurities of historical origin, ethnic authenticity and purity, comparative cultural stature, and national purpose.

Class treatment of this phenomenon exposes the mystifications of formulaic selfhood and otherness, both products of cross-cultural musings in response to acculturation. JTW students thereby become acutely aware of the temptations and dangers of categorical thinking (Lie 2001); they come to see the racism, hyper-nationalism, and exclusionary hubris propping up Occidentalism—exaggerations and caricatures of Western societies—no less than the condescending, abusive fantasies of Orientalism (Said 1979)—unfortunate, revealingly parallel habits of reductionist, exploitative analysis on the part of earlier “globalists” attempting to lock in their favored place on the world stage. The ability to see through and beyond fatuous narratives about cultural essence is indeed a competency for the global period, a lesson to be saved in active

storage for easy retrieval as students seek employment and influence in markets and political arenas marked by just so many Kiplingesque just-so stories.

More broadly, *Japanese Cultural Patterns* exposes the swirl of contending versions and voices constructing Japanese society and history. It becomes clear rather quickly, as students wade through their readings, that Japan is not just one cultural way, not made up of just one cultural substance. Generational, regional, class, ethnicity, gender, age and other dimensions of cultural variation cross-cut and complicate the “Japan” thereby rendered yet another “floating signifier” (Lie 2001), denoting a multiplicity of behavioral signifieds. And it becomes clear rather quickly, too, that observers from without Japan have vacillated, over the run of the post-war years, in their appraisal of the country’s tendencies and strengths. But this is therapeutic for undergraduates, who are easily given to generalization and facile assertions of cultural uniformity and durability. In this age of rapid transformations linked to intensified, expanded interconnectedness, they had better soon drop such habits.

A further word, too, on the role of assigning students in this class (and in most other JTW classes) presentation responsibilities as a pedagogical strategy and as part of their course performance assessment. Verbal participation is regarded as essential to effective learning. Studies indicate that people understand and remember far more of what they are asked to make clear to others, through presentations and sustained conversation, as compared to what they simply read, hear, or see. Formulating alternative ways to express ideas, for the purpose of helping others to grasp them, is the best way, it turns out, to strengthen one’s own command of those ideas. The exercise additionally fosters development of analytical and communicative skills needed to frame and transfer expertise to others “[t]hough experts know their disciplines thoroughly, this does not guarantee that they are able to instruct others about the topic” (Bransford et al, 1999).

Shifting focus to the competency contributions of language classes, it hardly bears mentioning that communicative skills indispensably matter. Speaking Japanese well, JTW students fairly soon find out, makes great differences in abilities to manage. This comes as no news to those with second- and third-language proficiencies, but many, if not most, program participants have yet to reach advanced levels before arriving at Hakozaki campus, which means most have not yet realized that relating socially through use of signs is more than serving up the lexicon in grammatically patterned ways. People *do* things with words, as Austin, Searle, and others have insisted. They perform speech acts, which are both acts of power, provoking other minds to respond in one or another manner, with or against the will, and acts of creation, enabling, through collective intentionality, the linguistic constitution of social institutions (Searle, 1995). And in voicing their utterances, people necessarily deploy paralinguistic techniques, usefully conceived as adjustable, deliberative patterning of signals and signal channels, which presume upon visual,

olfactory, acoustic, haptic, and other modalities, including gesture, facial expression, eye contact, proximity, scent, dress, and more.

The increasingly competent use of language in its multimodal fullness renders JTW students ever more sensitively cognizant of its intentional possibilities. Language becomes less taken for granted, and increasingly self-consciously *wielded* as a tool. This is newfound insight into one's own instrumentality as a semiotic agent, to be reflected on and nurtured. One can and one should learn how reflexively, and deftly, to manipulate through mediated means (linguistic and non-verbal signs). One can and should cultivate the faculties that offer access to, and some control over, other sensibilities, for collaborative, mutually beneficial effort, certainly a worthy goal in light of global exigencies demanding sincere interest and benevolent involvement.

In such light, the lessons, for example, of *keigo* (politeness) practice take on greater import. Here program language instructors sharpen student skills in style-shifting, in respect of the formality and deference conditions of the speech situation. Students learn *wakimae* (Maynard 1997), or normative *keigo* patterns *for*, which they must apply selectively upon consideration of gender, age, rank, intimacy, formality, topic, publicness and other factors defining jointly the appropriate usage. In such light as well, the lessons of linguistic relativity impart a crucial realization, namely that language learning, at a deeper level, is culture-learning. It is learning how people talk, and therefore think, about their world about how they divide up that world into categories, and how they connect those categories in discourse, creating their beliefs and values, and their stories of who they are and of what life is about. Social life as text and textual, as dialogically emergent, as constituted of and by semiosis this understanding, once attained and accepted, becomes a critical competency, too, that leaves students thereafter habitually poised to inquire, through the lens of sign systems, into what others think and want, and to see the indisputable value in doing so.

It might be emphasized too, at this point, with the attention on language behavior, that in every class meeting, whether a lecture or seminar, there are moments when contrasting national, gendered, age- and status-related styles of speaking, questioning, challenging, arguing are on display the modal assertiveness of American and German students that differs markedly from the customary reticence of Japanese or Korean students for example which surprise the unexpected and thereby provide still another significant occasion for competency-building through familiarization with alternative cultural patterns.

One additional academic activity at JTW, in the context of discussing competency-building, deserves brief comment as well. Reference here is to the independent study project, or ISP. As mentioned previously, the ISP is a mandatory undertaking, and spans the student's program participation period. Students pursue a topic of their own particular interest, and work up a research design and reporting goals in consultation with a faculty supervisor appointed to guide,

monitor, and evaluate progress. Each year JTW students take on a great diversity of projects, which range across the natural and applied sciences, social sciences, and humanities.¹⁶ Both the expected intensity and required duration of research facilitate a penetration of the topic that moves students well beyond the normal superficialities of understanding, and this in an alien setting, working with unfamiliar resources under unfamiliar conditions. The experience is new for most students, as it turns out, so they are as much learning how to carry out research as they are learning more about their chosen subject. They benefit from the exposure to Japanese scholarly thinking and methodology—students confer frequently and at length with their advisors—and they are rewarded with the elation of, again, self-satisfaction for having completed successfully (in virtually all cases) their project. But they also come to regard highly the benefits of, and hence the necessity for, sustained, serious inquiry as critical to moving beyond superficial cultural accounts.

Something very similar also occurs with the optional ALR projects, but students gain the additional benefit of having had the opportunity to work collaboratively with members, usually graduate-level students, of a research team in a Japanese laboratory setting (where shoe-removal and slipper-wearing tends to be the norm, participants like to observe). But in either case, competencies of communication and cross-cultural sensitivity, of persistence and flexibility in challenging circumstances, are nurtured, and will serve students well if enlisted for international employment.

Lessons Outside the Classroom

As a comprehensive living/learning experience, JTW presents its students with much that is not strictly academic from which to profit through the simple facing of everyday tasks and demands, most of them mundane (though a few are culturally iconic and inspiring).

Informal learning begins with a student's accommodation to living arrangements. Each participant is housed in a furnished single room with private bath at the Kyushu International House, a self-catering residential complex maintained for foreign students located three kilometers east of the Hakozaki campus. The rooms offer a bed, writing desk with lamp, chair, bookshelf, wardrobe, refrigerator, telephone, and combination air conditioner/heater. Every building, furthermore, is equipped with washing machines, and every floor provides accommodation for six or seven students who share a communal kitchen with sink and gas-fired stove. Shopping for food and other necessities is found conveniently nearby.

With water and heating/cooling individually metered by room, students must budget and plan, and in the process become sensitized to constraints, concerns, and costs familiar to most Japanese. They must also manage their shared use of facilities with co-residents from all over the world, who bring varying standards of cleanliness, property accumulation, noise tolerance,

and the like. The distance from campus itself forces students to learn bus timetables and routes, acquire and maintain bicycles, and more carefully plan their comings and goings. The commute also provides opportunity constantly to discover previously unnoticed aspects of Fukuoka's street and neighborhood life, and further reflexively to discover that this process occurs. Students over time develop well-defined cognitive maps of preferred pathways, shopping locations individualized by product and price, the location of friends, of clinics, of schools, and of entertainment, and so on, all of which contributes to a gratifying predictability of circumstances and that feeling of mastery and control over an environment alien and at times intimidating but eventually made familiar and comfortable.

Of course as students grow increasingly acclimated, they simultaneously, at least in most cases, elaborate their networks of friends and contacts, partly with the assistance of their assigned tutors and conversation partners. Any new relationship, to be sure, is an opportunity to cultivate intimacies, refine communication skills, share and clarify ideas, acquire still other friends and contacts. But relationships on education abroad programs often unfold between individuals of different nationality, so a play of customary differences of style, emotion, boundary definitions, etc., takes place, providing yet another productive crucible for cross-cultural discovery and refinement of interaction techniques.

No less significant a set of experiences is afforded by another JTW program feature: host family encounters. Alluded to above were the twice monthly visits, usually outings to celebrate holidays and festivals, or weekend overnights at the family home, that enable a student to witness first-hand Japanese domestic life. Students learn about house and apartment architecture and décor, observe the patterns of interaction between and among parents, grandparents, children, and sometimes relatives or neighbors, notice the normative distributions in time and space of people for meals, sleep, bathing, prayer, exercise and other activities, find out what is watched on television, hear what is seriously talked or joked about, and experience much more, gaining an authentic feel for the rhythms and prerogatives of family life while developing relationships likely to last indefinitely.

Kyushu University club activities, too, from music performance and tea ceremony to archery, swimming, volleyball, rugby, baseball, even US football, as well as the martial arts, including aikido, judo, karate, and kendo, enrich the JTW student's learning environment. Aside from providing training in its constitutive activity, a club represents a social world for its members, at times strict in its expectations of their etiquette and participation, at other times relaxed in its role as a closed community, exclusively supportive and comforting toward its members. Most clubs exhibit the vertical society and seniority system characteristic of many adult institutions, with everyone fitted into a structure of *sempai/kohai* relationships, hence serve as a socializing context for Japanese students. Training regimens typically are demanding, and students find

they have less time left for alternative pursuits, but payoffs in terms of friendships established and exposure to the workings of Japanese groups are invaluable. Moreover, with those clubs involving the study of strict forms or choreography (*katachi*), students may witness an unfamiliar degree of reverence accorded to received patterns and of respect extended to individuals attaining higher skill levels. Such experiences of what is “otherness” to most JTW students enlarge their ideas of practice in this area, and so add another brick or two to the competency-building process.

Finally a few words should be said in reference to JTW’s monthly study trips, for these, too, offer by design lessons to augment skill sets and broaden understanding. Among the trips arranged by the program, participation in which is optional and usually cost-free, several stand out. Students uniformly praise, for example, the fall and spring visits made to Nishi-Arita, a rice-growing area two hours southwest of Fukuoka, where they first harvest and then later transplant a large paddy working in concert, much as Japanese have done for centuries. There follows a barbeque, joined by local farmers, consisting of locally produced foods, in celebration of the labor performed. The experience touches JTW students in profound ways, as they wade through the paddy soil and water, or swing a sickle to cut down the rice stalks, high up on the side of a mountain affording fresh air, strong sun, and a panoramic view of the countryside. Few students, even among those from places where rice figures importantly in the local diet, have had this kind of hands-on encounter, and all seem pleased to have been able to test themselves.

The day-long study trip to a nearby Zen Buddhist temple is another impressive experience of radical cultural alterity, unfamiliar to most JTW students. Most notable for them is the evident austerity of the monk’s existence, as reflected in the simple clothing worn and meals eaten. Students sample a lunch of rice and vegetables, chanting esoteric prayers of thanks and acknowledgement, following and preceding meditation periods roughly 45 minutes long. Senior monks instruct on how to perform meditation, and monitor carefully student compliance, striking symbolically on the back of the shoulder with a cane anyone who fidgets or drifts off to sleep when instead they are to be sitting perfectly still, legs crossed in lotus-style (or a close approximation), concentrating on emptying their minds. Students have opportunity to explore the temple and grounds, remarking routinely on the beauty of its architecture and gardens, as well as on the pervasive atmosphere of calm and reverence truly a world apart.

Offering yet another contrastive experience is the study trip to a new and sprawling Toyota automobile assembly plant in Kita-Kyushu, one hour’s drive north of Fukuoka. There students hear about and observe for themselves Toyota’s famous production efficiency, viewing from suspended walkways each of the nine assembly lines turning out cars at a prodigious rate. Line workers are uniformed, disciplined, function in teams, and work long, intense hours, leaving students either impressed or disturbed by the massive operation, which presents a very different

face of Japan, and further challenges their sense of the possible, even if expectably so.

Most unsettling, and therefore perhaps most instructive, of the study trips is the end-of-program visit to the Atomic Bomb Museum in Nagasaki, three hours to the south. Grim photographs and wrenching testimonials of horrific suffering and loss, on display with assorted artifact fragments melted or twisted into bizarre shapes, including clocks with hands uniformly shock-frozen in place at the moment of the bomb's impact, remind students that competency-building is neglected only at great risk of perpetuating great mistakes, with unwanted consequences many will not escape.

Continuing Mission

JTW is by design a learning-centered environment with the scope and variety to accommodate a range of individual differences, particularly differences in learning strategy. It has not altered significantly its original mandate to introduce Japan in its national, regional, and global contexts to growing numbers of students from abroad. Only the program size and the number of Kyushu University's institutional partnerships, both of which have grown substantially, have changed. The rationale that applied in 1994 continues to apply today, if not more so—students need to know about the world, and about how to function effectively in it, which usefully can be approached by learning within and about Japan.

Japan at the central government level has endorsed the idea explicitly, acknowledging the benefits of cross-cultural experience. From the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology (2004), which sets national policy in this area:

...student exchange is a way of making an intellectual international contribution through education and training of human resources and related projects, playing an important role in the realization of a society open to the international community... the formation of the human network connecting foreign countries and Japan and the resultant improvement in mutual understanding and friendship are expected to contribute to the security and peace of the world, currently undergoing a process of rapid globalization.

Years ago, American anthropologist Edward T. Hall (1976) labeled Japan a “high-context” culture, by which he meant that social mindfulness, expressed as higher degrees of deference, courtesy, self-restraint, indirectness, and other correlated modes of communicative conduct, played a strong regulatory role in how Japanese behaved—in how they organized their use of time and space, identified and interacted with each other, learned from each other. The JTW experience for participants provides much evidence in support of this cultural portrayal, if the account is somewhat exaggerated or dated in places, and the program thus serves fittingly as an

academic and experiential exemplar for the developing of those global-ready students mentioned at the outset.

References

- Befu, Harumi. 2001. *Hegemony of Homogeneity*. Melbourne: Trans Pacific Press.
- Bransford, John D. et al, eds. 1999. "Executive Summary," *How People Learn: Brain, Mind, Experience, and School*. National Research Council (US) Committee on Developments in the Science of Learning. Washington, DC: National Academy Press. [<http://newton.nap.edu/html/howpeople1/es.html>]
- Bremer, Darlene. 2006. "Wanted: Global Workers," in *International Educator*, May-June.
- Brightman, Robert. 1995. "Forget Culture: Replacement, Transcendence, Relexification," *Cultural Anthropology*, Vol. 10, No. 4.
- Carey, Susan. 2004. "Bootstrapping and the Origin of Concepts," *Deadalus*, Winter.
- Cobbing, Andrew. 2001. "The JTW Program Eight Years of Curriculum Development," *Reseach Bulletin, International Student Center, Kyushu University*, No. 12.
- Gacel-Avila, Jocelyne. 2005. "The Internationalisation of Higher Education: A Paradigm for Global Citizenry," *Journal of Studies in International Education*, Vol. 9, No. 2, Summer.
- Goodman, Roger. 2005. "Making Majority Culture," in Jennifer Robertson, ed. *A Companion to the Anthropology of Japan*. Oxford: Blackwell Publishing.
- Hall, Edward T. 1976. *Beyond Culture*. New York: Doubleday.
- Lambert, R. D. ed. 1994. *Educational Exchange and Global Competence*. New York: Council on International Educational Exchange.
- Lie, John. 2001. *Multi-Ethnic Japan*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Maynard, Senko K. 1997. *Japanese Communication: Language and Thought in Context*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Olson, Christa Lee and Kent R. Kroeger. 2001. "Global Competency and Intercultural Sensitivity," *Journal of Studies in International Education*, Vol. 5, No. 2, Summer.
- Said, Edward W. 1979. *Orientalism*. Vintage Books.
- Searle, John R. 1995. *The Construction of Social Reality*. New York: The Free Press.
- Sowa, Patience A. 2002. "How Valuable Are Student Exchange Programs?" *New Directions for Higher Education*, No. 117, Spring.
- MEXT (Student Services Division, Higher Education Bureau, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, Japan). 2004. *Outline of the Student Exchange System in Japan*. Tokyo: Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.

Notes

- 1 "In this new global environment, one of the basic and fundamental functions of a university should then be the fostering of a global consciousness among students, to make them understand the relation of interdependence between peoples and societies, to develop in students an understanding of their own and other cultures and respect for pluralism. All these aspects are the foundations of solidarity and peaceful coexistence among nations and of true global citizenship" (Gacel-Avila 2005: 123).
- 2 Reference is to the World Health Organization's widely cited "Global Competency Model." See [<http://www.who.int/employment/competencies/en/>] for a more comprehensive listing and elaboration of competencies. Useful discussion of global competencies is found additionally at the NAFSA Association of International Educators website [http://www.nafsa.org/partners.sec/global_partnership_program/global_workforce_development]. See also Gacel-Avila (2005), Lambert (1994) and Olson and Kroeger (2001).

- 3 Creation of the program resulted from deliberations in 1993, at the 16th meeting of the United States-Japan Conference on Cultural and Educational Interchange in Washington DC, on the problem of historical exchange asymmetries (Cobbing 2001). Japanese students had been enrolling in American schools, whether in degree programs or through exchange arrangements, in disproportionately greater numbers than US students were attending Japanese institutions. The situation persists regrettably to this day (MEXT 2004).
- 4 “Short-term” in the Japanese international education context and lexicon refers to study periods of one or two semesters, roughly four months each. Contrastively in North America the term denotes periods of usually less than one semester in duration.
- 5 JTW students, mostly third- or fourth-year undergraduates, come primarily from Kyushu University partner institutions in Asia (China, Indonesia, Hong Kong, Singapore, South Korea, Taiwan, Thailand), Europe (Belgium, England, France, Germany, Sweden), and North America (Canada and the US), with each broad region contributing roughly one third of the participant total. See <http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/jtw/> for a current listing of universities.
- 6 These typically require advanced Japanese proficiency, for which students must be assessed and their participation approved, but occasionally courses are offered that use English as the instructional medium.
- 7 Students may opt to use Japanese language materials with permission of class instructors, who are encouraged to supplement their course content by introducing relevant Japanese terms and jargon where appropriate.
- 8 Kyushu University operates an alternative program the Japanese Language and Culture Course intended for students possessing more advanced Japanese proficiency.
- 9 The first semester winter-month academic calendar allows JTW students to enroll in a third five-week round of classes as well.
- 10 *Newsweek* magazine recently (July 2006) named Fukuoka one the world’s “ten most dynamic cities,” well-exemplified by the city’s bid submission earlier in the year to host the 2016 Summer Olympic Games.
- 11 Use of this fairly commonplace rendering is an affirmation of culture’s discursive serviceability when suitably qualified (see discussion to follow), and takes account of recent and perennial criticisms, especially within anthropology, of various faulty conceptualizations. See Brightman (1995) for an excellent review of issues that remain relevant today.
- 12 Relevant here is the characterization of expertise in a recently published (Bransford et al, 1999) National Research Council report on “How People Learn”: “It is not simply general abilities, such as memory or intelligence, nor the use of general strategies that differentiate experts from novices. Instead experts have acquired extensive knowledge that affects what they notice and how they organize, represent, and interpret information in their environments. This, in turn, affects their abilities to remember, reason, and solve problems.”
- 13 See “What’s Up with Culture?” (http://www.pacific.edu/sis/culture/pub/CULTURE_ISSUES_2.htm) for a very useful online treatment of culture shock, and on which the course exercise is partly based.
- 14 “Learners are most successful if they are mindful of themselves as learners and thinkers. A learner’s self-awareness as a learner and the role of appraisal strategies keep learning on target or help keep the learner asking if s/he understands. Learners who can become independent learners who are capable of sustaining their own learning in essence this is how human beings become life-long learners” (Bransford et al, 1999).
- 15 Cf., “What’s Up with Culture?” fn. 11 above.)
- 16 A list of recent projects may be found at the JTW website: <http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/jtw/>

2005年度 九州大学留学生センター留学生指導部門報告

スカリー 悦子*

白土 悟**

高松 里**

(編集: 高松 里)

1. はじめに

留学生指導部門の中心的な活動は、「相談活動」である。異文化に暮らす留学生（あるいはその家族）にとって、日本社会は必ずしも住みやすい社会とは言えない。日本語は難しいし、文化的習慣を理解することも、良い人間関係を作ることたやすくはない。そのような彼らの言葉に耳を傾けながら、留学生が抱える問題をどうすれば解決できるのか、一緒に考えていくことが我々の仕事である。

また、教職員・日本人学生も留学生と接する中でカルチャーショックを経験する。留学生から相談を受けてどう対応して良いかわからない場面も出てくる。そこで、指導部門は、教職員や日本人学生に対してもコンサルテーションという形で相談を行っている。

ところで、九州大学伊都キャンパス（新キャンパス）が2005年10月より一部開校した。これに伴い、指導部門も伊都キャンパスにて巡回相談を開始した。相談場所は箱崎キャンパス、六本松キャンパス、伊都キャンパスの3カ所となった。さらに、九州大学には2つの国際交流会館（宿舎）があるが、指導部門の教員は「留学生主事」として相談室を開き、居住する留学生が持つ諸問題に対応している。

九州大学には1,103名（2005年5月1日現在）の留学生が在籍している。それに対して指導部門の教員はわずかに3名である。留学生一人一人に対応することには限界がある。また、問題が発生した後に相談を受けるよりも、問題自体が起こることを防ぐ予防的アプローチが効果的な場合も多い。それが「予防的・教育的活動」である。留学生や留学生を担当するチューターに対してオリエンテーションを行い、学生団体やボランティア団体、地域の交流団体と連携を取りながら、留学生の支援ネットワークを拡げている。

さらに、「授業」として、学部留学生および留学生センターに所属する留学生に対して「日本事情」等を開講している。また大学院においても、国際交流領域での活動を希望する学生（日本人と留学生）に対して専門的な教育を行っている。

また、留学政策や留学生の適応問題などに関する研究を行うと共に、国際教育に関する社会団体等で委員や講師を引き受けている。

*九州大学留学生センター教授

**九州大学留学生センター助教授

2005年3月で留学生指導部門教授の森山日出夫が定年退職となった。5月からはスカリー悦子が教授として就任した。

2. 相談活動

(1) 相談室および担当者

九州大学は、箱崎キャンパス、病院(馬出)キャンパス、筑紫キャンパス、六本松キャンパス、大橋キャンパス(元芸術工科大学)、別府キャンパスに分散している。2005年10月からはさらに伊都キャンパスが開校した。

留学生センターは、センターのある箱崎キャンパス、全学教育が行われている六本松キャンパスで相談室を開いてきた。2005年10月から伊都キャンパスにおいても相談室(巡回相談、週2回)を開設した。将来的には伊都キャンパスに大部分が移転することになっており、伊都キャンパスの留学生数も徐々に増えていく。

また、留学生宿舎として、従来から九州大学国際交流会館(東区香椎浜、270室)があったが、2003年に九州芸術工科大学と九州大学は統合し、博多区井尻の国際交流会館(90室)の留学生も、留学生センターの支援対象に加わった。ただし、相談室は香椎浜の会館のみに設置されている。

以上のように、2005年度は、3人の教員がそれぞれ分担して、3つのキャンパスと1つの会館(宿舎)の相談室を担当した。

(2) 相談状況

相談室における相談件数は表1の通りである。ここでいう相談件数には、数分で済むような簡単な情報提供は含まれていない。

相談件数は525件(延べ数)となり、昨年度(2004年度)の409件よりも多い。これは2004年度までは森山(主に会館で相談を受けていた)の相談件数は含まれていなかったが、今回からスカリーの相談件数もカウントしているためである。

「留学生からの相談」で最も件数が多いのは「宿舎問題」で63件あるが、これは会館での相談が大部分である。「精神的不安定」も多いが、人間関係のストレスから来る相談が多かった。その他、様々な相談が留学生から寄せられた。「宗教的問題」の多くはイスラム教関係であり、お祈りの場所の確保などの相談が多かった。

「その他の外国人からの相談」とは、九州大学の留学生ではないが、これから九州大学を受験する外国人や、訪問研究員などの数である。

「日本人からの相談」の大部分は、留学生と関係のある相談である。例えば、九州大学国際親善会の学生が新たに留学生支援活動を始めたいというものが多かった。また、自分の研究室の留学生が精神的な問題を持っているのだがどうしたら良いかというような相談が指導教員から寄せられることもあった(これはコンサルテーションと呼ばれる)。また、外部の人(国際交流関係団体、警察、マスコミ等)からの情報提供依頼やイベントの講師依頼なども多かった。

表1 2005年度相談件数

留学生からの相談			その他の外国人からの相談			
		件数			件数	
修学	入学・進学関係	10		入進学	1	
	教育制度・内容	29		その他	6	
	進路相談	23		小計	7	
生活	法律的問題	13		日本人からの相談		
	経済的問題	10		学生	留学生とのトラブル	0
	宗教的問題	21			国際親善会関係	19
	宿舍問題	63			その他	15
	生活問題	33		教職員	入進学	4
	事故病気等	11			奨学金	0
	渡日・滞日許可	0			日本語関係	1
	人間関係	22		その他	24	
	子弟の教育問題	2		外部	情報・コメント	33
	帰国準備	11			イベント・講師依頼	28
	精神的不安定	46			入進学	0
	国保・一般保険	0		苦情	0	
	その他	各留学生会	14		その他	38
その他分類不可		48		小計	162	
	小計	356		総計	525	

3. 予防的・教育的活動

(1) オリエンテーション

例年通り、4月と10月に、「新入留学生オリエンテーション」および「チューターオリエンテーション」(留学生課主催)が箱崎キャンパスで行われ、指導部門教員は適応問題等についての講演を行った。

また2005年度から新たに、六本松キャンパスでも「新入留学生オリエンテーション」(学部学生向け)を開始した。これは、従来行われてきたオリエンテーションは箱崎キャンパスで行われるため、六本松キャンパスの新入生はほとんど参加できなかった。それを改善するため、六本松キャンパス学生係と留学生センター(高松)が話し合い、新たに企画したものである。この新入生オリエンテーションは、チューターオリエンテーションを兼ねており、留学生とそのチューターも一緒に参加したことが特徴である。

(2) チューター制度の改善

学部1年生に入ってくる新入留学生の場合、チューターが最も必要なのは、入学直後の数週間である。しかし、この時期にチューターを捜すことは非常に難しい。偶然に隣に座ったクラスメートなどに「チューターを頼みますか?」と聞くことになるのだが、そもそも「チューターとは何か?」ということを知っている日本人学生はほとんど知らない。クラスの様子が変わって、ようやく頼むとしても5月

になってしまうということが非常に多かった。

そこで、六本松キャンパス学生係、留学生センター(高松)、学生サークルである九州大学国際親善会の三者で何度も打ち合わせを行い、2005年4月からチューター斡旋を行うことにした。具体的には、国際親善会の学生が留学生控え室で待機し、入学手続き(三月)に来る新入生に対して、チューター制度について説明した。また、留学生の履修説明会などの機会に、チューターの斡旋を行うことを話し、希望があるかどうか確認した。日本人学生に対しては、学内に掲示を貼り出すと共に、「日本事情」「世界の中の日本」の授業終了後に、チューター制度について説明しチューター希望を募った。

その結果、斡旋を希望する留学生は20名、チューターに応募した日本人は68名となり、選考を行った。その後、斡旋を希望する留学生がさらに増えたため、結果的には20数名の斡旋を行うことができた。

さらに上述したように、留学生とチューター両方を対象とするオリエンテーションを新たに企画し実施した。

(3) 初期適応支援(4月と10月)

来日したばかりの留学生の多くは、国際交流会館に入居する。

24時間以上かけて来日する留学生もあり、疲れ切って会館に到着する。巨大な荷物を数個持つてくることがよくあり、荷物を部屋に運ぶだけでも重労働である。また食事をし、寝具(会館には備え付けの布団や枕はない)を確保しなくてはならない。さらに母国に連絡をしたいが国際電話やインターネットはどこで使えるのか、指導教員と会いたいのが大学までどうやって行ったらいいのか、など着いたばかりでまだ言葉もよくわからない留学生にとって、やらなければならないことは多い。

新入留学生への支援活動は、1993年から開始したもののだが、現在では九州大学国際親善会の学生がシフトを組んで、最初の1週間、毎日朝から夕方まで受付カウンターを作って対応している。

その他、「キャンパスツアー」や「天神(市内中心部)ツアー」なども実施し、留学生が適応しやすいように支援している。初期適応支援は主に高松が担当した。

前期

- ・4月1日(金)～8日(金)：新入館生への支援(香椎浜会館)。九州大学国際親善会の学生に協力してもらい、入館書類の書き方・部屋の使い方などを説明。
- ・4月7日(木)：日本語研修コースへの会館オリエンテーション(香椎浜)
- ・4月8日(金)：日本語研修コース学生を東区役所まで引率(香椎浜 東区)
履修説明会(六本松、日本語教育部門および白土・高松)
日本語研修生キャンパスツアー(箱崎)
井尻会館サポーターとの打ち合わせ、その後、井尻会館新入生歓迎会
- ・4月9日(土)：香椎浜会館オリエンテーション。その後、香椎浜会館新入生歓迎会
- ・4月10日(日)：香椎浜会館「天神ツアー」(そら主催)
- ・4月14日(木)：初期適応支援活動の反省会(分室、九親会・そら約30名)

後期

- ・ 9月29日(木)30日(金)：JTW 学生およびそのチューターへの支援
- ・ 10月1日(土)：支援者対象のオリエンテーション
- ・ 10月1日(土)～5日(水)：新入生への支援(書類の書き方、会館の使い方、その他の質問に答える)
- ・ 10月6日(木)：キャンパスツアー (日本語研修生、日本語日本文化研修生、日韓共同理工系学部留学生予備教育生)
- ・ 10月11日(火)：チューターオリエンテーションおよび新入生オリエンテーション(高松・スカリー)
- ・ 10月13日(木)：初期適応支援活動の反省会
- ・ 10月13日(木)：井尻会館オリエンテーション。その後、井尻会館新入生歓迎会 (スカリー)
- ・ 10月14日(金)：香椎浜会館オリエンテーション。その後、香椎浜会館新入生歓迎会 (スカリー)

(4) 学生団体に対する顧問としての指導・助言

留学生指導部門の教員は以下のような留学生交流関係の学生サークルの顧問となっている。様々な活動や要望に対して助言を行った。

九州大学留学生会 (KUFSA=Kyushu University Foreign Student Association)

九大に所属する全留学生を代表する会である。大橋キャンパス (旧九州芸術工科大学) の留学生会とも、2004年から話し合いが続けられ、九州大学留学生会の支部となった。

活動としては、4月に「スポンサーミーティング」(地域交流団体との年間行事打ち合わせ)を行い、バスハイク、スポーツ大会、年末の国際親善パーティなどを実施した。

九州大学ムスリム学生会(KUMSA=Kyusyu University Muslim Student Association)

ムスリム学生会は、年2回程度、「イスラムセミナー」を学内で実施し、日本人教職員や学生に対して、イスラムについての理解を促進しようとしている。指導部門教員は、セミナーで挨拶を行ったり、会場の確保などについて支援した。

また、10月に起きた「パキスタン地震」に対して、九州大学国際親善会の学生と協力して、市中部で募金活動を行った。指導部門教員を含めて何度も会合を行った。

九州大学国際親善会 (KUIFA=Kyushu University International Friendship Association)

毎年の活動としては、2月の「受験生案内」、4月と10月の「新入留学生支援」、5月に行われるシンガポール大学との交換プログラムの「Inter Link FUKUOKA」、11月の「九大祭への出店」、毎週木曜日の「コーヒーアワー」などである。

また、ピア・サポートして「お悩み解決隊」を開始し、毎日昼休み時間に、留学生センター内でカウンターを作り、留学生からの質問を受けるようになった。

さらに、学部 (六本松地区) において、新入留学生に日本人チューターを斡旋するシステムを、留学生センター教員と学生サービス係職員と連携して実施した。(九州大学国際親善会の活動の詳細は、高松2006を参照)。

(5) ボランティア団体への指導・助言

「福岡フレンドリークラブ」の活動への助言と講義

九州大学には家族同伴の留学生が約300人いる。300人近くの夫人たちやその子どもたちの生活支援が大きな課題になっている。福岡フレンドリークラブは地域の日本夫人で構成される団体であり、九州大学教員の夫人も参加している。留学生夫人との交流と支援を目的に、毎週水曜日に留学生センター分室にて活動している。

活動は、留学生夫人向けの日本語授業（12：30～14：20）および交流会（14：30～16：30）である。これらの活動を通じて親しくなった留学生夫人たちの生活上の相談にも応じている。毎年1回、ボランティア育成講座として指導部門教員（白土）が講義を行っている。

「九州大学留学生サポートネットワーク<そら>」の活動への指導助言

そらは、社会人を中心としているが、他大学の学生も参加しているボランティア団体である。主な活動としては、従来から日本語会話パートナーを個別で行っていたが、2005年度は井尻国際交流会館において日本語クラスを運営するようになった。その他、引っ越しや運搬の手伝い、イベントの企画などを行っている。毎年8月に新人募集を行い、9月に説明会と研修会を行い、10月からの新入生支援に向けて準備を行った。

年1回の総会の他、月1回の定例会（木曜日午後7時～8時半）、作業ミーティング（その他の木曜日午後7時～8時半）を、留学生センター分室にて行っている。これらのミーティングには毎回高松が出席している。

(6) 地域との交流活動の推進

- ・ 4月10日(日)：梅の植樹祭（留学生会、天神スタンプ、太宰府天満宮、白土）
- ・ 6月7日(火)：天神スタンプ社とのハンコ贈呈ボランティアについて打ち合わせ（白土、KUFSA）
- ・ 6月13日(月)：フレンドシップ・フォース（ホームステイ団体）との会合（白土）
- ・ 6月20日(月)：福岡県国際交流センターとホームステイ・プログラムについて打ち合わせ（白土）
- ・ 10月30日(日)：国際親善料理交歓会（白土、中村学園大学、留学生150人）

4. 国際交流会館における主事活動 (Kaikan Review)

Numerous improvements in the management and environment of Kaikan for international students have been made over the past year. Based on my personal experience as an international student outside Japan, there is a noticeable difference in the way that international students from the rest of the world are accepted in this environment. That, too, has recently changed for the better.

New Student Orientation

Most Kaikan student activities have been managed by a group of program supporters

selected by the Kaikan management committee. The eight supporters (two Japanese, two Europeans, two South Americans, one Chinese and one Korean) meet twice per month to discuss Kaikan orientation activities. In the past, many non-Asian students were not aware of the support services available to them. In 2006 we had almost forty applicants to help with orientation issues. The students discuss such issues as garbage collection, deciding where to go and finding a new place to live after their Kaikan experience, using Kaikan facilities for different purposes, and organizing weekend parties. Occasionally they volunteer to inspect facilities on weekends to make sure they are clean and to make sure the students are doing well. Some of the eight students have access to Kaikan-related keys so that they can give students access to Kaikan facilities for cultural gatherings and other purposes.

One of the most noticeable improvements concerns the Kaikan Web page, which received some financial support from the International Affairs office. Six months of focused effort has resulted in a frequently visited home page that is used to disseminate information from Kyushu University, and other countries.

Improvement Kaikan

The physical environment of Kaikan has improved a great deal since my first visit, during which I saw many abandoned cars, old furniture, refrigerators, computers, books, linens, and other household items. Many students simply left these things behind when they left Japan. As a result, there was very little space for incoming students. It was obvious that the Kaikan counseling rooms were not used at all. We therefore focused on a safety promotion campaign, putting up stop signs for drivers to prevent traffic accidents, creating parking areas for bicycles and cars, and establishing a safe environment for young children.

Attitudes toward International Students

As part of our responsibility, we try to encourage international students to become independent so that when they leave Kaikan they feel comfortable with both Japanese society and the Japanese language. We do our best to give one-to-one counseling to students to make them aware of issues that they may have difficulty with based on what we observe of them during their Kaikan experience.

Compared with other countries, there are considerable differences in how international students are taken care of here. In Fukuoka I was impressed by the large number of people who tried to help students. Culturally speaking, Japanese people tend to be generous, especially toward people who have financial and social problems. Furthermore, many Japanese people appreciate having opportunities to meet and interact with people from other countries. As a result, international students leave with the positive impression that Japanese people are kind.

In summary, the International Affairs staff and volunteer supporters are to be thanked

for their effort to improve Kaikan facilities and to enrich the Kaikan experience for its participants.

(Etsuko Scully)

5. 授業

本年度は、学部（全学教育）8コマ、大学院3コマ、留学生センター1コマを担当した。その他、1回のみ担当した授業などもある。

表2 担当授業（2005年度）

	前 期	後 期
学 部	「日本事情（高年次）」（火1限、白土） 「日本事情」（水4限、高松） 「世界の中の日本」（火3限、高松他） 「留学生交流論」（金1限、白土） 「大学とは何か」（水4限、1回、白土）	「日本事情」（水4限、高松） 「世界の中の日本」（月4限、白土他） 「日本語」（月1限・2限、スカリー）
大学院	「留学生教育政策論」（金6限、白土）	「異文化適応論」（集中、高松） 「留学生アドバイジング論」（集中、白土）
留学生センター	日本語研修コース「日本事情」（1回、高松）	日本語研修コース「日本事情」（1回、高松） 日韓共同理工系学部留学生予備教育 「日本事情」（火3限、スカリー・高松）

(1) 学部課程における授業

[前期]

「日本事情」を2コマ、「留学生交流論」1コマ開講し、「大学とは何か」を1回行った。

「世界の中の日本」は、2004年度から始まった留学生センター専任教員と兼任教員の合同で行うリレー式授業である。

第1回～3回：高松里「留学生とは何か？異文化とは何か？」

第4回～6回：土居克実「生物多様性 - 日本と世界の違いとその理由」

第7回～8回：梶村好宏「日本の核融合への挑戦」

第9回～10回：寺本憲功「食習慣と健康維持」

第11回～13回：古屋忠彦「日本人が食べてきたもの」

[後期]

「日本事情」を1コマ、「日本語」を2コマ開講した。

「世界の中の日本」の授業内容は以下の通りである。

第1回：白土悟「講義の目的」

- 第2回～3回：白土悟「日本文化の課題」
- 第4回～5回：八谷まち子「グローバル化の課題」
- 第6回～7回：米光靖「伝統的地場産業の世界との関わり」
- 第8回～9回：松隈浩之「デザイン論」
- 第10回：中西恒夫「コンピューターと数学の知識」
- 第11回：中西恒夫「日本語と情報・通信：日本語情報処理」
- 第12回：中西恒夫「日本語と情報・通信：多国語情報処理」
- 第13回：白土悟「課題演習」

(2) 大学院における授業

前期に、「留学生教育政策論（白土）」、後期に「異文化適応論（高松）」「留学生アドバイジング論（白土）」を開講した。

(3) 留学生センターにおける授業

日本語研修コース（半年間集中日本語）の学生に対して、前期と後期に1回づつ、「日本事情」を行った（高松）。この授業は、日本人学生をゲストとして招き、実際に話をしてもらおうというものである。

日韓共同理工系学部留学生予備教育の学生（7人）に対して、後期に週1回の「日本事情」を開講した。日本の文化・習慣およびカルチャーショックについての講義、日本人学生を交えて入学後の生活について話し合う時間などを作った（高松、スカリー）。

6. 研究活動

(1) 著書論文

- 白土悟「留学生に対する経済支援について考える」『留学交流』Vol.17, no.7, 2005年, 8-11頁
- 白土悟（共著）文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）、平成15・16年度調査報告『アジア太平洋諸国の留学生受け入れ政策と中国の動向』2005年7月、全345頁
- 白土悟「留学生と日本人交流の意義と実践」（中文）、中国高等学校外国留学生教育管理学会編『中国・日本外国留学生教育学術研究会論文集』北京語言大学出版社、2005年7月、221-230頁
- 白土悟（共著）「留学生と取り組む国際理解教育の可能性」（独）日本学生支援機構編『国際シンポジウム報告書：「グローバル」をめざした留学生と地域との交流』2006年1月、90-105頁
- 白土悟・高松里「2004年度九州大学留学生センター留学生指導部門報告」、九州大学留学生センター紀要、No.14、2006年2月
- 高松里「異国での日々 - 留学生相談の日常」、臨床心理学 vol.5, no.5、2005年、726-728頁
- 高松里「多文化間エンカウンター・グループ」、伊藤義美編『パーソンセンタード・エンカウンターグループ』ナカニシヤ出版、2005年10月、148-162頁

高松里他「日本における多文化エンカウンター・グループの試み」、松本剛・畠瀬直子・野島一彦編
著『エンカウンター・グループと国際交流』ナカニシヤ出版、2005年10月、97-127頁

高松里『日本に住む外国人留学生 Q&A』解放出版 2005年12月

高松里『留学生と友達になりたい日本人学生のための留学生超入門2006年版』九州大学留学生センター、
2006年3月

(2) 科研費助成研究

平成15・16・17年度文部科学省科研「日米豪における留学交流戦略の実態分析と中国の動向」（白土、研究分担者）

平成16・17・18年度文部科学省科研「異文化間教育の横断的研究」（白土、研究分担者）

(3) 学会活動

- ・ 5月27日(金)～29日(日)：異文化間教育学会 理事会&研究発表（明治学院大学、白土）
- ・ 6月1日(水)：日本人間性心理学会大会準備委員会（九大、高松）
- ・ 6月25日(土)：日本人間性心理学会大会準備委員会（九大、高松）
- ・ 9月17日(土)：日本人間性心理学会準備委員会（九大、高松）
- ・ 9月23日～25日：日本人間性心理学会大会（九大、高松）
- ・ 3月12日～20日：日米国比較・国際教育学会（白土）

(4) 研究会活動

- ・ 毎月1回（金曜日19：00～21：00）：多文化間カウンセリング研究会（九大、主催：高松）
- ・ 9月10日(土)11日(日)：「サポートグループセミナー」（福岡市、主催：高松）

7. 社会連携

(1) 社会団体関係

[2005年]

- ・ 4月27日(水)：福岡アジア留学生里親奨学金運営委員会（白土）
- ・ 5月12日(木)：四大都市圏アジア交流推進事業国際教育研究会（福岡県庁、白土）
- ・ 5月16日(月)：国際教育クリエーションズとのボランティア研修会打ち合わせ（白土）
- ・ 5月18日(水)：J A F S A 国際教育交流協議会理事会（白土）
- ・ 5月20日(金)：国際教育クリエーションズとのボランティア研修会打ち合わせ（白土）
- ・ 5月26日(木)：九州留学生問題フォーラム理事会（商工会議所ビル、白土）
- ・ 5月29日(日)：福岡帰国留学生交流会総会（福岡学生交流会館、白土）
- ・ 6月1日(水)：国際教育クリエーションズとの打ち合わせ（白土）
- ・ 6月2日(木)：東警察署協議会（白土）

- ・ 6月15日(水)：九州留学生問題フォーラム事務局会議 (人環、白土)
- ・ 6月25・26日(土、日)：科研会議 (一橋大学、白土)
- ・ 7月6日(水)：第4大都市圏アジア交流推進事業・国際教育研究会 (県庁、白土)
- ・ 7月19日(火)：九大会懇談会 (リーセントホテル、白土)
- ・ 7月21日(木)：科研会議「日米豪の留学交流戦略の実態分析と中国の動向」(日本大学、白土)
- ・ 7月28日(木)：九州留学生問題フォーラム・広報委員会 (白土、高松)
- ・ 7月28日(木)：東警察署協議会 (東警察署、白土)
- ・ 8月6、7日(土、日)：科研会議「異文化間教育の横断的研究」(京都、白土)
- ・ 9月25日(日)：留学生のための合同就職説明会 (白土)
- ・ 9月29日(木)：東警察署協議会 (白土)
- ・ 10月8・9日(土・日)：科研会議 (一橋大学、白土)
- ・ 10月14日(金)：国際教育クリエーションズ会合 (白土)
- ・ 11月5日(土)：九州留学生問題フォーラム理事会・講演会 (白土、天神ビル)
- ・ 11月11日(金)：国際教育クリエーションズとの打ち合わせ (白土、九大)
- ・ 11月21日(月)：福岡帰国留学生交流会会議 (白土、九大)
- ・ 11月26日・27日(土・日)：科研会議 (九大、白土)
- ・ 12月9日(金)：東警察署協議会 (委員、白土)
- ・ 12月12日(月)：科研会議 (九大、白土)
- ・ 12月14日(水)：国際教育クリエーションズと打ち合わせ (白土)

[2006年]

- ・ 1月7～9日(土～月)：人間関係研究会ミーティング (那覇、高松)
- ・ 2月4日(土)：福岡帰国留学生交流会総会 (白土)
- ・ 2月11～12日(土・日)：科研会議 (一橋大学・白土)
- ・ 2月16日(木)：東警察署協議会 (白土)
- ・ 2月21日(火)：西区「杉能舎」訪問：交流活動等について事情聴取 (白土)
- ・ 2月22日(水)：国際教育クリエーションズとの打ち合わせ (白土)
- ・ 3月23日(木)：九州留学生問題フォーラム (白土)

(2) 講演・研修会など

[2005年]

- ・ 4月2日(日)：福岡大学にて講演「異文化ストレスとそのつきあい方」(福岡、高松)
- ・ 4月16日(土)～17日(日)：佼成カウンセリング研究所にて講演 (東京、高松)
- ・ 5月23日(月)：講演「中国の社会と教育」(東警察署、白土)
- ・ 6月4日(土)5日(日)：佼成カウンセリング研究所にて講演 (東京、高松)
- ・ 7月22～24日(金～日)：JAFSA 国際教育交流協議会サマーセミナー (日本大学研修所、白土)
基調講演「アジア太平洋諸国の留学交流戦略」研修担当講師「留学生アドバイザー」

- ・ 7月30、31日(土日)：市民講座「留学生支援を考える」講師 (大濠セミナーハウス、白土、高松)
- ・ 8月3日(水)：佐賀大学看護学科にて講演(佐賀、高松)
- ・ 8月20・21日(土・日)：佼成カウンセリング研究所にて講演 (大阪、高松)
- ・ 8月27～30日(土～火)：上勝ワークショップ (徳島県、高松)
- ・ 8月28日(日)：立命館アジア太平洋大学職員研修講師 (別府、白土)
- ・ 11月3日(木、祝)：「留学生と福岡市民との相互理解を深めるシンポジウム (社団法人福岡青年会議所主催)」(シンポジストとして参加、高松、)
- ・ 11月19日(土)20日(日)：国際教育クリエーションズ主催「秋期市民セミナー」にて講演 (福岡市、白土・高松)
- ・ 12月4日：ロータリー米山奨学会にて講演 (福岡、高松)
- ・ 12月7日：ボランティア育成講座 講義「ボランティア人生 - 組織と活動を見直す」(九大、白土)
- ・ 12月23日～27日：「福岡人間関係研究会ワークショップ」スタッフ (大分、高松)

[2006年]

- ・ 2月4日(土)5日(日)：臨床心理士会全国研修会出席 (那覇、高松)
- ・ 3月1日(水)～3日(金)：「香川大学グループ・セミナー」講師 (香川、高松)
- ・ 3月24日(金)～28日(火)：「多文化間相互理解ワークショップ」スタッフ (奈良、高松)

(3) 学外からの来訪者

[2006年]

- ・ 2月15日(水)：九州経済産業局・九州アジアリンク担当者来訪 (白土)
- ・ 3月2日(木)：太宰府天満宮崇敬会「留学生観桜会」の件で来訪 (白土)

【引用文献】

高松里「国際交流学生サークル活動への教育的サポート - 「九州大学国際親善会」の活動と会への支援」九州大学留学生センター紀要第15号、67-74、2006年

Education and Supporting Network for International Students in the School of Engineering of Kyushu University

Kazuhide OHTA*

Abstract

Recent situation of the international students in Kyushu University is introduced and the problems which they encounter in the class and daily life are discussed. Though several counseling offices for students are located in each campus of the university, the advising and supporting network which consists of the professors and administrative staff has been organized for the students of "Japan-Korea Joint Science and Engineering Students Exchange Program" to avoid the dropout of the students. Special subjects for the international students in the engineering related school are presented. These are "Japanese Industries", "Mechanical Analysis" and "Computer and Information Technology". In the class of "Japanese industries", they are given lectures on the history and strategies of the Japanese industries associated with the governmental support. And moreover new strategy of the Japanese manufacturing companies to sustain and grow up in the 21st century is offered. In the lecture of "Mechanical Analysis", several actual topics experienced in the manufacturing industries such as the noise and vibration harshness induced by the internal combustion engines and the flow induced noise and vibration problem in the heat exchangers subject to the external flows are discussed.

Key words: International Students, Engineering Course, Japanese industries

1. International Students in Kyushu University

In Kyushu University, over eleven hundred international students are registered at the academic year of 2005. Most of the international students come from South-East Asia; China 44%, South Korea 18%, Indonesia 4%, and Vietnam 4%. Kyushu University has four major engineering related graduate school; Graduate School of Engineering, Design, Information Science and Electrical Engineering and Interdisciplinary Graduate School of Engineering Sciences. The number of the international students in the engineering related school is shown in Table 1.

Though the number of the international students in the engineering related school is approximately three hundred and fifty, most of them are in the graduate course and the number of the undergraduate students is only forty five which contains twenty two students of "Japan-Korea Joint Science and Engineering Students Exchange Program" and seven Malaysian students of Look East Policy. It should be noted that international students occupies about 30% of the total number of the students in the doctoral course of the engineering related school of Kyushu University.

*Professor of Kyushu University, Department of Mechanical Engineering Science, 744 Motooka, Nishi-ku, Fukuoka city, Japan E-mail: kazuhide-ohta@mech.kyushu-u.ac.jp

2. Problems of the international students in the engineering related schools

2.1 Japanese language and culture

The international students generally join the Japanese language course in Kyushu University for about six months before they enter the school of engineering. But yet they have some difficulties to understand the lecture spoken in Japanese after entering the school. They need about one more year to solve their language and cultural problems.

After they enter the undergraduate or graduate school, Japanese tutors are assigned by the administration office of the university to support the international students. The activities of the Japanese tutor are mainly consultation with the international students about the study and their daily life.

2.2 Supporting and counseling system for the international students

International student center of the Kyushu University has the counseling office for the international student which is operated by three professors. Each department of the university has the professor in charge of international students of undergraduate and graduate school.

In the school of engineering, the advising and supporting network, shown in Fig.1, which consists of the professors and administrative staff, has been organized for the students of "Japan-Korea Joint Science and Engineering Students Exchange Program". The professor in charge of the international student in the school of engineering holds the regular meeting with the Korean students and gives them the advice on their study and daily life in Japan. Administrative staff also checks how many credits the students took and the situation of their attending the class to avoid the dropout of the student. This advising and supporting network is planned to expand in whole international students of Kyushu University.

3. Special subjects for the international students in the school of the engineering

There exists the difference of the level and contents of the subjects between the Japanese and foreign universities. As many international students in the first grade of the graduate school have language and scholastic problems, introductory lectures are desirable for them to overcome their obstacles. In Kyushu University, several special subjects shown in table 2 are arranged for international students in the undergraduate and graduate school of engineering.

One of the main purposes of the international students coming to Japan is to learn the system and structure of Japanese economy and companies. They also want to study the major factors and strategies that grew up the Japanese economy and industries to the top level of the world after the World War . In the class of "Japanese Industries", they are given lectures on

the history and strategies of the Japanese industries associated with the governmental support. And moreover new strategy of the Japanese manufacturing companies to sustain and grow up in the 21st century is discussed. In the class of “Mechanical Analysis”, they have lectures on the several actual topics experienced in the manufacturing industries such as the noise and vibration harshness induced by the internal combustion engines and the flow induced noise and vibration in the heat exchangers subject to the external flows. They have also the discussion in their class to solve these problems by use of their own knowledge learned in the university. Contents and level of the lecture are changed depending on student’s knowledge. Though most of the international students are from the South-East Asia and they require the lecture spoken in Japanese, English comments and material are added for the students from English-speaking countries. The lectures on “Computer and Information Technology” are offered for the international students because the knowledge of the computer software/hardware and programming skills are essential for them to carry out their research.

4. Conclusion

The number of the international students coming to Japan will increase along with the development of the Asian countries. Their aim of study abroad is to have an excellent education and to carry out their research guided by the talented professors and finally to get the degree. And the goal of the university to accept the international students is to promote the internationalization of the university such as the construction of the global human network for the education and research.

The critical issues regarding with the international students in Japan are to increase the number of the excellent students and to expand the job occasion of the Japanese companies for the international students who graduated the Japanese universities. Enrich the system of the research assistant in Japanese universities is effective to increase the number of superior international student because governmental scholarship is supporting only 10% of the international student in Japan and most of the international students have to do a part-time job to get the money for tuition fee and living expense.

Recently Japanese manufacturing companies pursue the optimal worldwide manufacturing system in which the factories of the different countries are connected by the information technology and global supply chain. These companies require the excellent human resource with the cosmopolitan outlook to expand their business in the global market. International students who graduated the Japanese universities are suitable to join these companies and to work in their home country.

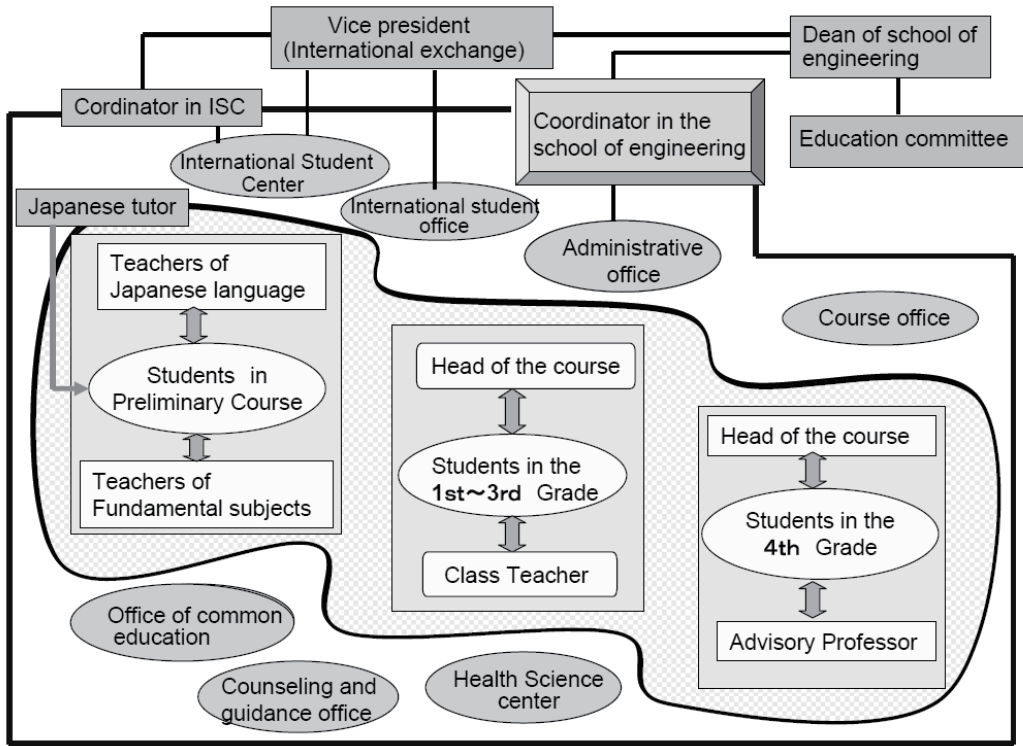


Fig.1 Advising and supporting network for the students of Japan-Korea Joint Science and Engineering Students Exchange Program”

Table 1 International Students in Kyushu-University (Government scholarship)(2005)

	Engineering related School				Subtotal	University Total
	Engineering	Design	Information and Electronics	Engineering Sciences		
Undergraduate	35	10			45	161 (27)
Graduate (Master)	26	32	21	5	84	288 (59)
Graduate (Doctor)	72	33	31	35	171	428(178)
Research student	6	19	9	3	37	133 (18)
Special auditor	6	4			10	26 (0)
Japanese course						13 (13)
Japanese language and uclture course						15 (12)
Japan in Today's World program						39 (0)
Total	145	98	61	43	347	1103(307)

Table 2 Special subjects for international students in the school of engineering

	Subject	Grade of students	Contents
1	Introduction to Japanese Industries	Undergraduate	<ul style="list-style-type: none"> • History of Japanese industries from Meiji era to 2000 • Major factors of Japanese economic growth after World War Two --Japanese government policy; concentration on the growth of major industries --Japanese Economic system; Labor union in each company (House union), Lifetime employment, Promotion and payment based on seniority • New strategy of Japanese manufacturing companies in the 21st century - Value added manufacturing • Structure and management style of the Japanese industries and comparison with the US and European industries
2	Japanese Industries	Graduate	
3	Introduction to Mechanical Analysis	Undergraduate	<ul style="list-style-type: none"> • Understanding the dynamic phenomena of the actual mechanical system --Input --Transfer function --Output
4	Mechanical Analysis (1)	Graduate	<ul style="list-style-type: none"> • Examples of the engine noise and vibration • Frequency analysis • Introduction to FEM, Modal Analysis, BEM • Fundamentals of noise radiation
5	Mechanical Analysis (2)	Graduate	<ul style="list-style-type: none"> • Introduction to flow-induced noise and vibration in the tube array of the heat exchangers • Analysis and prevention of the fluid-elastic vibration of the tube array • Prediction and prevention of the acoustic resonance in the tube banks
6	Introduction to Computer and Information Technology	Undergraduate	<ul style="list-style-type: none"> • Fundamentals of C Language • Training of the program design
7	Computer and Information Technology (1)	Graduate	
8	Computer and Information Technology (2)	Graduate	<ul style="list-style-type: none"> • Fundamentals of the computer technology • Hardware, software and network